

上信越自動車道関係発掘調査報告書 I

よこ
横引遺跡
かご
籠峰遺跡
やなぎ
柳平遺跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上信越自動車道関係発掘調査報告書I

横引遺跡
籠峰遺跡
柳平遺跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上信越自動車道は、首都圏と上信越地方を結ぶ幹線道路として計画され、東京都練馬区を起点とし、埼玉県・群馬県・長野県を経て、新潟県上越市に至る全長280キロメートルの高速自動車道です。開通すると太平洋側と日本海側が結ばれ、それぞれの地域の発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

上信越自動車道については、新潟県教育委員会は昭和63年に分布調査を、平成4年から道路法線にかかる遺跡の発掘調査に着手し、平成9年には全線の発掘調査が終了する予定にしております。平成7年には、県境から中郷インターチェンジまでの発掘調査が完了し、現在完成にむけて着々と工事が進められています。

本書は、この道路の建設に先立って調査をした「横引遺跡」・「籠峰遺跡」・「柳平遺跡」の発掘調査報告書です。調査の結果、縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構や遺物が発見されています。各遺跡とも遺構はわずかしか発見されませんでしたが、横引遺跡の縄文時代前期の土器は中部地方の土器型式と共通し、古墳時代の土器は東海地方の土器の系譜を引くものも混在しています。また、柳平遺跡の平安時代の土器は長野県北部の土器と共に持ち、頸城平野周辺で出土している土器とは様相を異にしています。

このように古い時代においても、長野県境に近い頸城地方は隣接している諸地域から数多くの文化的影響を受けて人々が生活していることが明らかになりました。

今回の調査結果が、今後の本県における縄文時代のみならず、歴史を解明するための資料として広く活用され、広い意味での文化財に対する理解と認識を深める契機にしていただければ幸いです。

最後に、本書に対して多人なご協力とご援助を賜った地元の人々、ならびに中郷村教育委員会・妙高村教育委員会をはじめ、日本道路公团新潟建設局・同上越工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

新潟県教育委員会
教育長 平野清明

例　　言

1. 本報告書は新潟県中頃郡中郷村に所在する横引遺跡・籠峰遺跡、同郡妙高村に所在する柳平遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
3. 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）が平成4年度～6年度に実施した。
4. 整理および報告にかかる作業は平成6年度・7年度に実施し、埋文事業団職員がこれにあたった。
5. 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は横引遺跡を「ヨコ」、籠峰遺跡を「カゴ」、柳平遺跡を「ヤナギ」として出土地点・層位等を併記した。
6. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の地図を使用したものについては、それぞれにその出典を記した。
7. 遺物番号は遺跡ごとに通し番号とし、挿図と写真図版の番号は一致している。
8. 文中の注釈は頁ごとに脚注を付した。また、引用文献は著者および発行年を文中に〔 〕で示し、巻末に挿して掲載した。
9. 本書の記述は大滝良大（埋文事業団主任調査員、平成7年3月転出）、小池義人（同主任調査員）、星奈津子（同文化財調査員）、立木（土橋）由理子（同文化財調査員）、山崎天（同嘱託員）が担当した。分担は第I章、第IV章1・6A、第VI章2・3が小池、第III章、第VI章1が立木（土橋）、第V章が入滝・小池、第II章3、第IV章6Bが星、第II章1・2が山崎である。編集は小池が担当した。
10. 各遺跡については、1994年・1995年刊行の『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』に概要報告があるが、本書の記述をもって正式な報告とする。よって、上記『年報』と本書に齟齬のある点は、本書の記述をとるものとする。
11. 図版に使用した航空写真は株式会社国際航業が撮影したものである。
12. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示とご協力を賜った。厚く御礼申し上げる。（五十音順、敬称略）

小熊博史 川村浩司 北村亮 小島止巳 坂井秀弥 笹沢止史 高橋勲 谷藤保彦 繁跡喬
塚本師也 中郷村教育委員会 早津賢二 妙高村教育委員会 渡邊朋和

目 次

第Ⅰ章 序説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
3. 整理・報告の体制	2
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	3
1. 遺跡の位置と地理的環境	3
2. 周辺の遺跡	5
3. 頸南地域の歴史的環境	8
第Ⅲ章 横引遺跡	11
1. 遺跡の位置	11
2. 調査の概要	12
A. グリッドの設定	12
B. 調査の方法と経過	12
3. 層序	14
4. 遺構	15
A. 縄文時代の土坑	15
B. 平安時代の住居跡	15
5. 遺物	17
A. 縄文時代	17
B. 古墳時代	21
C. 平安時代	23
第Ⅳ章 龍峰遺跡	27
1. 過去の調査経緯	27
2. 遺跡の位置	28
3. 調査の方法	28
4. 層序	29
5. 遺構	30
6. 遺物	32
A. 土器	32
B. 石器	37
第Ⅴ章 柳平遺跡	39
1. 遺跡の位置	39
2. 調査の概要	39
A. 一次調査	39

B. 二次調査	40
C. グリッドの設定	40
3. 遺跡	40
A. 層序	40
B. 遺構	41
4. 遺物	43
A. 平安時代の遺物	44
B. 縄文時代の遺物	44
第VI章 まとめ	45
1. 横引遺跡	45
A. 縄文時代の土器について	45
B. 古墳時代の土器について	45
C. 平安時代の住居跡について	46
2. 篠峰遺跡	46
A. SK 3 覆土内の縄文時代中期前葉土器について	46
B. 縄文時代後期・晩期の柱穴列と土器について	48
3. 柳平遺跡	49
A. 住居の散在性について	49
B. 土師器の時期と系統について	50
《要約》	52
《引用・参考文献》	53
《別表》	57

挿図目次

第1図 妙高山東側山麓の景観	3
第2図 遺跡周辺地形図	4
第3図 周辺の遺跡分布図	6
第4図 近世における北信から頸南地域の主要交通路概略	8
第5図 横引遺跡位置図	11
第6図 横引遺跡調査対象範囲と一次調査トレンチ位置図	12
第7図 横引遺跡調査範囲とグリッド設定図	13
第8図 横引遺跡基本層序	14
第9図 横引遺跡遺構実測図 (SK 3)	15
第10図 横引遺跡遺構配置図	15
第11図 横引遺跡遺構実測図 (SI 1・SI 2)	16
第12図 縄文土器出土重量分布図 (南区)	17
第13図 縄文土器出土重量分布図 (北区)	19

第14図 古墳時代土師器出土重量分布図	21
第15図 籠峰遺跡調査区域図	27
第16図 籠峰遺跡位置図	28
第17図 籠峰遺跡調査区域全体図	29
第18図 籠峰遺跡上層柱状図	30
第19図 籠峰遺跡遺構実測図	31
第20図 IV層における縄文時代前期・中期土器の出土状況	34
第21図 II層における縄文時代後期・晩期土器の出土状況	35
第22図 柳平遺跡一次調査トレンチ図	39
第23図 柳平遺跡グリッド設定図	40
第24図 柳平遺跡自然流路土層断面図	41
第25図 柳平遺跡調査区全体図	42
第26図 柳平遺跡遺構実測図	43
第27図 籠峰遺跡遺構配置図	48
第28図 「北信系甕」とこれに共伴する土器	50

表 目 次

別表1 横引遺跡縄文土器観察表	別表5 横引遺跡鉄製品観察表
別表2 横引遺跡古墳時代土師器観察表	別表6 籠峰遺跡出土土器観察表
別表3 横引遺跡平安時代須恵器・土師器観察表	別表7 籠峰遺跡石器観察表
別表4 横引遺跡石器観察表	別表8 柳平遺跡出土土器観察表

図 版 目 次

図面

図版1 横引遺跡出土遺物実測図(1)	図版7 籠峰遺跡出土遺物実測図(2)
図版2 横引遺跡出土遺物実測図(2)	図版8 籠峰遺跡出土遺物実測図(3)
図版3 横引遺跡出土遺物実測図(3)	図版9 籠峰遺跡出土遺物実測図(4)
図版4 横引遺跡出土遺物実測図(4)	図版10 籠峰遺跡出土遺物実測図(5)
図版5 横引遺跡出土遺物実測図(5)	図版11 柳平遺跡出土遺物実測図(1)
図版6 籠峰遺跡出土遺物実測図(1)	図版12 柳平遺跡出土遺物実測図(2)

写真

横引遺跡

図版13 横引遺跡遠景 遺跡南側の露頭 南区基本層序

図版14 S I 1 · S I 2 S I 1 S I 2

- 図版15 SK3 燻出土状況 SK3 完掘状況 南区完掘状況
- 図版16 北区基本層序 北区調査風景 北区完掘状況
- 図版17 横引遺跡出土遺物 (1)
- 図版18 横引遺跡出土遺物 (2)
- 図版19 横引遺跡出土遺物 (3)
- 図版20 横引遺跡出土遺物 (4)
- 龍峰遺跡
- 図版21 龍峰遺跡周辺の景観 調査区域全景
- 図版22 SB1・SB2付近 SB1柱穴半截状況 SB2柱穴半截状況
- 図版23 龍峰遺跡遠景 土層堆積状況 SB1柱穴完掘状況 SB2柱穴完掘状況
SB2-P4半截状況 SK5・SK6完掘状況 SX4検出状況 SX4埋設土器半截状況
- 図版24 龍峰遺跡出土遺物 (1)
- 図版25 龍峰遺跡出土遺物 (2)
- 図版26 龍峰遺跡出土遺物 (3)
- 図版27 龍峰遺跡出土遺物 (4)
- 図版28 龍峰遺跡出土遺物 (5)
- 柳平遺跡
- 図版29 二次調査着手時の状況 二次調査調査区全景 (1) 二次調査調査区全景 (2)
- 図版30 自然流路検出状況 自然流路完掘状況 自然流路土層断面a-a'
自然流路土層断面b-b' 自然流路土層断面c-c'
- 図版31 自然流路1(6F)遺物出土状況 自然流路1(5D)遺物出土状況
ピット1半截状況 ピット1完掘状況 ピット2半截状況 ピット2完掘状況
ピット5~8配列状況 ピット3完掘状況
- 図版32 柳平遺跡出土遺物 (1)
- 図版33 柳平遺跡出土遺物 (2)

第Ⅰ章 序説

1. 調査に至る経緯

上信越自動車道は、首都圏と上信越地方を結ぶ幹線道路として計画され、東京都練馬区を起点として、埼玉県、群馬県、長野県を経て新潟県上越市に至る全延長280km（関越自動車道および長野自動車道との重複区間約80kmを含む）の高速自動車道国道である。

櫛引遺跡・籠峰遺跡・柳平遺跡にかかる、第10次施工命令区間（長野県中野市～新潟県中頃郡中郷村、延長38.4km）は、昭和63年9月に施工命令が出され、これ以後、法線内の遺跡分布調査・試掘調査等に関する協議が本格化した。県教委は同年11月14日から同月19日に、第10次施工命令区間の踏査を行い、周知の遺跡14か所、新発見の遺跡2か所、遺跡推定地7か所、総計848,000m²について調査が必要である旨、日本道路公団新潟建設局に通知している。なお、本報告書の3遺跡は、いずれもこの時点で周知されていたものである。

上信越自動車道関係の発掘調査は平成4年から始まり、同年に設立された財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が、県教委の委託を受けて発掘調査業務を担当している。

2. 調査体制

平成4年度

主 体	新潟県教育委員会（教育長 木間栄三郎）
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 木間栄三郎）
管 理	藍原直木（専務理事・事務局長） 渡辺耕吉（総務課長） 茂田井信彦（調査課長）
庶 務	藤田守彦（総務課主事）
[籠峰遺跡一次調査]	平成4年6月16日～6月25日
調査指導	戸根与八郎（調査課調査第一係長）
調査職員	高橋一功（同 専門員）

平成5年度

主 体	新潟県教育委員会（教育長 木間栄三郎）
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 木間栄三郎）
管 理	藍原直木（専務理事・事務局長） 渡辺耕吉（総務課長） 茂田井信彦（調査課長）
庶 務	藤田守彦（総務課土事）
調査指導	藤巻正信（調査課調査第一係長）

〔横引遺跡一次調査・二次調査〕 平成5年5月10日～7月6日

調査職員 小池義人（調査課専門員）

武田孝昭（同）

土橋由理子（同）

〔龍峰遺跡二次調査〕 平成5年6月24～8月20日

調査職員 小池義人（調査課専門員）

武田孝昭（同）

〔柳平遺跡一次調査〕

調査職員 藤田豊明（調査課主任）

小池義人（同専門員）

武田孝昭（同）

土橋由理子（同）

平成6年度

主 体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管 理 藍原 直木（事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

調査指導 藤巻 正信（調査課第一係長）

〔柳平遺跡二次調査〕 平成6年5月9日～6月10日

調査職員 土橋由理子（調査課調査員）

大滝 良大（同主任調査員）

内山 良典（同嘱託）

3. 整理・報告の体制

整理・報告は、県教委の委託を受けて、埋文事業団が実施した。報告書作成の実質的な作業および原稿記述は平成6年度を行い、編集作業は平成7年度に行った。

主 体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

整理・報告 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）

管 理 藍原 直木（事務局長）

山上 利雄（総務課長）

龜井 功（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指 導 藤巻 正信（調査課第一係長）

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

妙高山（標高2,454m）は新潟県南西部にそびえ、東方から北東方向に広大な裾野を有する。横引遺跡・龍峰遺跡・柳平遺跡はその北東側山麓の斜面に位置し、標高はそれぞれ、約290m・約330m・約410mである。行政区としては、横引遺跡・龍峰遺跡が中頸城郡中郷村に、柳平遺跡が同郡妙高村に所在し、北方の横引遺跡から南方の柳平遺跡までの距離は約3.5kmを測る。関川を挟んだ妙高山麓の東側は関田山脈の南端部にあたり、関田山脈の北側に東頸城丘陵が北東へ連なる。関田山脈の南東側斜面は飯山盆地に急傾斜で落ち込むが、北東側斜面は緩傾斜で中郷・妙高両村へと下る。関川は妙高山麓の東縁を北流しており、關川左岸にJR信越本線・国道18号線・同バイパスが南から北へ縱断する。

妙高山を含む6つの火山は妙高火山群を構成しており、激しい噴火活動と隆起運動をくり返しながら現在の地形を形成してきたものである。妙高山・黒姫山・飯繩山が南北方向より少し西に傾いて直線上にならび、妙高山の北西に燎山、南に佐渡山、南東にやや離れて斑尾山が位置する。妙高山の具体的な活動は更新世中期に始まり、沖積世の中央火口丘形成期にいたるまでI~IV期に区分できる〔早津1985〕。このうち洪積世末期から沖積世初期における第IV活動期はさらに、先カルデラ期・カルデラ形成期・中央火口丘形成期の3期に細分される。特に後述する妙高中央火口丘形成期の噴火と、それによって発生した二つの火砕流堆積物は現地形に著しい影響をあたえており、縄文時代の鍵塔として妙高山を中心とした地域における遺跡の年代決定に役立っている。

火砕流堆積物とは、火口に盛り上がった粘り気の強い溶岩の先端部が崩壊し、高速かつ高温で斜面を流下し裾野に堆積したものという。他方、泥流堆積物は山体の一部分が崩壊し地下水や表面の土層と混じり



第1図 妙高山東側山麓の景観（妙高高原町兼俣方面から）



第2図 遺跡周辺地形図

国土地理院 昭和53年9月発行
1:200,000原図

合いながら崩れ落ち堆積したものであり。この泥流堆積物に比べ水分の少ないものを岩屑流堆積物という。妙高山の場合、噴火や崩落による3種の堆積物は谷を流れる大田切川・片貝川・矢代川・渋江川などの流域に沿って流出し、最北端は矢代川に沿って新井市まで達している。

赤倉火碎流（旧期火碎流・AK-p）は、妙高火山中央火口丘の形成初期に溢出したもので、くり返し噴出された火山灰や火碎流の分布範囲は北の片貝川流域から南の池の平南方にまで東麓一帯におよぶ。関川以西の妙高山麓では数m～数10mの層厚を有し、直径数10cm～数mの岩片が多く含まれる。妙高高原町の関川谷内A遺跡（1994年県教委・埋文事業団調査）では、赤倉火碎流が縄文時代前期中葉の有尾式土器を含む黒色土を覆っており、有尾式期以降の堆積年代を与えられる。また大田切川火碎流（新期火碎流・OT-p）は、妙高山東方から北東にかけて小二俣川・関川・片貝川流域に分布する。新井市の原通八ツ塚では、

大田切川火碎流が縄文時代中期の新保・新崎式土器を含む黒色土を覆っており [小野1982]、新保・新崎式期以降の堆積年代を与えられている。大田切川火碎流流出をもって妙高山は活発な噴出活動を休止しているため、大田切川火碎流堆積物は妙高山の東方から北東山麓にかけての地勢形成に多大な影響をおよぼしている。^{註1)}

この2つの火碎流堆積層は頸南地域の遺跡で広く確認されている。櫛引遺跡では大田切川火碎流・赤倉火碎流とともに火成岩が黒色土層中に挟在しており [土橋1994]、基盤層は約1,9万年前のカルデラ形成期に大倉山と火打山に挟まれた地域の崩落によって堆積した矢代川岩屑流で形成される。龍峰遺跡では大田切川火碎流が縄文時代の中期と後期・晩期をわける層位として堆積し、赤倉火碎流は厚い基盤層となっている。柳半遺跡は基盤層として大田切川火碎流が厚く堆積し、黒色土層中に焼山火成岩層のひとつであるKG-cが堆積する。KG-cは焼山起源の火成岩層としては最も分布が広く、焼山の東方一帯に広く分布し、10世紀後半ないしその直前に噴出されたと考えられている [早津1994]。なお、焼山（標高2,400m）は、近年では1949（昭和24）年・1974（昭和49）年などに爆発を起こしている。

妙高山は北から東斜面を何本もの渓流が谷を下る。その結果、山間部では激しい浸食作用が働き、険しい地形を刻む。上流から削り取られた土砂は中・下流域においては扇状地や沖積地を形成し発達させる。主な支流のひとつである大田切川は、上流において浸食作用により深いV字谷を刻み、下流においては側刻作用により急激に落ち込む壁と広く平らな谷底を有するU字谷を形成して関川に合流する。関川は信越県境に源を発し、流長64km、流域面積1,143km²、妙高山の東尾根を流れる支流のほぼ全てをまとめ、高田平野から日本海にそそぐ。関川は1982（昭和57）年の水害を契機として大規模な治水事業が進められる一方、水力発電や工業用水・農業用水など上越地方の生活と産業に豊かな恵みをあたえている。

2. 周辺の遺跡

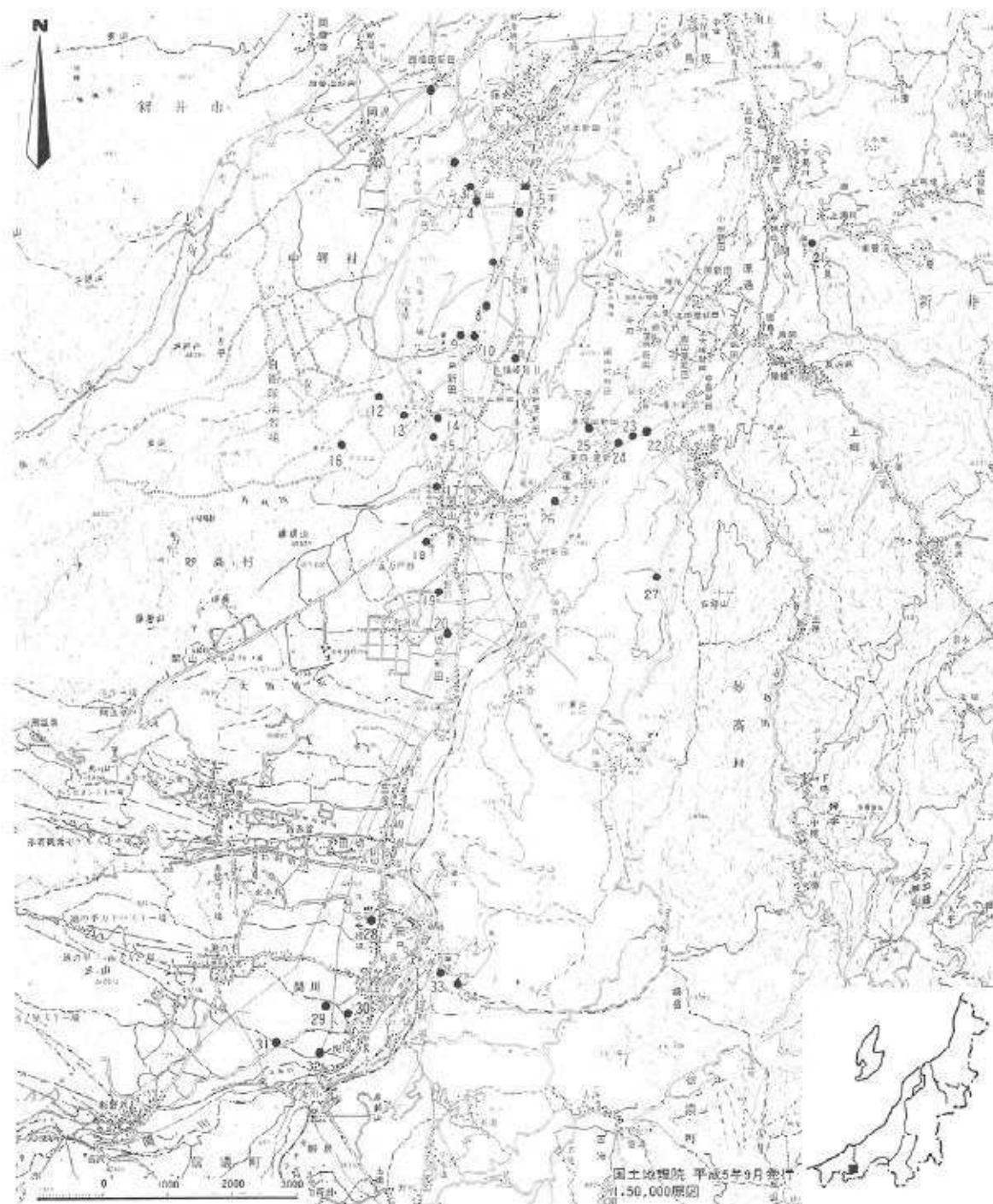
妙高山麓の遺跡は、1966（昭和41）年に『頸南—中頸城郡南部学術総合調査報告書』の中で「先史・古代の頸南」[室岡1966]としてまとめられ、新井市・板倉町・中郷村・妙高村・妙高高原町の5市町村に所在する53遺跡の時期および出土遺物を報告している。その後、恩賜圃場整備事業、各種開発事業や近年における国道18号線バイパス・上信越自動車道建設に伴う発掘調査により新たな遺跡が確認され、頸南地方の歴史解明に詳細な資料を提供している。また妙高火山群の火山噴出物は鍾乳層として注目され、早津賢二氏らの地質学研究者が発掘調査に提携し、すでに豊富な研究成果を蓄積している。特に妙高山麓に分布する遺跡の調査では、「位置と地理的環境」で前述したように、大田切川火成岩（OT-a）・火碎流（OT-p）堆積層と赤倉火成岩（AK-a）・火碎流（AK-p）堆積層との層位関係が重視されている。

以下、時期を追って妙高山麓の遺跡を概観する。

旧石器時代の遺跡は、頸城地方を通して、上越市灰塚の大塚遺跡と新井市濁川の鴻ノ巣遺跡・鴻ノ巣東遺跡が確実視されているのみで、妙高山麓では火山噴出物に厚く覆われているためか、現在のところ皆無である。ただし、人塚遺跡の尖頭器 [望月1994] については旧石器時代に遡る可能性が残されている。

註1) 「早津1985】319頁には、「八ツ塚遺跡で中丸火口丘新期火碎流（大田切川火碎流）として、記述されたもの（小野編、1983）は、下位の赤倉火碎流であることが明らかとなった。」とする記載がある。

2. 周辺の遺跡



1. 小丸山遺跡	縄文(後~晩)	13. 湯の沢遺跡群	縄文(前・中・後)	25. 上ノ宇遺跡	縄文(晩)
2. 野林道路	縄文(中)	14. 龍峰遺跡	縄文(中・晩)	26. 萬生遺跡	縄文(後・晩)
3. 八斗荷原遺跡	縄文(早・前)	15. 和泉A遺跡	縄文(中・晩)・洋生	27. 中古遺跡	縄文(早~晩)
4. 上中馬遺跡	縄文(中)	16. 動的山遺跡群	縄文(前・中)	28. 東浦遺跡	縄文・平安
5. 一本木西林道跡	縄文(中・後~晩)	17. 間山神社跡塚	中世	29. 間川谷内A遺跡	縄文(早・前)・平安
6. 奥の原(西條)遺跡	縄文(後~晩)	18. 桐平遺跡	平安	間川谷内B遺跡	"
7. 中ノ原遺跡	平安	19. 小野沢西遺跡	古墳	30. 中ノ沢遺跡	縄文(早・前)・平安
8. 鹿畠B遺跡	縄文(前)・平安	20. 大洞原C遺跡	古墳	31. 茅ノ本坂遺跡	縄文(後・晩)
9. 桐引遺跡	縄文(前)・古墳・平安	21. 大貝遺跡	縄文(中)	32. 大堀遺跡	縄文(草創~前)・平安
10. 小重瀬跡	縄文(前)・中世	22. 桥ノ木町遺跡	縄文(前・中)	33. 兼俣A遺跡	縄文(前~後)
11. 南田遺跡	縄文(中)・中世	23. 逆澤遺跡	縄文(中・後)	34. 兼俣B遺跡	縄文(後)
12. 松ヶ峰遺跡群	縄文(早~前)	24. 東山ヶ尾新田遺跡	縄文(後)		

第3図 周辺の遺跡分布図

縄文時代の遺跡分布は、妙高山裾野周縁部に集中するが、妙高高原町田切から妙高村関山の間は遺跡密度が低い。これは大田切川火碎流層が厚く堆積しているためで、中期中葉以降の遺跡が散在するにすぎない。縄文時代草創期から前期中葉にかけては、妙高高原町関川集落西方の緩斜面に位置する大堀遺跡〔和田1995〕、関川谷内A・B遺跡〔小池1995・滝沢1995〕、中ノ沢遺跡〔阿部1995〕において良好な遺物が多数出土している。大堀遺跡では、赤倉火碎流より下位にある田口岩屑流堆積層（約8,000年前）の下層に縄文時代草創期・早期の土器と陥穴状の土坑が確認されたことが注目される。このほか、妙高山北東側緩斜面に位置する松ヶ峰遺跡群〔室岡1966〕、大重沢B遺跡〔戸根1993〕、古塔山西方の盆地状地形に所存する中古遺跡〔室岡1986b〕、高床山周辺の遺跡群〔高橋1994〕においても押型文土器をはじめとする早期から前期前葉の土器が出土している。

縄文時代前期後葉から中期前葉の遺跡は、主に妙高山北東側斜面に点在する。湯の沢B遺跡〔室岡1966a〕をはじめ、龍峰遺跡〔中郷村教委1987〕・相原A遺跡〔荒川1994〕では下位の赤倉火碎流堆積物と上位の大田切川火碎流堆積物に挟まれた土層で遺構・遺物が検出されている。また、高床山南方の平坦地に位置する柿ノ木町遺跡〔親跡1992〕、道添遺跡〔室岡1994〕、この両地北東側古地上にある大貝遺跡〔岡本1967〕も当該期が主体を占める。

縄文時代中期中葉から後期・晩期の遺跡は、大田切川火碎流堆積層より上位に包含層がある。遺跡の分布は、前期後葉から中期前葉の遺跡とはほぼ共通しており、良好な遺跡が点在する。龍峰遺跡では9基の竪穴住居跡や多数の配石遺構などが検出されている〔中郷村教委1987〕。龍峰遺跡で特筆される石棺状配石遺構は県内では東頸城郡浦川原村圓聖寺遺跡においてはじめて発見され〔浦川原村教委1959〕、頸南地方では森生遺跡で検出されたのを契機とし〔中川1967〕、奥の城（西峰）遺跡・二本木西林遺跡〔岡本1982〕、小丸山遺跡〔親跡1990〕でも確認されている。このほか、中期後葉から後期前葉を主体とする兼保遺跡A地区〔本間1976〕、後期中葉から晩期を主体とする兼保遺跡D地区〔室岡1986a〕、後期後葉を主体とするトッ平遺跡〔親跡1992〕などが調査されている。

弥生時代・古墳時代の遺跡は分布が希薄であり、龍峰遺跡、横引遺跡で遺物が採集されているのみであったが、小野沢西遺跡（県教委1994・1995調査）で弥生～古墳時代の土器が多量に出土している。なお、中郷村以南の頸南地域には古墳は存在していない。

奈良・平安時代の遺跡はきわめて少數であったが、近年の発掘調査がこれまでの認識に大きな修正を迫っている。第VI章3で記述するように、小規模の遺跡が散在しており、頸城平野とは異なる生活様態が明らかになりつつある。

中世の史料はほとんどが関山神社に集約される。関山神社は古くは関山三社権現と呼ばれ、いわゆる山岳修驗の隆盛と共に山林抖擞や巡礼のメッカとして人々の崇敬をあつめた。これに関する資料として、1916（大正5）年、関川神社社殿南側から出土した13世紀代とされる銅製經筒・壺などがある〔吉岡1977〕。また、関山神社が所蔵する阿弥陀三尊・石仏群は中世の製作とされ、貴重な仏教文化財を今に伝えている。中世の生活跡としては、南田遺跡で住居跡と四面廂を伴う大型建物跡が多数確認された「親跡1988」ほか、小重遺跡〔戸根・鈴木1995〕では掘立柱建物跡1基・井戸・溝・集石墓群ならびに備蓄罐が出土し、鐵造國の比率とサシ単位の錢種・数量が報告されている。

3. 顕南地域の歴史的環境

A. 交通

「頸南」は中頸城郡の南部をさす行政区画上の通称であり、妙高高原町・妙高村・中郷村・新井市・板倉町がこれに含まれる。地理的には平野部が新井市の北部に存在するにすぎず、ここでは妙高山東方から北東の山麓斜面と関田山脈北側の山間地を指す語として「頸南」を用いる。

古代頸南における交通路の詳細は不明である。しかし、この地は信濃と国境を接する地域であるため、頸城郡内に所在した越後国府と信濃、さらに北陸道と東山道をつなぐ交通上の要地として古くから重要な役割を果たしていた。10世紀初頭に編纂された『延喜式』には、東山道の支道について頸南地方との関わ



第4図 近世における北信から頸南地域の主要交通路概略

国土地理院 昭和53年12月発行
1:200,000原図

りを示唆する記事が記されている。これによると信濃国では東山道の支道が錦織駅～麻績駅～曰理駅～多古駅～沼辺駅と日本海側へ向って設置されている。沼辺駅が野尻湖畔に比定されていることから、支道は現熊坂集落付近を経て頸南地域を通過し、頸城のいすこかにあったとされる国府へと縫いていたことが推測できる。この東山道から越後に至る道は、「古事記」垂仁天皇の条にみえる高志国和那美の水門の物語にその存在が記されていることから、8世紀初めにはすでに利用されていたと考えられる。畿内政権が東山道を有効に活用し、東国を支配下に組み込んでいく過程で、越後への道も次第に整備されていったのだろう。越後国に入つてのちの道筋は不明であるが、これまでの研究によりいくつかの経路が想定されている〔平野1978〕。妙高山麓に沿つて直江津をめざす道、頸城平野の東側山麓を横切つて柿崎町直海浜に至る道、さらにこれらの経路の中央を貫き関川西岸に沿つて走る道などが土なものである。

中世以降、頸城は直江津を中心に国府所在地として賑わいを増した。交通上は東国と西国をつなぐ結節点であったため、陸路や海路を利用して諸国から多くの文人・宗教者・巡礼者・商業者が訪れ、物資や文化の往来が行われた。とりわけ越後府中から関川を経て信濃をめざす道は、普光寺や戸隠へ参詣に向かう人々に多用され、信仰の道となつた。関山三社権現の項で述べる京都常光院の懇意法印も越中から越後府中を経由して善光寺參詣に赴いている。またこの経路のほかに頸城と信濃を結ぶ道として、新井から北信の飯山に至る飯山街道などが併せて利用されていた。中世末期になると上杉氏支配の下で軍事上の交通路と要衝確保の必要から、越後府中より信濃に至る街道と宿場の整備が急速に進められた。これは江戸時代の領主に藩内の交通政策として受け継がれ、北国街道へと編成されていった。

北国街道は中山道追分宿から分岐し、高田城下（のちに出雲崎）に至る街道である。この中で妙高山麓に相当する部分を中山道と称し、通過する新井・二本木・松崎・関山・二俣・田切・上原・関川の宿場を中山八宿と呼んでいる。近世中期以降になると飛躍的に商品流通が発達して北国街道は信越を結ぶ大動脈として機能し、中山八宿も輸送物資の駄賃収入や宿泊料を経営の基盤とした。しかし、最大の輸送物資である塩をはじめとして、新井宿から関山山脈を越えて飯山方面に物資輸送する動きが増加したため二本木・関川間の宿場は収入を減じ、高田城下の問屋および他宿との間で絶えず係争を繰り返していた。

北国街道を往還する物資・人員を管理したのが、「重き御関所」関川関所である。関川関所は天正二（1574）年に上杉謙信が青野関を関川に移したのが始まりと言われ、その後承応二（1653）年に高田藩主松平光長がこれを口留番所とし、元禄十（1697）年に幕府管轄の関所となっている。一方、藩境付近の集落にも口留番所が置かれ、藩の支配下で物資・人員の移動を管理していた。延宝七（1679）年の「越州四郡信州逆本郷高帳」〔中村ほか1981〕によれば、頸南の信越国境には下記口留番所の記載がある。多数の口留番所は、上述した飯山方面との交流を裏付けるものであろう。

上平丸村（新井市）・下平丸村（新井市）・長沢村（新井市）・大谷村（妙高村）
田口村（妙高高原町）・桶海村（妙高村）・土路村（妙高村）・小沢村（新井市）
樽本村（妙高村）・関田村（板倉町）・山寺猿供養寺（板倉町）・筒方村（板倉町）

B. 古代の郷と莊保

『倭名類聚抄』によると、古代の頸城郡は「沼川・都宇・栗原・荒木（原木）・板倉・高津・物部・五十公・夷守・佐味」の10郷で構成されていた。このうち、都宇・栗原・板倉・高津・物部・五十公・夷守・佐味が、中世文書や現地名との照合・検討により、頸城平野における郷としてそれぞれ比定地が推定され

ている。頸南地域については栗原郷として新井市栗原付近が有力視されているほかは、『中郷村史』が妙高山麓一帯を荒木（原本）郷に比定している〔平野1978〕が、実証史料に乏しく、不明である。

荘園制が確立する11世紀半ば以降、越後国においても土地開発の勢いが高まり、各地に多くの荘園が設置されていく。しかし、国府を擁する頸城郡は、在庁官人によって公領の開発が盛んに行われ私領化されたため、国衙領が土地の大半を占めていた。頸城郡内の荘園として、雀倉荘・二善荘・岡田荘・黒川荘など荘名は数多く挙げられているが、存在が確実で該当地が明らかにされているのは唯一柿崎町から吉川町にかけての佐味荘のみである。一方、国衙領は郷・保と称され、現在の上越市や新井市など平野部から丘陵にかけて郡内の主要な地域を占めていた。中世・近世史料にみえる頸城郡内の保の数は、現在確認されている越後国内の国衙領全体のほぼ半数近くを占める。頸城平野南部では新井市域に荒井保・中河保が、板倉町に田井保が比定されているが、山間部の地域については不明である。

C. 関山三社権現

南北朝の混乱を経たのち越後国では、上杉氏が守護として、長尾氏がその守護代として実権を握るにいたった。古代以来の国府所在地である頸城は領国經營の最大の拠点とされ、越後国における政治・経済・文化の中心として展開していった。妙高村の関山神社はかつて関山三社権現と称され、中世に頸城地方における信仰の中心として勢力を拡大した。関山神社の縁起は関山三社権現の開基と妙高山の開山とともに和銅元（708）年、裸行（裸形）上人に仮託している。開基・開山の時期については不明であるが、裸行上人は熊野修験の縁起に詔られる人物であることから、妙高山は遅歴する熊野系修験者によって行場として開かれ、関山三社権現はその里宮として成立したと考えられている〔大場1978〕。修験道の浸透とともに中世末期に最盛期を迎えた関山三社権現は頸城はもとより広く越後全域で人々の信仰を集めた。また別当寺の宝蔵院のもとで広大な権現社領を所有し、関山一帯に多くの寺社を擁したという。戦国武将の起請文には弥彦太明神や居多太明神などを並んで「当國鎮守」として名前が挙げられている〔皆川・花ヶ前1983〕ほか、15世紀半ば、普光寺参詣の途中関山に立ち寄った京都常光院の堯恵法印は、その折のことを「普光寺紀行」で「限なき行ゑの隔に聞えし関の山も是ならん」と記しており〔金子1987〕、越後国外にもその名が知られていたことを伝えている。上杉謙信の支配下では関山が信濃国との交通の要衝に位置する重要な軍事拠点とされていたことから、宝蔵院の有した多くの僧兵が「関山宝蔵院ノ衆徒」〔高橋1928〕（『越後史料』卷4 667頁）として時には戦力の一端を担うこともあった。

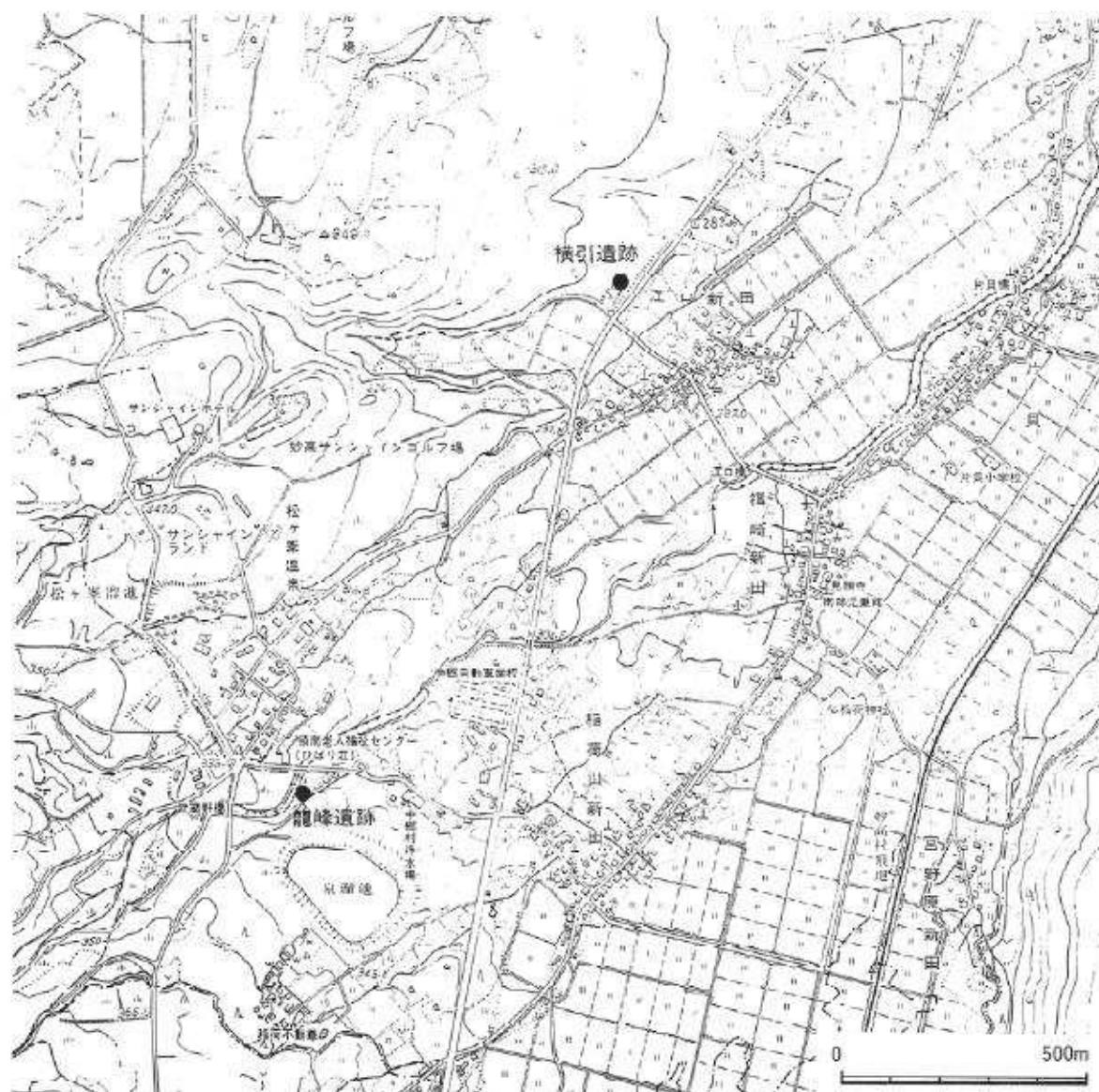
戦国時代の動乱のなかで一時衰退したものの、江戸時代初期に再興を許された関山三社権現は、往時の修験道的色彩が薄らぎ庶民の参詣の場として古志や魚沼など遠方からも信仰者を集めめた。また経済基盤として現妙高村の関山集落付近から妙高山・火打山にいたる広大な土地を所有する封建領主的な性格をも備えていた。明治元（1868）年には、維新政府による神仏分離政策に従って宝蔵院が廢されたほか、関山三社権現も関山神社に改められて現在にいたっている。

第III章 横引遺跡

1. 遺跡の位置

横引遺跡は中頸城郡中郷村大字市屋字横引（乙）687-2 ほかに所在する。遺跡の東方約700mのところには関川水系の片貝川が北流している。遺跡は妙高山北東山麓の、南から北にかけて緩やかに傾斜する斜面上にある。標高は約283～297mである。

調査開始時点の遺跡の状態は、国道18号線沿い西側にある山林であった。遺跡周辺の現況は、片貝川流域が水田として利用されているほか、片貝川の西側に広がる山麓部には、なだらかな斜面を生かして、自衛隊の演習場やゴルフ場になっている。



第5図 横引遺跡位置図 (中郷村役場発行「中郷村全図2」1:10,000原図 平成2年)

2. 調査の概要

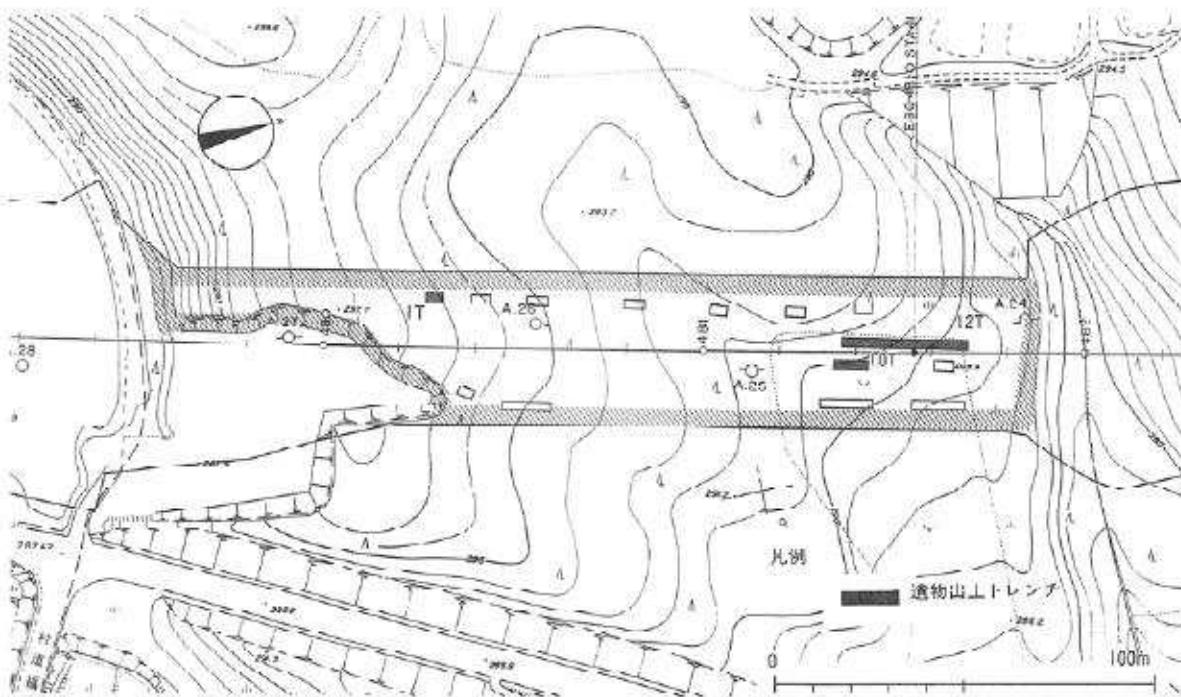
A. グリッドの設定 (第7図・第12図)

グリッド杭の打設は測量業者に委託した。グリッドは大・小の2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25等分したものである。大グリッドの方向と区割りは上信越自動車道のセンター杭を基準にした。大グリッドの主軸はSTA 481+00 (X=105992.538 Y=-24739.335) と STA 481+80 (X=106070.705 Y=-24722.308) を結んだラインとした。主軸の方位は真北から12度33分40秒東偏している。グリッドの呼称は主軸方向に南から順に算用数字、東西方向に西から順にアルファベットを付して、「5 A」のように組み合わせで示した。小グリッドは1~25の算用数字で表し、「5 A 1」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。

B. 調査の方法と経過

1) 概要

発掘調査は平成5年5月25日から7月6日まで実施した。発掘調査に先立ち対象地7,800 m²に対して一次調査を行い、調査範囲内の遺構・遺物の分布状況を確認した。その結果、調査範囲は2,800 m²に限定された。5月19日にプレハブを設置し、5月24日までに器材の搬入・整備を終了した。5月17日から表土除去を開始し、5月25日から6月18日に作業員を投入して発掘調査を行った。実測作業は7月6日まで引き続き行った。なお、6月18日から次の発掘現場である籠峰遺跡への器材の移動や、発掘予定地の草刈りなどの事前準備を並行して行った。6月28日にはプレハブを解体し、籠峰遺跡への移動を終了した。



第6図 横引遺跡調査対象範囲と一次調査トレンチ位置図

2) 一次調査

一次調査は5月11・12日に行った。合計14か所のトレンチを2台のバックホーを用いて少しづつ掘り下げながら、調査員による精査を並行して進めた。調査の結果、1・10・12トレンチから土師器、10トレンチから縄文土器と土師器が出土した。遺構は検出されなかつたが、遺跡北東端は重機により地山まで搅乱を受けており、包含層が残っていないことが明らかとなつた。

3) 表土除去

5月17日からバックホー2台で表土除去を開始した。それと並行してサブトレンチを設定し、土層観察を行つた。表土除去の段階で、遺物の出土する範囲が南側と北側の2か所に分かれることが予想されたため、あらかじめ調査対象範囲内を「南区」と「北区」に分けて調査を進めることにした。

4) 包含層発掘・遺構精査

包含層発掘は出土遺物を層位別小グリッド単位で取り上げながら進めた。調査対象地が山林であったために木の根による搅乱部分が多く、包含層の堆積状態は良好とは言い難いものであった。そのため、出土遺物にかなりの時期幅があったが、一部を除いてそれらを層位的に分離することはできなかつた。また、堆積している土が黒褐色あるいは黒色土ばかりであったために、遺構の検出も非常に困難をきわめた。

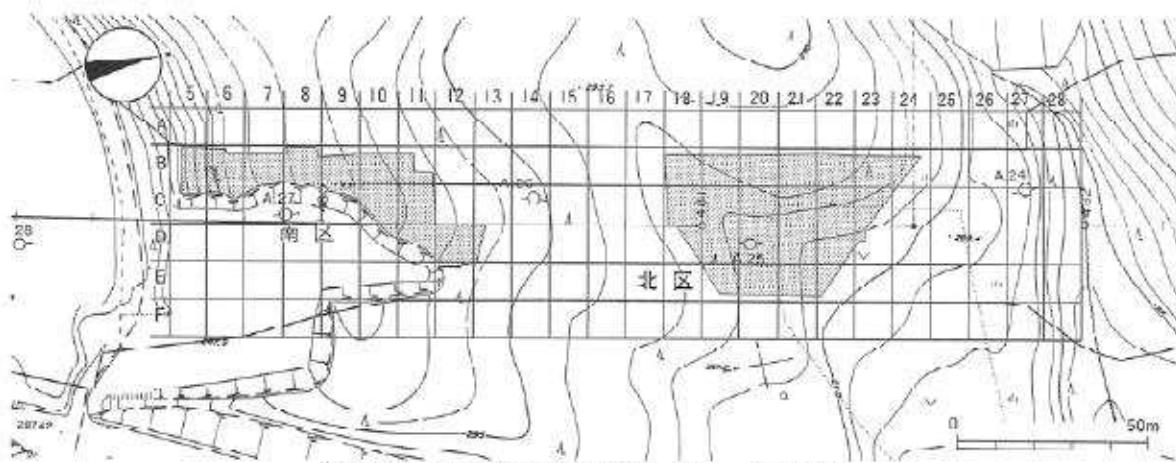
C. 南区の調査

5月25日～6月8日まで南区の発掘を行つた。調査開始時から、調査区南側の斜面から縄文土器、中央部で土師器が多く出土する傾向がみられた。遺構精査をしてピットのようなものも幾つか検出されたが、半蔵すると地山の溝みに黒色土が入り込んだものばかりであった。結局、平安時代の住居跡が2棟検出されたほか、住居跡の調査を進める過程で縄文時代の土坑が1基検出されたのみであつた。

D. 北区の調査

6月3日から南区と一部並行する形で調査に入った。木の根による搅乱がとくにひどく、遺物の出土状況は良好とは言えなかつた。遺構精査も行ったが、倒木痕が幾つか検出されたのみである。

北区と南区の中間で遺物の分布が非常に希薄な部分については、バックホーを用いて包含層を掘り下げた。遺物はほとんど出土せず、遺構も検出されなかつた。



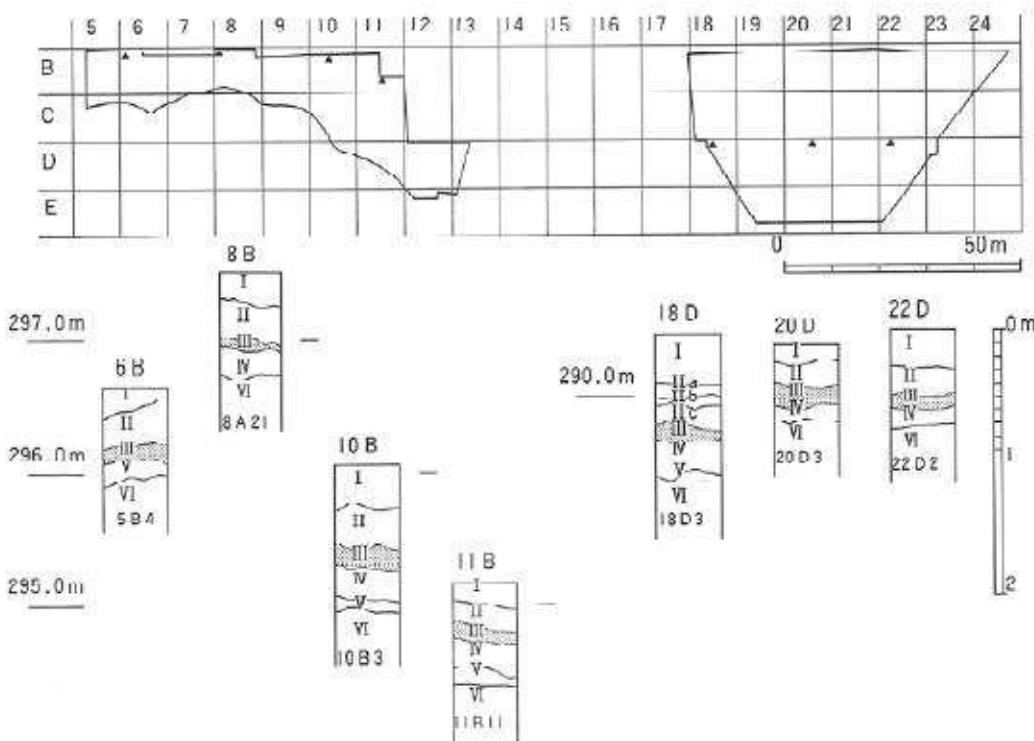
3. 層序

はじめに横引遺跡の調査範囲内の微地形について触れておく。南区は5ラインあたりが南面する斜面地であり、6～8ラインに平坦面がある。9ライン付近から北にむけて標高が低くなり、北区へ至る。北区は全体的には平坦である。北区の北端は、東流する沢に接している。斜面地であるが、両区を通じて上層の堆積状況はほぼ一定している。基本層序は次のとおりである。

- I 層：黒褐色土。現表土である。
- II 層：黒色土。縛まり、粘性ともに弱い。混入物は少ない。縄文時代前期～平安時代の遺物包含層。
- II b層：大田切川火碎流に伴う火山灰層で、北区南端の沢部にのみ存在する。層中に挟在するため、b層があるところはその上位を II a層、下位を II c層とした。
- III 層：赤倉火碎流に伴う火山灰層。
- IV 層：黒色土。多孔質の安山岩の細礫を多く含み、人頭大の礫が点在する。縄文時代前期の遺物包含層。
- V 層：黒褐色土。混入物は層と同様だが、粒度が比較的大きい。場所によっては堆積していない。
- VI 層：矢代川岩屑流堆積物層。(この層を発掘限界とした。)

調査区は現状でも南から北に傾斜しているが、遺物包含層の下位のIII層上面もほぼ同様の地形である。III層上面の標高は、南区でおよそ297～295m、北区でおよそ290mである。

遺物包含層はII層（II a層・II c層を含む）とIV層である。II層には縄文時代前期から平安時代までの遺物が混在している。IV層には縄文時代前期の遺物が含まれていることが北区でのみ確認された。遺物の所属時期は南区と北区では若干異なり、南区では縄文時代と平安時代、北区では縄文時代から古墳時代の遺物が主に出土した。



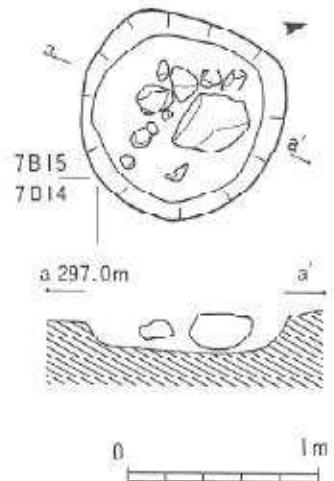
第8図 横引遺跡基本層序

4. 遺構

遺構には縄文時代晚期の土坑1基と平安時代の住居跡2棟がある。すべて南区の7Bグリッドで検出された。

A. 縄文時代の土坑 SK 3 (第9図)

竈跡(S I 1)の下位から検出された。VI層を円形の深皿状に掘り込んでおり、直径105~107cm、深さ10cmである。この土坑からは晩期の条痕文土器2個体と、VI層に含まれている礫が出土した。土器は礫の上部から、礫は底部上面から集中して出土した。土器は条痕の違いから2個体と判断したが、いずれも完形にはならない。礫に被熱した痕跡なく、炭化物の付着もみられなかった。また、土坑の底部からも焼土や炭化物は検出されていない。この土坑については形成時期が縄文時代晚期と思われるが、性格などは不明である。



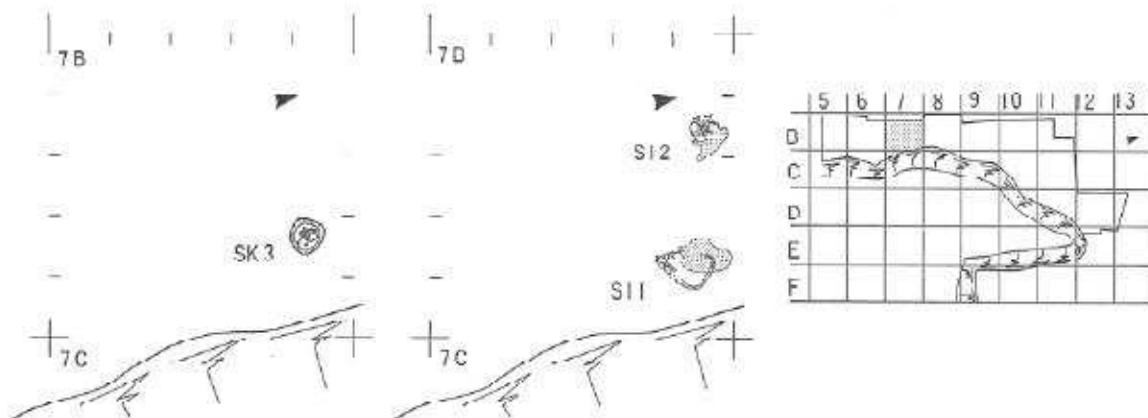
第9図 横引遺跡遺構実測図
(SK 3)

B. 平安時代の住居跡 (第10図)

II層中で住居跡を2棟検出した。検出レベルはほぼ等しい。2棟とも竈の石組みと床面だけが残存しており、それに伴う住居の壁面や煙道、柱穴などは残っていなかった。そのため両者の切り合い関係は不明であり、共存関係や新旧関係を明らかにすることはできなかった。

S I 1

残存する石組みの形態は、炊口が北東方向に開くU字形で、奥行き50cm、幅75cmである。石組みに使われていた礫はVI層中に含まれている礫で、被熱し、赤化していた。石組みの内側には黒色土とともに石組みに使われている礫と同様の礫が入り込んでいた。これらは竈が壊れた際崩落してきたものと推定される。なお、石組みの内側や炊口部分で焼土や炭化物は検出されなかった。炊口の前方には幅120cm、奥行き100

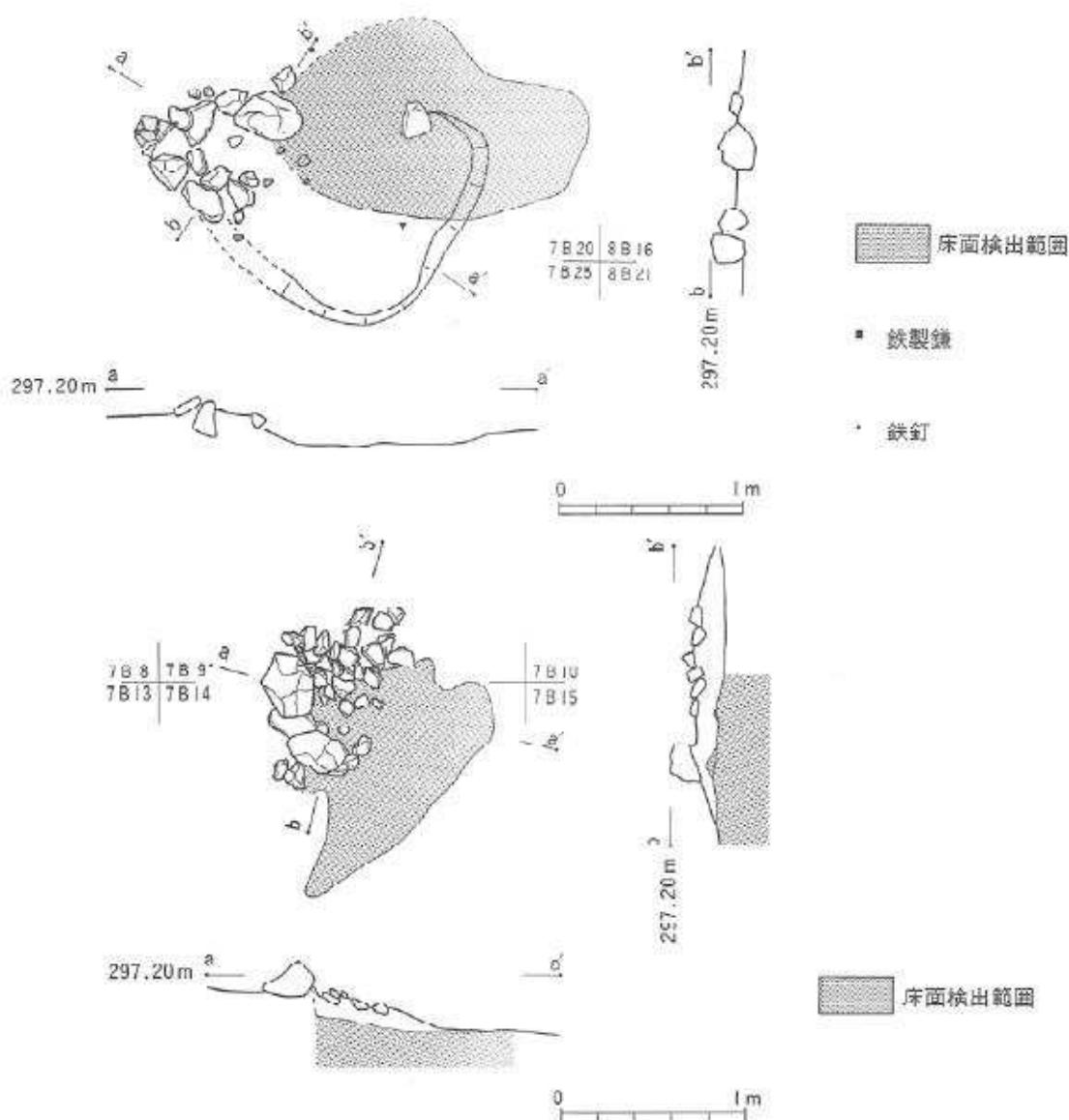


第10図 横引遺跡遺構配置図

cm、深さ5cmほどの、ほぼ正方形の掘り込みがあった。また、その掘り込みの西半分と重複する形で、石組みの前方やや北西よりに、硬化した床面を検出した。床面は石組みから北に150cmのところまで、幅100cmの範囲で広がっていた。竈の周辺から出土した遺物は須恵器の杯2点・杯蓋1点、土師器の杯2点、甕2点、鉄製鍤1点、鉄釘1点がある。このほかに石組みの南西部分から、土師器の長胴甕1個体がつぶれた状態で出土した。

S I 2

S I 1 の西側約2mのところで検出された。残存する石組みの形態は炊口が北東側に向く半円形で、奥行き70cm、幅100cmである。石組みの内側には黒色土と暗褐色土がブロック状に混在し、その上部には石組みに使われているのと同様の礫が入り込んでいた。なお、石組みの内側や炊口部分で、炭化物や焼土は検出されなかった。また、炊口の前方やや東よりで、硬化した床面を検出した。床面は石組みから40cmのところまで、幅150cmで広がっていた。出土遺物には縄文時代前期の土器片(図版1-6)がある。これは石組みの下部から出土したものである。



第11図 横引遺跡遺構実測図(S I 1・S I 2)

5. 遺物

横引遺跡からは平箱（15×54×34cm）4箱分の遺物が出土した。遺物の所属時期は、縄文時代早期～晚期、古墳時代前期～中期、平安時代である。縄文時代の遺物には土器と少量の石器、古墳時代は十輪器、平安時代は土師器・須恵器と鉄製鎌・鉄釘各1点がある。時期別の遺物出土量は平箱にして、縄文時代2箱、古墳時代1箱、平安時代1箱である。遺物の保存状態は悪く、ほとんどが器形の推定も困難な細片である。そのため、報告に際しては、遺構出土分のほか、時期ごとの特徴を示すような資料を抽出し、図化した。以下、時代順に区ごとに分けて記述していく。

A. 縄文時代

1) 南区の縄文土器（図版1・17）

南区の縄文時代の遺物には土器と石器がある。遺物は晩期の土坑が検出された7B付近と、5B・6Bの南向きの斜面部を中心に出土した。9列より北の緩やかな北向きの斜面部には、疎らに遺物が分布するにすぎなかった。遺物は遺構内あるいはII層から出土し、IV層から出土したものはなかった。土器は早期～晩期のものがあるが、主体は前期の末葉と、後期末葉～晩期初頭にある。なお、時期ごとに出土地点が明確に分離できる、ということはなかった。

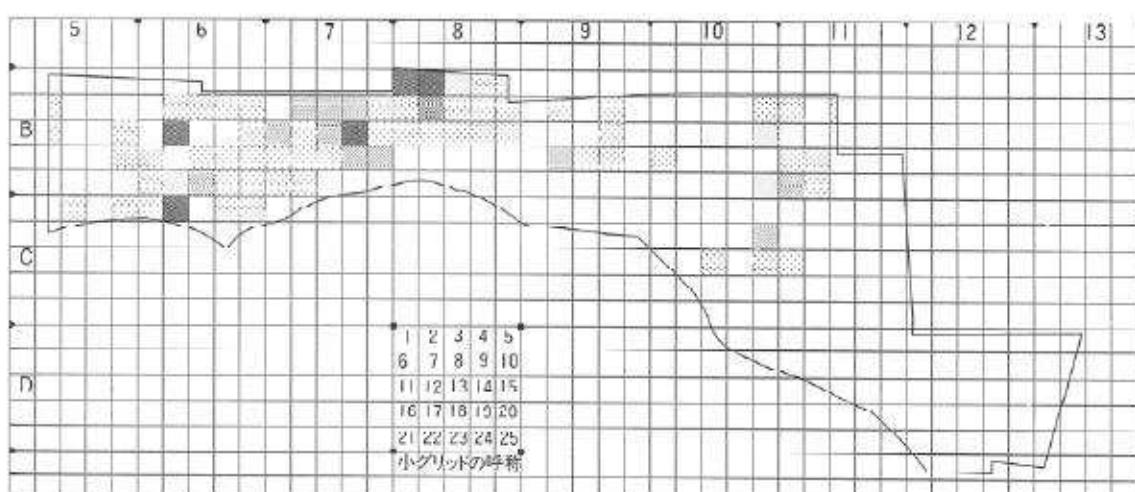
早期（1）

押型文土器の小片が1点ある。器厚は約5mmで、長軸5mmの楕円押型文が横位方向に施文されている。破片に原体の重複部分が認められることから密接施文の押型文であったと推定される。

前期（2～12）

羽状縄文が施文された土器と、諸磯C式の土器がある。

2・3はLRとRLが横位に回転施文されている。原体の燃りは3の方が細かい。2は器厚が約9mmで、口唇部は比較的丸みを帯びている。3は器厚が8mmで、口唇部はしっかりと面取りされている。4はRL



凡例 | ~99g ■ 100~199g □ 200~299g ■ 300~399g ■ 400g~

第12図 縄文土器出土重量分布図(南区)

とLRが縦位に回転施文されている。底部はナデによって仕上げられている。5aと5bは同一個体であり、4単位の波状口縁をもつ深鉢形土器であったと考えられる。5aの口唇部は面取りされており、残存している波形の頂点に約3cm（推定）の凹部がある。その中には径約7mmの楕円形が1列に陰刻されている。体部にはRLとLRが斜位に回転施文されて、菱形文が作り出されている。5bは5aと同原体を用いているが、横位の回転施文により、羽状繩文が作り出されている。

6は胎土に纖維をわずかに含んでいる。外面にはRLが横位に回転施文されている。S12下部からの出土である。

7～11は諸磯C式土器である。7～9は結節浮線文と集合沈線で施文されている。9は4単位の波状口縁をもつ深鉢である。7は口縁部破片のみであるが、9と同様の器形であった可能性もある。8は体部破片だが、残存部の推定最大径が10cmほどであり、小形の深鉢であったと考えられる。

10は口縁部～体部にかけての破片で、縦・横の半截竹管文が施文されたあと、貝殻状の粘土瘤が貼り付けられている。11は深鉢の口縁部で、口唇部直下にはボタン状の粘土瘤が貼りつけられている。口縁は平口縁と推定されるが、粘土瘤のところで四字状にくぼんでいる。外面には半截竹管状工具で鉤状の区画が作られ、その中に同じく半截竹管文による斜線が充填されている。10・11は諸磯C式古段階、7～9は諸磯C式新段階に属する。

中期（13～16）

12は深鉢の口縁部で、口唇部は面取りされている。外面にはRLが回転施文されたあと、半截竹管文で縦・横の沈線が引かれている。

13は深鉢の口縁部で、体部は緩やかに内湾し、口唇部は内側に弱く引き出されている。器面全体にLRが回転施文されたあと、隆帯による渦巻文が描かれ、その周りが沈線で区画されている。大木8b・9式段階併行の土器であると考えられる。14は隆帯による渦巻文が描かれたあと、綾衫状沈線文が施文されている。中期後葉の唐草文系十器に属するものと考えられる。15は無文の地文に隆帯による渦巻文が描かれている。曾利式に属すると考えられる。

16は沈線で地文となる渦巻文や区画を描いたあと、区画内にLRの繩文を充填している。加曾利E式段階併行の土器であると考えられる。

後期（17）

17は胎土に石英粒を多く含む赤褐色の粗製土器である。口唇部は面取りされ、体部外面はミガキが施されている。口唇部外面には断面V字状の陰刻が巡っている。

晩期（18～27）

18は器厚が約5mmと薄手である。内外面とも無文で、ミガキが施されている。口唇部は棒状工具で強くナデられ、中央がわずかにへこんでいる。所属時期は後期の可能性もある。19は波状口縁をもつ壺あるいは深鉢と推定され、残存する口唇部から頸部にかけて強く外反している。外面の口唇部直下に、棒状工具で口唇に並行する沈線が2条引かれ、その下に同様の工具を用いて、沈線に沿って列点が刺突されている。体部との境には弱い沈線が引かれている。胎土に白色粒子を多く含み、器厚は5～6mmと薄手である。外面と内面の口縁部にミガキが施されている。

20aと20bは同一個体である。深鉢の口縁部付近の破片とみられ、屈曲部から上の内面には、丁寧なナデが施されている。外面の口縁部に相当する部分には撚糸文が縦位に施文されている。20bの体部には炭化物が付着している。

21は器面が内外面とも平滑にナドられている。沈線により変形丁字文が施文されていたと推定される。22a・22bは同一個体の可能性がある。22aは口唇部に粘土紐貼りつけによるB字状の突起がある。22a・22bとも口唇部と内面の口縁部に横位・斜位の条痕がつけられている。外面の口唇部直下の幅約1.5cmの範囲には、口唇部および内面と同様の工具を用いて、斜位の条痕がつけられている。23は深鉢の肩部付近である。口縁部に無文部をもち、胴部には縦位の粗い条痕がつけられている。氷I式段階併行の土器である可能性が高い。24は深鉢の肩部付近である。口縁部に無文部をもち、胴部には横位、斜位の条痕がつけられている。条痕の幅は比較的狭い。25は深鉢の体部で、比較的細かい条痕が斜位につけられている。26と27はSK3からの出土である。26は胎土に径5mmほどのチャートを多く含んでいる。内外面とも無文で、内面には炭化物が厚く付着している。27は深鉢で、体部と底部の境目付近が強くなられ、わずかにくばんでいる。体部には粗い条痕が縦位につりられている。底部には網代痕が残されている。

2) 北区の縄文土器(図版2・18)

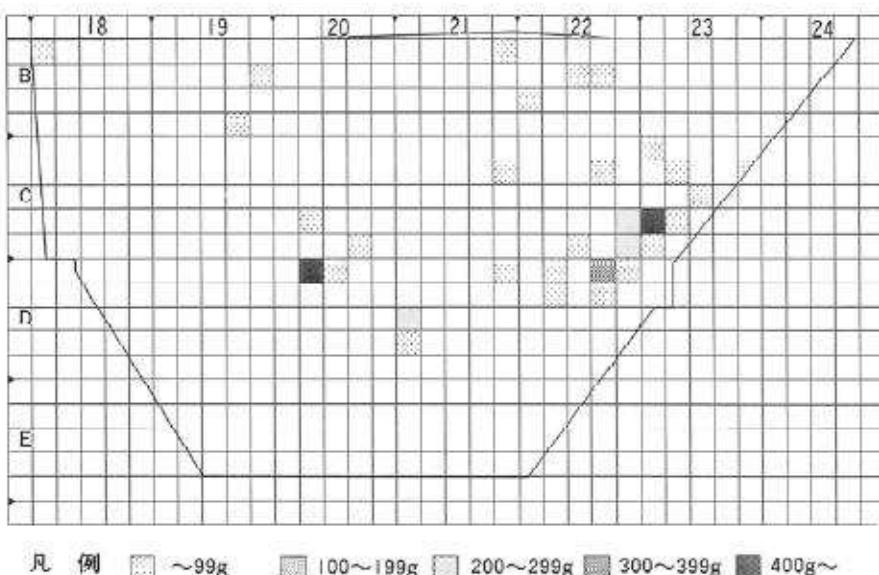
遺物の量は南区より少なく、所属時期は、早期・前期・後期・晩期である。遺物は比較的平坦な調査区の中で、集中地点を形成することもなく、包含層中に散漫に分布していた。北区の包含層は、II層とIV層である。ほとんどの遺物がII層から出土したなかで、前期の土器の一部がIV層から出土し、時期差を層位的にとらえることができた。しかし、遺物の時期差が遺物分布のあり方に反映されるということはなかった。

早期 (28)

押型文土器の小片が1点ある。器厚は5mmで、胎土にわずかに繊維を含んでいる。押型文原体は山形で、破片中に原体の重複部分が認められることから、密接施文であったと推定される。

前期 (29~36)

29は胎土に径5mmほどのチャートと、大量の繊維を含んでいる。口唇部は内傾気味に面取りされ、外面口縁部には、櫛歯状工具による幅約1cmの横位の押し引き文が2段にわたり施文されている。その直下には端部にループをもつしRが横位に回転施文されている。30aと30bは同一個体と考えられる。口唇部は



第13図 縄文土器出土重量分布図(北区)

面取りされ、外面口縁部は端部から約25mm下がったところで段差をもって区切られ、ほかと明確に区別されている。口縁部には棒状工具により、連續するC字形の刺突文が2段にわたり巡らされている。体部にはループをもつRLとLRにより、横位の羽状繩文が施文されている。29と30は神ノ木式に比定される。31は胎土に纖維と径5mmを越えるチャートを含んでいる。羽状繩文はLRとループをもつRLの横位回転施文により施文されている。29と同一個体の可能性がある。32aと32bは同一個体の可能性が高い。胎土に大量の纖維を含み、外面には全面ではないが、RLが横位に回転施文されている。33a・33bは同一個体で、有尾式の深鉢形土器と考えられる。胎土には大量の纖維が含まれている。口縁は平口縁で、口唇部は面取りされ、外側にわずかにつまみ出されている。外面は、体部にLRを横位に回転施文したあと、口縁部文様帯に弱い沈線で菱形文が描かれている。口縁部に1か所穿孔されている。30b、32a・b、33a・bはともにIV層から出土した。胎土に纖維を含むなど、製作方法にも共通性がみられることから、29~31は、神ノ木式~有尾式に併行する段階の土器であるとも考えられる。

34・35は口縁部が外反し、口唇部に近付くにつれ、弱く立ち上がっている。34の口唇部はやや内傾気味に面取りされ、内側につまみ出されている。外面にはRLとLRの横位回転による羽状繩文が施文されている。35は口唇部に幅2~3mm、深さ3~4mmの長方形の刻みがめぐらされている。外面にはLRとRLの横位回転による羽状繩文が施文されている。36は口縁部付近とみられ、外反部分の内面が丁寧になでられている。羽状繩文はRLとLRの横位回転施文によるものである。

後期（37~41）

37と38は壇之内式段階の朝顔形深鉢と推定される。37は口縁部直下の胴部破片であると考えられる。内外面とも丁寧なミガキが施されている。外面は沈線で文様が区画されたあと、LRの繩文が充填されている。38は口縁部で、内外面ともミガキが施されている。外面の口唇部には1束の沈線が巡らされている。39は粗製深鉢形土器で、全体に難なナデで仕上げられている。外面の口縁部には炭化物が付着している。40は口唇部に連続する爪形文が施されている。器面の調整は内外面ともにナデのみである。41は口唇部が一部肥厚しており、そこに径6mm・深さ6~7mmの円筒形の穴が丸棒状工具で開けられている。口唇部と外面には丁寧なミガキが施されている。

時期不明（42）

42は胎土にわずかに纖維を含んでいる。外面には角棒状工具により列点が刺突され、列点のないところには爪形文が施文されている。列点と爪形文が施文されたあとで、ヘラ状工具により斜位の沈線が引かれている。

3) 南区の石器（図版2・17）

南区からは打製石斧1点、磨製石斧1点、黒曜石製剝片3点、無斑品質安山岩製剝片8点が出土した。

46は流紋岩製の打製石斧である。刃部が激しく磨耗し、稜線が不明瞭になっている。A面左下からB面右下にかけての刃部・側縁部および剝離面はとくに摩耗が進んでおり、長軸に平行する向きの擦痕が認められる。47は蛇紋岩製の磨製石斧で、刃部に微細な刃こぼれがある。

4) 北区の石器（図版2・18）

北区からは査器1点、黒曜石製剝片7点が出土した。

48は黒曜石製の査器である。素材となつた剝片の打瘤部分が除去されたあと、折断や調整剝離で形が整

えられている。折断面にパンチ痕が残っていることから、未製品の可能性が高い。

B. 古墳時代（図版3・18）

古墳時代の遺物は土師器のみで、主に北区のII層から出土し、遺構に伴うものはなかった。遺物は19B・19Cあたりを中心に北区の西半分に比較的まとまって分布していた。遺物の遺存状態は悪く、ほとんどが細片で全体の器形を知ることができるもののはわずかであった。明確に器種を知ることができる口縁部を中心に、小型壺8点、壺2点、甕36点、甕あるいは甕の底部9点、台付甕の脚部1点、小型鉢1点、器台1点を図化した。

1) 南区の遺物（図版5・20）

南区では古墳時代の土師器がI層から出土した（130・131）。

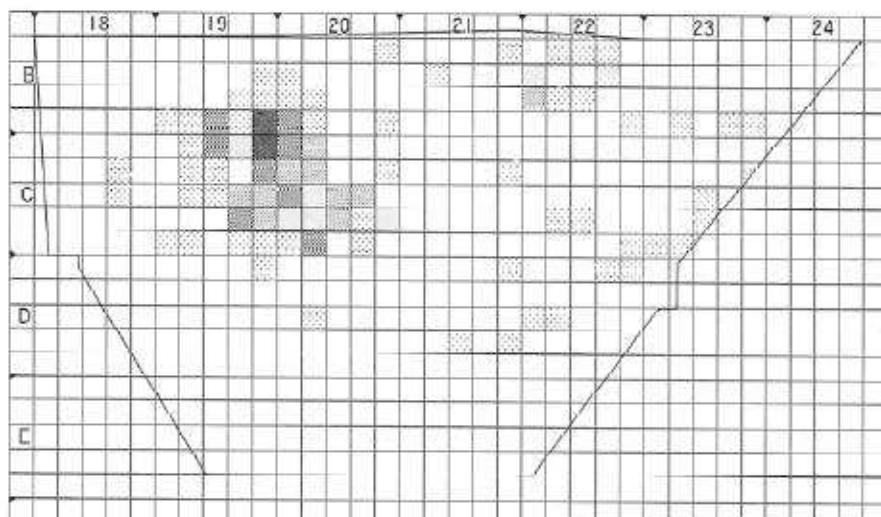
130は外反する短い口縁部が、先端部でわずかに外方に屈曲し、端部に面をもつ。口縁部はヨコナデされ、体部は内外面ともハケ目調整されている。131は口縁部が直線的に開き、端部が丸くおさめられている。内外面ともヨコナデされ、口縁端部は強いヨコナデのためわずかにへこんでいる。

2) 北区の遺物（図版3・4・18・19）

壺（49～51）

49は有段口縁の壺であるが、外面の口縁帯下辺が突部をなすだけで、かなり形骸化したものである。口縁部は外反し、端部は上方につまみ出されている。内外面ともヘラミガキであるが、外面にはヘラケズリの痕が残っている。

50は長頸壺と推定される。頸部は直立し、口縁部が外側に引き出されながら上方へつまみ上げられている。外面は口縁部に面をもち、擬凹線が引かれている。頸部には縦方向のハケ目がつけられている。51は口縁部が外湾する壺である。口縁端部はヨコナデにより内湾気味に立ち上がっている。内面はココナデ、外面はヨコナデ後縦位のハケ目で調整されている。



第14図 古墳時代土師器出土重量分布図

小型壺 (52~57)

52は口径が体部径より小さい、球胴の小型壺である。胴部が扁平気味で、口縁部は弱く内湾している。内外面ともに丁寧にヘラミガキ・赤彩されている。53は底部が平底の小型壺である。器面が大きく剥落しているが、内外面ともにヘラミガキされ、外面は赤彩されているのが観察される。胎土には当遺跡出土の他の小型壺に比べ、多くの鉱物（チャート・石英・長石など）が含まれており、径も2~3mmと大きい。

54は口縁部が内湾気味に直立している。内外面に粗いヘラミガキ調整がされている。55は丸くおさまる口縁部をもち、内外面に丁寧なヘラミガキ調整がされている。

56・57は口縁部がラップ状に聞く内外面赤彩の小型壺である。口縁部の形態は56は外反しているが、57は内湾気味である。56・57とも内外面がヨコナナ後ハケ目調整され、さらにヘラミガキされているが、内面には斜位のハケ目痕が部分的に残されている。57の内面には黒色斑点が認められる。

甕 (58~92)

甕は布留式系の甕・S字口縁台付甕・箱清水式系の甕、「く」の字状口縁の甕に4人別できる。

布留式系の甕 (58~60)

口縁部破片のみ4点出土し、そのうち口縁端部の形態が異なるもの3点を図化した。

58の口縁端部は内傾し、大きく肥厚している。59の口縁端部は内傾し、肥厚は比較的小さい。肥厚部の内面稜線は丸みを帯びている。60の口縁端部は肥厚が小さく、ほぼ水平に作られている。3点とも外面にススが付着している。

S字口縁台付甕 (61~62)

肩部と体部片があるのみだが、胎土や器壁の薄さ、粗いハケ目などからS字口縁台付甕と判断した。61は内面ヨコナナで外面には肩部からハケ目がつけられている。75は内面の口縁部がヨコナナ、肩部がハケ目、一部がヘラケズリで調整されている。外面には肩部からハケ目がつけられ、ススが付着している。

箱清水式系の甕 (43~45)

小破片が5点出土したのみである。縁の口縁部から肩部までの破片とみられる。43・44は口縁部、45は頸部である。43口唇部直下と頸部に柳描直線文が引かれ、その間に柳描波状文が充填されている。44は口唇部直下に柳描波状文がみられる。45は頸部に柳描直線文が引かれ、それより下には柳描波状文がつけられている。

「く」の字状口縁の甕 (63~92)

63は内面肩部がナナ、口縁部付近がヨコナナ、外面肩部が縦横のハケ目で調整されている。口縁部は体部との接合部分から欠損しているが、接合部分のあり方が横引遺跡から出土したほかの甕とは異なり、口縁部側の粘土を体部側に大きく統せるような接合方法が取られているのが特徴である。

64は口縁部が直線的に開き、端部は丸くおさめられている。口縁部はヨコナナされ、体部は内・外面とともにハケ目調整されている。外面の口縁部・体部にスス・炭化物が付着している。

65は有段口縁をもつ甕であるが、かなり形骸化したものである。内面にはハケ目、外面には指頭圧痕が残されている。

66・67は外反する口縁の端部が上方へ鋭くつまみ上げられ、外面に明瞭な面をもつ。66は内外面ともヨコナナで調整されている。口縁端部の外面は強くヨコナナされ、中央がわずかに凹んでいる。67は内外面ともヨコナナで調整されている。66・67とも外面にススが付着している。

68~71は口縁部が外反し、端部がヨコリアによって上方へつまみ上げられている。口縁部から体部にか

けての屈曲は比較的緩やかである。68は口縁部が大きく外反し、端部外面に狭い面をもつ。69は強いヨコナデによって内面の口縁端部がわずかに凹んでいる。70は端部のつまみ上げが弱い。71は頸部内面の屈曲部が明瞭な稜をもっている。

72～74は口縁部が外反し、端部に内側気味の面をもつ。72は内外面がヨコナデにより調整され、端部が外側に引き出されている。内面にはヨコナデ後、斜位のハケ日がつけられている。73は外面がココナア、内面がハケ目で調整されたあと、端部がつまみあけられるようにして面取りされている。74は内外面がヨコナデにより調整されたあと、内面にハケ目調整が施され、最後に端部が押えられるように面取りされている。

75は口縁部が弧状に短く外反し、端部に明瞭な面をもつ。先端部がヨコナデによって引き出されたあと、口縁部の内外面にハケ目がつけられている。外面には炭化物が厚く付着している。

76・77は外反する短い口縁部が、先端部でわずかに外方に屈曲し、端部に明瞭な面をもつ。先端部がヨコナデによって引き出されたあと、内面がハケ目調整されている。76の端部は強いヨコナデにより、下端部がわずかにつまみ出されている。77は端部の中央が強いヨコナデにより凹んでいる。内外面とも赤彩されている可能性があり、内面には黒色斑点が認められる。

78～84は外反する口縁部が先端で弱く外方に引き出され、端部が丸くおさめられている。78は内外面ヨコナアで、先端部が弧状に引き出されている。胎土に径1～2mmのチャートが多く含まれており、焼成は脆い。79は口縁部が「く」の字状に外反し、先端部がわずかに外側に引き出されている。口縁部は内外面ともヨコナデされ、内面の体部と外面の口縁部と体部の接合部にハケ目がつけられている。器面の調整は非常に粗く、粘土の接合痕が明瞭に残されている。80は内外面ともヨコナデされているが、内面には粘土の接合痕が明瞭に残されている。81は口縁が短く、中央部で肥厚している。内外面ともヨコナデされ、内面にはさらにハケ目による調整が施されている。胎土に径1～5mmのチャートが含まれ焼成は脆い。82～84は口縁が短く、先端はごくわずかしか引き出されていない。82は内外面ともヨコナデ、ハケ目で調整されているが、器面は粗い。83は口縁内面が被熱のため、一部剥落している。胎土に径1～2mmのチャートを多く含むが、焼成は悪くない。84は作りが雑で、粘土の接合痕が明瞭に残っている。器面が荒れているため、調整は不明である。胎土に径1～2mmのチャートを多く含み焼成は非常に脆い。

85は口縁部が緩やかに外反し、端部が丸くおさめられている。内外面ともハケ目により調整されている。

86は短い口縁が鋭く外反している。頸部外面にわずかに段をもつ。内外面ともヨコナデのあと、ハケ目調整されている。

87・88は直線的な口縁部が体部から覗く「く」の字状に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられている。87・88とも口縁端部が強くヨコナデされ、外面がわずかに凹んでいる。

89～92は短い口縁部が「く」の字状に外反するが、体部と口縁部との境は曲線的で、不明瞭である。口縁端部は丸くおさめられている。89は口縁部中央付近が外側に肥厚し、口縁端部がやや尖り気味に丸くおさめられている。内外面ともヨコナデされている。90は口縁端部がヨコナデにより、丸みをおびた面をもつように作られている。91は口縁端部が内外面ヨコナデにより丁寧に作られている。92には粘土の接合痕が良く残っており、口縁部下半を体部の内外面から引き伸ばした粘土で挟むようにして接合しているのが観察される。接合部の外面には細かいハケ目がつけられている。

壺の脚部 (93)

93は台付壺の脚部である。外面にはハケ目がつけられている。

壺あるいは壺の底部 (94~102)

94は小型壺の底部と推定される。内面にはハケ目がつけられている。製作の際に、内面にハケ目調整を繰り返しながら粘土を積み上げていったものとみられ、接合部で器面が剥落し、接合前の器面が露出した部分にもハケ目が認められる。外面は底部付近にヘラケズリの痕がわずかに残されているほかは、よくヘラミガキされている。底部は上げ底氣味である。底部中央に径1.5mm程の小穴があるが、貫通はしていない。外面は赤彩されており、黒色斑点がある。

95は体部外表面がヘラミガキされている。内面は器面が大きく剥落しているため調整は不明である。96は、内外面ともヘラミガキされている。95・96はヘラミガキされていることから壺の可能性がある。

97は内面がナテ、外面がハケ目で調整されている。ハク日は底部まで及んでいる。胎土に径1~2mmのチャートを多く含み、焼成は脆い。

98・99は比較的安定した平底である。98は内面がナテ、外面がハケ目によって調整されている。ハケ目は底部まで及んでいる。99は内面がハケ目調整され、外面はヘラケズリのあと体部にハケ目調整されている。

100~102は底部に竪埴法（滝沢1990）による粘土の接合痕が明瞭に残っている。100は比較的小型の底部である。内面は器面が荒れているため調整は不明だが、外面は縦方向のハケ目がつけられている。101は内外面ともハク日がつけられている。102は内面に放射線状の細かいハケ目がつけられている。外面は底部付近がヘラケズリされている。

器台 (103)

103は脚部に四方の透かしをもつ器台である。脚部の端部は面をもつ。脚部の外面はヘラミガキ・赤彩されている。内面はナゲにより調整されているが、器面は荒れている。

小型鉢 (104)

104は短い受け口状の口縁部をもつ小型鉢である。内外面に縦位のヘラミガキが行われている。

c. 平安時代

平安時代の遺物は南区のS I 1、S I 2が検出されたあたりから集中して出土した。とくにS I 1の竪前庭部から出土した遺物は一括性が高い。北区からは甕の口縁部が1点出土したのみである。

1) 南区S I 1竪前庭部からの一括出土遺物 (図版5・20)**鎮墓器 (105~107)**

105・106は無台杯で、法量は口径13cmで共通する。105・106とも体部が内湾氣味に立ち上がり、口縁端部がわずかに外側へ引き出されている。底部は回転糸切りである。106は105より器壁が薄い。

107は杯蓋である。天井部はロクロケズリされ、体部には2条の沈線が引かれている。

土師器 (108~113)

108~111は土師器の小型甕である。108は非ロクロで、底部外面は不調整である。109は内面ロクロナテ、底部外面は糸切りである。内外面とも火はじけを起こしている。110は口縁部が短く開いている。内外面ともロクロナテされ、器壁は薄く平滑に作られている。口縁部から体部にかけては曲線的で、明瞭な境がない。内外面とも火はじけを起こしており、外面は器面が大きく剥落している。111は口縁端部が屈折し

て短く立ち上がっている。内外面ロクロナデである。外面の肩曲部から下と、内面の受け口状になった部分にスヌが付着している。

112は古墳時代前期の台付鉢あるいは台付甕の脚部の付け根部分の破片と推定される。内外面とも赤彩されている。全体に火はしけを起こしており、器面が大きく剥落している。竈の支脚に転用されていた可能性が考えられる。

113は土師器の長胴甕である。口縁部は直線的に短く開き、口縁端部に外傾する面をもつ。体部内面と肩部外面はカキ目、口縁部と体部外面上半はロクロナデで調整されている。体部外面上半はヘラケズリされている。口縁部と体部外面にわずかにスヌが付着している。

鉄製品（114・115）

114は鉄釘である。頭部は折り曲げによって作り出されている。鏽化が激しいため正確な形状は不明であるが、断面形は長方形とみられる。

115は鉄鎌である。両端部を欠損しているが、直線的な刃の刃先が短く湾曲する形態のものであったと推定される。

2) 南区包含層出土の遺物（図版5・20）

須恵器（116～122・126）

116～119は有台杯である。46・34は外端接地の有台杯で、高台は台形状を呈している。116の残存する底部外面にはヘラケズリ痕がある。117の底部外面は回転糸切り後、ヘラケズリされている。118の高台は端部が外方に折り曲げられてL字状をしている。残存する底部外面にはヘラケズリ痕がある。119の高台は外側から強くつまれ、側面と接地面の中央部がそれぞれ凹んでいる。底部は回転糸切り後、ヘラケズリされている。

120～122は無台杯である。底部は120が回転ヘフ切りのほかは回転糸切りである。120は直線的な体部が直立気味に立ち上がっている。底部は回転ヘフ切り後、ナデ調整が行われている。121は外面の底部と体部の壇付近に2条の沈線がめぐらされている。122は外面の底部と体部の境が、強いナデによって凹んでいる。

126は甕の体部である。外面に平行叩き目、内面に同心円当て具痕がみられる。

土師器（123～125・127・128）

123は無台杯である。底部は回転糸切りである。体部は底部から弧状に立ち上がっている。体部と底部の境は、内外面とも浅く凹んでいる。

124・125は小型壺である。124の内面はロクロナデ後、不定方向のナデが行われている。外面体部はヘラケズリ、底部は回転糸切り後、周縁部がヘラケズリされている。125の内面はロクロナデで調整されている。外面体部はヘラケズリ、底部は回転糸切り後、ヘラクズリが行われている。体部と底部の境には1条の沈線がめぐらされている。

127は土師器の小型甕である。直線的な口縁が短く開いている。非ロクロ成型で、外面体部と口縁部がヨコナデ、内面体部がナデで調整されている。外面にはスヌが付着している。

128は小型甕である。口縁部は緩やかに外湾しながら、短く開いている。内外面ともロクロナデされ、器壁は薄く平滑に作られている。口縁部から体部にかけては曲線的で、明瞭な境がない。内外面とも火はしけを起こしており、外面は器面が大きく剥落している。

石器 (132・133)

132・133は凝灰岩製の砥石である。132は2面に櫛歯状の工具によってつけられたとみられる、平行沈線がある。133は長軸方向の使用を主体としながら、一部、短軸方向の使用もされていたとみられる。

3) 北区の遺物 (図版5・20)

129は土師器の壺である。口縁部は弱く内湾しながら開き、口縁端部は肥厚し丸くおさめられている。胎土の赤みが強いことなどから、北信系の壺の可能性がある。

第IV章 龍峰遺跡

1. 過去の調査経緯

中郷村では、陸上自衛隊関山演習場の整備によって生ずる片貝川の漏水に対処するため、大字稻荷山新田字籠峯地内に溜め池建設を計画し、それに伴って中郷村教育委員会（以下、村教委とする）が、昭和58年から61年の間に、龍峰遺跡の調査（確認調査を含む）を実施している。本章は村教委調査区域の西側にある、上信越自動車道法線内約4,200m²の調査報告である。村教委の調査では、総面積約14,900m²の発掘調査がなされ、この間に、「石棺状配石」など重要遺構が集中する約2,800m²が、関係機関の協議によって保存区域となり（第27図）、昭和62年に新潟県の史跡として指定されている。保存区域の両方および東方は溜め池が建設され、平成5年に貯水を開始している。従って、村教委調査範囲と県教委・埋文事業団調査範囲に挟まれた部分および、村教委調査範囲北方に遺跡が残存していることとなる。なお、村教委が実施した調査については、これまでに以下の報告等が刊行されている。遺跡名については「龍峰」および「籠峯」が混同して使用されている。

1986年 新潟県中頃城郡中郷村籠峯遺跡第一次発掘調査報告書

1987年 龍峰遺跡発掘調査概報

1987年 織文人の心と手—図録籠峯遺跡—

1988年 龍峰遺跡発掘調査概報II



第15図 龍峰遺跡調査区域図 日本道路公団作成上信越自動車道設計図、[中郷村教育委員会1987]を改変して合成

2. 遺跡の位置



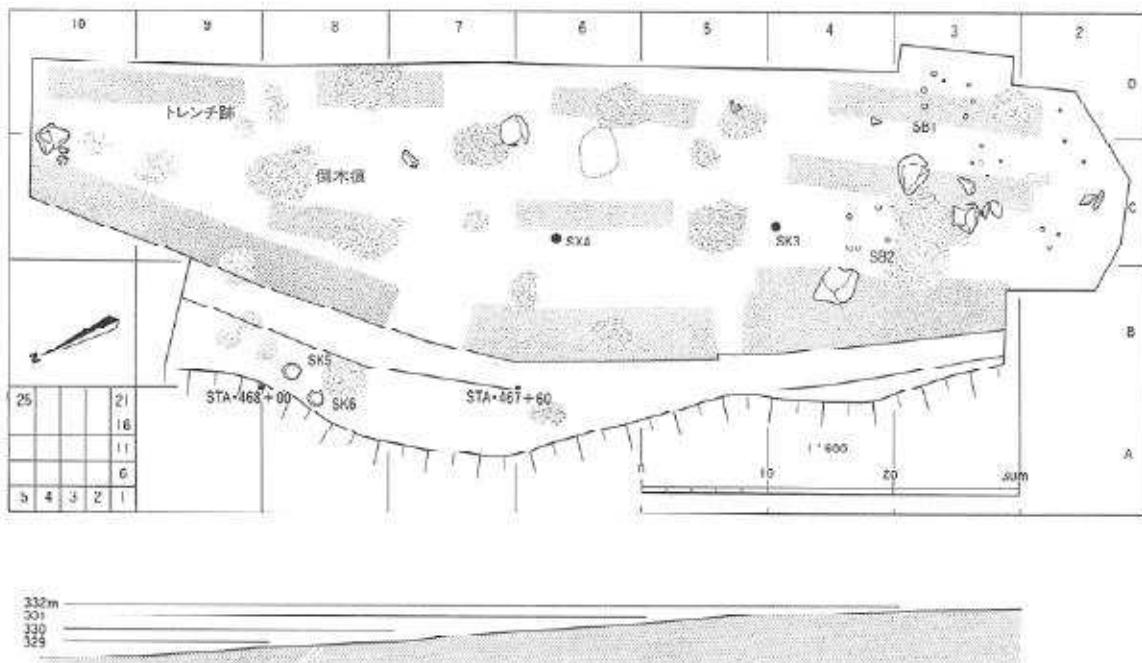
第16図 龍峰遺跡位置図

2. 遺跡の位置

龍峰遺跡は中頸城郡中郷村大字稻荷山新田660番地1ほかに所在し、国道18号線の西方約300m～400mに位置する（第16図）。遺跡は妙高山の泥流堆積物が形成した緩斜面上にあり、標高は330m前後を測る。また、妙高火山群の神奈山を源とする片貝川が遺跡西側を北流している。陸上自衛隊関山演習場となつていて、片貝川左岸は、小丘陵が連なるが、遺跡が位置する右岸は比較的起伏のない緩斜面となっている。

3. 調査の方法

グリッドの設定（第17図） 村教委調査グリッドの測量データが調査着手時に不明となっていたため、これを延長したグリッドを設定できず、上信越自動車道のセンター杭を利用した。STA.467+60 (X=104712.180, Y=-25121.9870) と STA.468 (X=104748.6130, Y=-25105.2170) を結ぶ方向を基準線として、STA.467を起点に10m四方の方形を組み、これを大グリッドとした。このため、グリッドの長軸方向は真北から約26度東偏している。大グリッドは長軸方向を算用数字、短軸方向をアルファベット



第17図 龍峰遺跡調査区域全体図

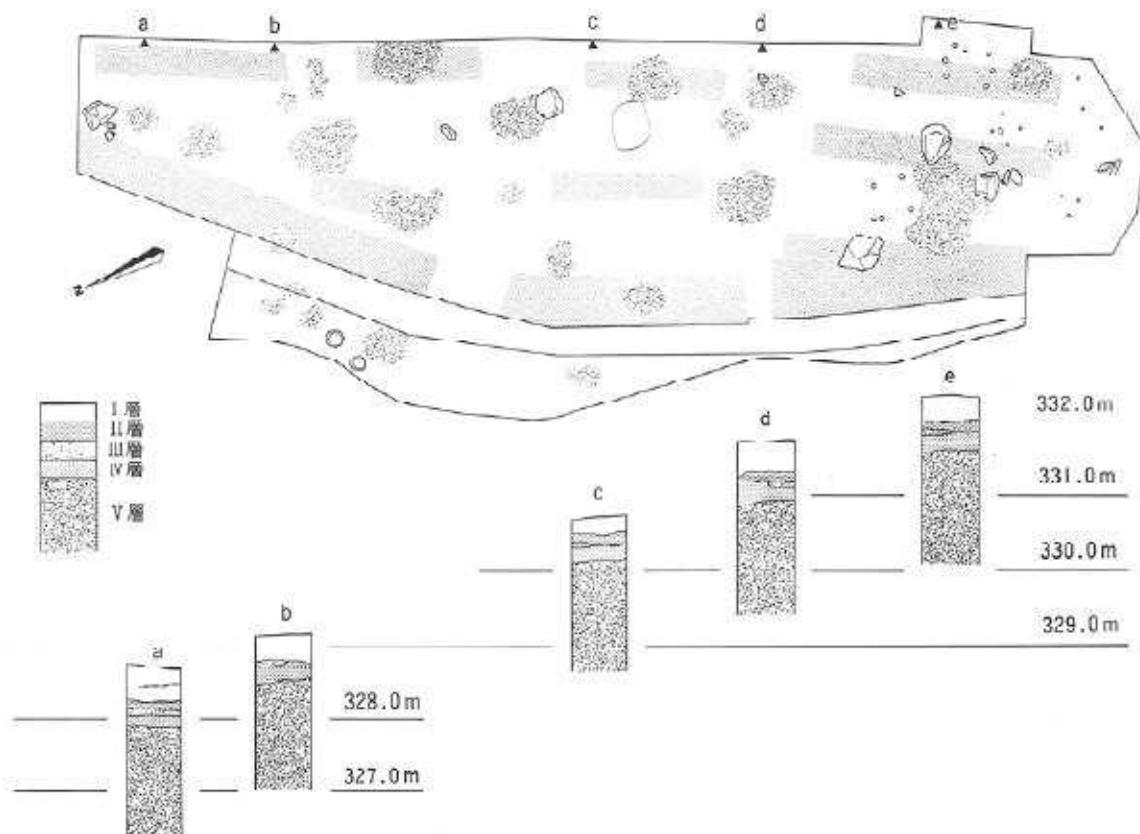
トとし、この組み合わせによって表示した。大グリッドはさらに2 m四方に分割して1~25の小グリッドとし、5D-2のように表記した。

調査の概要 村道拡幅に伴う村教委の確認調柶と調柶事業団の一次調柶によって、既に多くの面積が失われている。また、調柶区域が遺跡中心部から隔たっているために遺物の出土量は相対的に少ない。遺物包含層は大田切川火砕流堆積物（III層）を挟んで縄文時代後期・晩期（II層）と縄文時代前期・中期（IV層）の2枚が存在しており、2 m四方の小グリッドごとに出土遺物を取り上げた。村教委の調柶では、片貝川右岸付近の区域に前期・中期の遺物が比較的まとまっていたが、予想をこえて当該期遺物の出土があった。遺構については、「石棺状配石」はないものの、「柱穴列」2基、埋設土器1基等の検出があった。

4. 層序

地形を規定している基盤層=赤倉火砕流堆積物（V層）より上位が調柶の対象となる土層である。これらの土層は、北に向かって厚みを増し明瞭に識別されるが、南半部では表土直下がV層となる。基本的な層序は以下のとおりである。

- I層：暗褐色土からなる堺表土層である。奈良・平安時代以降の遺物を少量含んでいる。一部でこの上に客土があり、これをI'层として区別する。遺物は全く含まれない。
- II層：黒褐色・黒色の腐植土で、縄文時代後期・晩期の遺物包含層である。2 mm未満の灰色粒子を少量含む。
- III層：大田切川火砕流に伴う火山灰を混在させる。褐色～暗褐色の土層であり、部分的に火山灰が斑状に含まれる。5 mm未満の灰色粒子を多く含む。
- IV層：5 mm未満の灰色粒子を多く含む灰黑色土で、上位の層に較べてよく縮まっている。縄文時代前期末葉～中期前葉の遺物を含んでいる。
- V層：黄灰褐色の赤倉火砕流堆積物である。砂質で固結度が非常に高い。



第18図 篠峰遺跡土層柱状図

5. 遺構

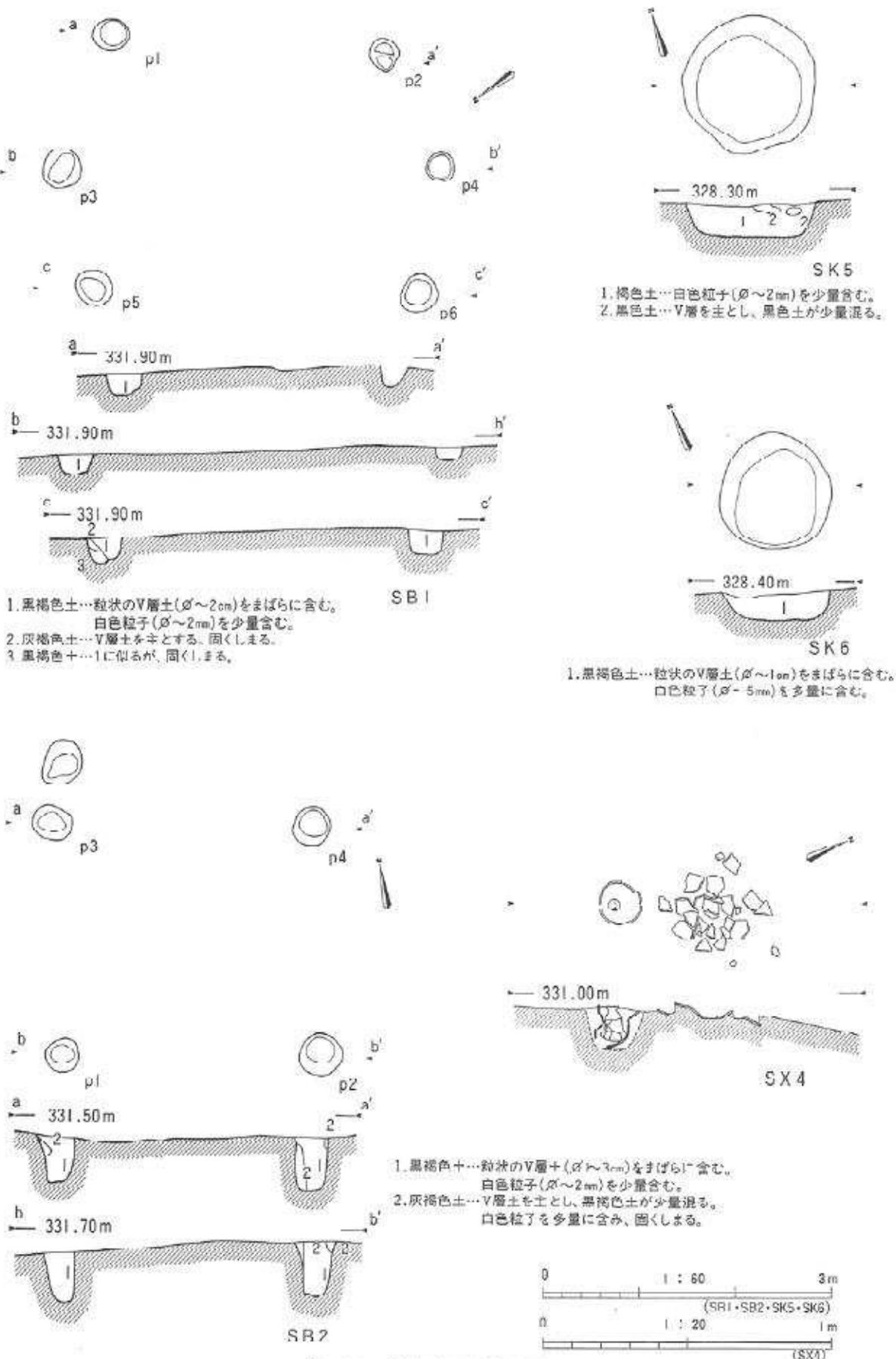
「柱穴列」2基・埋設土器一基・土坑3基・ピット10基（「柱穴列」を構成しているものは除く）の検出があった。土坑1基（SK3）のみが中期であり、その他は後期後半から晩期の遺構である。一定の計画下に柱穴を配置しているSB1・SB2については、通例に従って「柱穴列」と呼称しておく。このほか、遺構ではないが、24か所に倒木痕が散在している。

SK3（第19図）

4C-10に位置する土坑であるが、V層土に近似した覆土で平面形を確認できず、調査は固結した覆土から土器を掘り出すに止まっている。土器の出土状況から径約60cm、深さ約30cmの土坑と考えられる。覆土には26個体をこえる中期前葉の土器を含んでいるが、これらは完形に復するものではなく、雑然とした状況で出土しており、器の機能を維持した状態で埋納されたものとは思われない。

SB1（第19図、図版22・23）

3Dに位置する。6基のピットが六角形の稜角位置に置される「柱穴列」である。P2は風倒木痕が重複していたため覆土の状況は不明であるが、P5のほかは単層の覆土である。中央の軸となるP3・P4間は約3.9mを測る。P1・P2間の距離とP5・P6間のそれには約0.6mの差違があり、6基のピット



第19図 篠峰遺跡遺構実測図

は対称的に配置されていない。

S B 2 (第19図、図版22・23)

4 C に位置する。4基のピットが長方形の稜角位置に置される「柱穴列」であるが、P 3 の北側に位置するピットもこれと無関係ではないと思われる。ピット間の距離は長軸約2.7m、短軸約2.4m程度で規格性はあるものの、各ピットを結んだ線は正確な矩形となっていない。P 2・P 4 の断面には根固め土が明瞭に観察される。P 2 覆土には縄文土器片が1点含まれている。

S X 4 (第19図、図版23)

6 C - 4 と 6 C - 9 の境界に位置する、埋設土器および土器片の集積である。3個体の土器で構成され、外容器である壺形土器の内部に碗状土器・長杯状土器が倒立して納まる。ここではIII層の堆積がなく、埋設土器の下底がIV層に達していないため、埋設時の獨形は認識されなかった。埋設土器内部には空隙がなく、黒色腐植土が充満している。内容土には微細な土器片以外の固体物を認めない。土器片の集積は埋設土器の北側にあり、同一個体の破片からなるが、個体数の30%程度にとどまる。

S K 5 (第19図、図版23)

S K 5 に近接し、8 B - 4・5 に位置する土坑である。平面形は径約1.4mを測り、ほぼ円形を呈する。覆土から土器片4点が出土している。

S K 6 (第19図、図版23)

8 A - 23・24に位置する土坑である。平面形は径約1.2mを測り、不整円形を呈する。覆土から土器片4点が出土している。土坑西側は片貝川の浸蝕作用によって、魚崖となっている。

6. 遺物

A. 土器

土器の総量は平箱にして20箱程度、総重量35.953kgである。内容は、表土層および遺物包含層から出土した縄文土器が14箱、S K 3 覆土内の縄文土器が5箱であり、このほかに S X 4 を構成する縄文土器、若干の須恵器・土師器等がある。前述のように調査トレンチの占める面積が大きく、遺物包含層の堆積が良好でないため、村教委調査区域に比較して、出土土器の密度は相当に低い。

1) 縄文時代前期・中期の土器 (図版 6・7・24・25)

S K 3 覆土内の土器 (図版 6・24-1~26)

破片数1,040点、総重量12.89kgの土器が出土している。このうち、岡化した個体数は26点であるが、すくなくとも26個体の土器が含まれており、廃棄の同時性を確認できる中期前葉の土器群である。

1は径約37cmを測る人形の深鉢である。半截管状工具による幅5mmの半隆起線によつて、文様の大部分が描かれる。口縁部は幅1cmほどの間隔をおいて、継ぎ目の半隆起線文が横列する。図中央部には「U」字

状の隆帯が付されており、1-lの環状突起はこれと対称の位置に置かれると思われる。頸部は交互刺突のある帶状部の上下を、2本1単位の半隆起線文が挟んでいる。胴部は「C」字状の連続刺突をされた隆線が器面を4分割すると思われるが、文様構成は異なる。

2は幅5~6mmの半隆起線と列点によって文様が描かれる。口縁部はローマ数字「IX」状のセーフが連続すると思われる。2-bには半円状の小突起があり、口縁に沿って、列点が加えられる。頸部は列点のある帶状部の上下を半隆起線文が挟み、4か所に「U」字状の隆帯が置かれる。隆帯から垂下する串団子状の文様が胴部の器面を4分しており、この空間に弧線と8の字を連ねた文様が描かれる。胴部文様の一部には、半截管状工具の片側だけを用いた單沈線が使われている。

3は口縁部文様帯に無文部を広く取って、部分的に隆帯が貼り付けられる。頸部の文様は1・2のような帶状部がなく、半隆起線文だけで構成される。胴部は「C」字状連続刺突のある隆線が器面を分割している。地文は撚糸文とし、B字状文およびその変形モチーフが描かれる。

4は沈線で文様を描くものであるが、半截管状工具によるものではない。器体が小さいために半隆起線文を簡略化したものであろう。口縁部は縦位の平行沈線を描き、頸部は平行沈線の間に列点文を置き、胴部は列点文を加えた平行沈線が垂下する。

5~8は単節繩文あるいは撚糸文が使われるものである。

5は半隆起線文で区切られた口縁部にR Lの単節繩文を施され、口縁直下には1条の浅い沈線が引かれる。胴部は無文としている。6は口縁を肥厚させ、撚糸文と楔状の抉りが施される。撚糸文は半隆起線文に挟まれた帶状部にも使用される。7はR Lの単節繩文を用い、抉り取りによって逆位の蓮華状文を作りだしている。8は「V」字状隆帯下に単節繩文の帯が置かれるが、その抉りは不明である。

9から11は波状をなす口縁部および突起の破片である。いずれも半截管状工具が使用されるが、11の突出部と隆帯状にはヘラ状工具が用いられる。

12・13はおそらく同一個体であり、半隆起線文と列点文による簡素な文様構成を示す。

14~16は口縁部下半から頸部の破片であり、15・16には半隆起線文の縁に刺突が加わる。

17~21は胴部破片である。

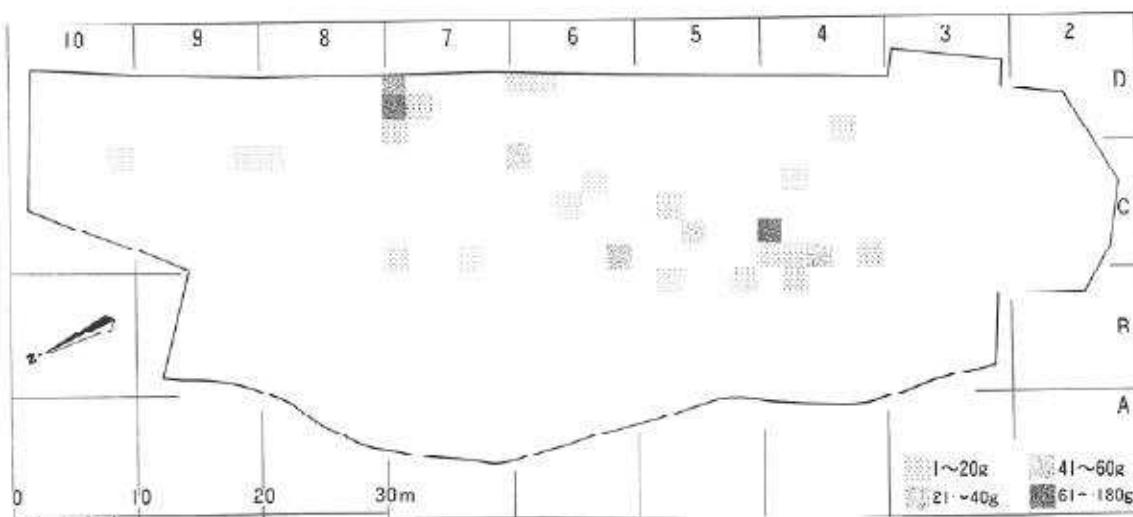
17は半截管状工具を交互に重複して押し引き、斜格子目文に似た文様を作り出す。この両脇には細い沈線が縦に数条引かれる。19・20は大形の深鉢であり、20は撚糸文Rを地文としている。21に使われている半截管状工具は細く、幅3mmである。

22は平行沈線の間に山形の图形を連続させている。深鉢の口縁部下半であろう。

23は2条1単位の有節沈線（あるいは連続角押文）によって、大きな山形の图形が描かれる。図中央には半円状の貼り付けがあり、この点から三角形の頂点に向けて有節沈線がのびる。また、貼り付けの位置で口縁が突起している。器壁は薄く、胎土に金雲母を多く含んでおり、他の個体とは明瞭に区別される。

24~26は器面のおおむねが埴文となる、加飾性の低い深鉢である。

24にはR Lの単節繩文を用いられ、下端に1条の沈線が引かれる。25に見られる条痕は、各条線の幅が定しておらず、撚糸文施文原体を用いた絹糸体条痕と思われる。口縁は肥厚して丸くおさまる。25の埴文はRの撚糸文である。胴部上半には「C」字状の連続刺突を付した隆線が垂下し、頸部にも同様の隆線が1条めぐる。底面には板目状の圧痕が残される。



第20図 IV層における縄文時代前期・中期土器の出土状況

遺物包含層出土の土器（図版7・25-27-39）

破片数97点、総重量1.06kgの土器が出土している。前期・中期の遺物は、基本的にはIV層に包蔵されるが、一部は後期・晩期以降の掘削行為によって、II層に含まれる。IV層に含まれる最も古い時期の土器は前期末葉諸磯c式段階のものである。IV層に含まれる遺物の出土状況を第20図に示す。

27-29は諸磯c式段階に置かれるものである。27-a・bは、同一個体であるが接合点がなく、口縁部の大きさが異なるため、分離して別図としている。文様は半纏管状工具を用いて集合平行沈線が描かれる。平行沈線の幅は約3mmである。口縁部は「X」字状のモチーフを4単位繰り返しており、頂点を合わせた三角形と菱形の無文部が残される。胴部は「X」字状およびレンズ状のモチーフが4単位繰り返される。レンズ状モチーフの内部には、扇状および環状の文様が描かれる。底部は平行沈線が横位に連なる。28は平行沈線を地文とし、結節浮線を貼り付けている。29は「X」状モチーフが描かれた胴部破片である。

30-35は中期前葉に置かれる。30-33は半隆起線文で文様を描くものである。32は上端に交互刺突文帶がある。33の地文は条線である。34は口縁下に径1mm程度の、滴状列点文が2段めぐる。35の平行強線は単沈線によるものである。地文はRの撲経文である。

36-39は中期中葉～後葉に置かれる。36は円形刺突のある隆線が器面を梢円または方形に区画すると思われる。37はL・Rの単簡縄文を縦位に施文され、厚みのない隆線で曲線が描かれる。38・39は厚みのある隆線で三叉状・渦巻き状の文様が作り出されている。

2) 縄文時代後期・隙期の土器（図版7-9・25-27）

S×4を構成する土器（図版7・25-40-43）

40は底部が球面を呈する、楕状の土器である。口径は9.2cmを測る。口縁はわずかに外反して薄くおさまる。内・外面ともに丁寧なミガキがなされる。

41は高台が付く長杯状の土器である。口縁には小突起が4か所に配される。丁寧なミガキによって内・外面はにぶい光沢が生ずる。

42は体下半部が球状を呈する變形土器である。口径は14.0cmを測る。頭部に組み三叉文が5単位連

鎖して描かれ、その上下に横位の縄文帯が施される。頸部文様帯を42-bに展開して示す。入組み三爻文の縄文施文範囲は、各モチーフに多少の差違がある。器面は41と同様な鈍い光沢を有する。

43はL.Rの縄文のみが乱雑に施される深鉢である。底部付近に丁寧ナテがなされる他、縄文施文後にも部分的なナテを加えている。内面は細かな蜂の巣状のひび割れが著しいが、横方向のナテが認められる。

S K 5 覆土内の土器 (図版 7・25-44・45)

4点の土器片が出土している。44は後述する75と個体が同一である。45はL.Rの縄文が乱雑に施される。これらのはか、45と同一個体の土器破片が2点ある。

S K 6 覆土内の土器 (図版 7・25-46)

4点の土器片が出土している。46はR.Lの縄文が部分的に施される。このほか、無文の土器片が2点、縄文施文の土器片が1点ある。

遺物包含層出土の土器 (図版 7~9・25~27-47~106)

遺構覆土に含まれるもの除去して、総重量 34.89kgの出土がある。IV層における後期・晩期土器の出土状況を第21図に示す。

47~52・76は後期中葉から後葉に置かれる土器である。

47は所属時期が明らかではないが、後期の土器としておく。櫛歯状工具によって、半円状の集合沈線を重複させて横位に連ねている。上端にも集合沈線が引かれる。

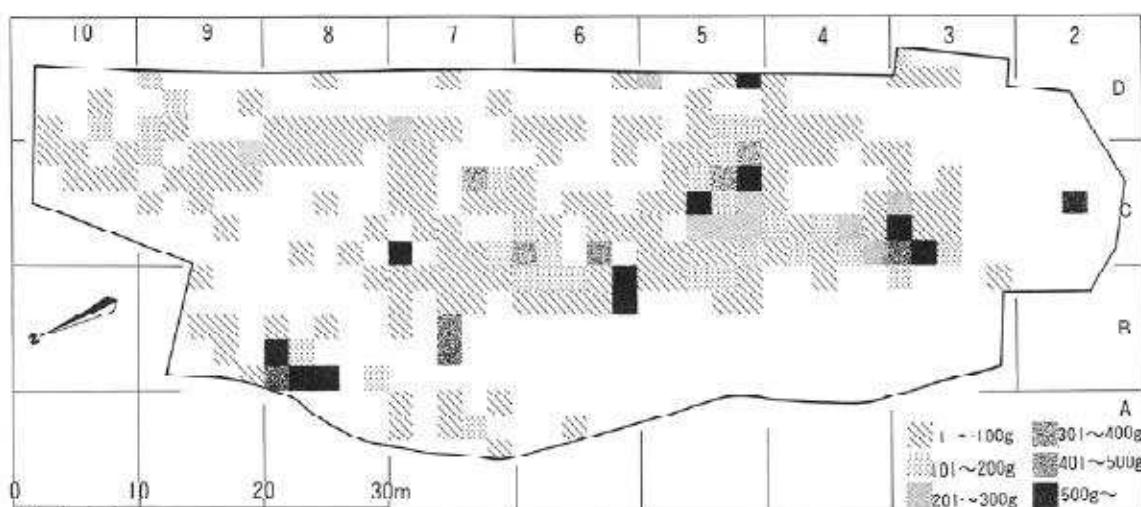
48・49・51・52は沈線で区画された縄文帯が横位に展開する。49には口縁に2段の梢円形の刻みがなされる。

50には沈線による区画がなく、縄文帯に平行沈線が斜位に引かれる。

51は小形壺形土器の肩部であろうか。粒状貼り付けの左右に縄文帯がのびる。

52は口縁下に1条の沈線が引かれ、口縁端部に刻み目が連続する。

48~52の縄文は48, 50~52がL.R、49がR.Lである。



第21図 II層における縄文時代後期・晩期土器の出土状況

76は先端の丸い工具を用いた太い凹線で、口縁部に平行線、頸部に矢羽状のモチーフが描かれる。中部地方に分布する、いわゆる羽状沈線文土器である。口縁は波立っているが、平縁が意識されている。

53～59、60～62は三叉文・入組み三叉文、およびそれらの変形文様が描かれるものである。

53は縄文帯と無文帯の間隙に三叉文が配される。口縁は山形の波状をなし、頸部で明瞭にくびれる深鉢である。波状口縁の下底部には刻みのある小突起が付される。55は円形の無文部が大きく取られ、これが文様の構成を強く規定している。無文部周囲の文様は53と同様なモチーフを繰り返すと思われる。57は三叉文の弧状部が組み合わされる部分（破片右端）に刺突文が充填される。60は三叉文が見られないものの、53・55と同様な文様構成をとるものと思われる。

56は頸部が「く」の字状にくびれる壺形土器である。胴部文様のモチーフは沈線が三叉状に分岐しない交互弧線文であるが、54に見られる交互二叉文のバリエーションと思われる。縄文は口縁部と交互弧線文部のみに施される。沈線と組み合わされた列点文によって文様帯が区切られる。

58は平縁の鉢であり、三叉文は縄文帯の内部に描かれる。59は玉抱きの入組み三叉文が連鎖して描かれるものと思われる。61は短い台が付く鉢形あるいは蓋形土器であるが、前者として図化している。底部には沈線で区画された列点文が2帯めぐる。その間に無文帯に向かい合う三叉文が4か所に置かれる。

62は比較的長い脚が付き、口縁の4か所に複合した山形の突起が配置されるものである。脚部にヘラ状工具で4単位の三叉文が描かれる。

63～76は、文様モチーフや文様構成に強い共通性を抽出できないものを羅列している。

63は扁平したじ字状の縄文帯が連続して描かれる。64は鉢形土器である。狭い縄文帯の間に棒状の沈線が加わる。65は刻み目状の列点文が使われるものである。それぞれの列点は、工具を縱方向に押しあてている。66は頸部に2条の沈線と列点文が置かれ、口縁部を縄文地としている。67は平縁の鉢形土器であり、列点文を挟んだ2列の縄文帯が描かれる。68は長い頸部と球状の体部をもつ、小形の壺形土器の頭部である。下端の沈線はヘラ状工具で描かれており、くびみが明瞭ではない。69は粗大な工字文が描かれる。

70は壺形土器の肩部であろうか。列点文の上下を広く無文としている。71は細い棒状工具によって、連続する弧線と梯子段状の文様が描かれる。72は角棒状工具の先端を横に連続刺突されている。73は浅い乱雑な沈線が口縁部に2条めぐる。口縁端部には不規則な刻みが加えられる。74は口縁部が緩やかに外反する浅鉢形土器である。凹線状のミガキによって、浮線網状の文様が浮き出されるが、凹凸が小さく不明瞭である。口縁に円形刺突が加わる。75は口縁部に胎土の輪積み痕を残している頸部の4か所に棒状の貼り付けがなされ、その下部に列点文がめぐる。

77～80、85～87は、加飾性の低い深鉢または壺形土器、いわゆる粗製土器で口径を復原した個体である。時期は後期後葉～晩期後葉までを含む。

77は口縁部に輪積み痕を残しており、口縁端部に小突起が付される。文様は認められない。

78は口縁部に凹線が密接して引かれるものであり、口縁の凹線においては、工具の押圧によって低い突起が作り出される。頸部と胴部は僅かな段差によって分離される。

79は口縁端部に凹形の押圧痕が連続するものである。この押圧痕に対応して、口縁外面に三角形のナデが加わる。

80は体が直線状に開くバケツ状のものであり、全面にナデ調整のみがなされる。

85は内面に器壁を爬き取るような、強いナデが施される。細縫が多く含んでおり、その移動痕跡によつて器面が荒れている。口縁端部には斜位の梢円形押圧痕が連続する。

86は幅の細いナテが施されるもので、内面は胎土に含まれる細礫の移動痕跡が著しい。口縁の4か所に山形の突起が付される。

87は外反する口縁に1条の凹線が引かれ、その中に78と同様の手法で低い突起が作り出される。

81~84、88~95は、粗製土器の口縁部破片である。

86・87は、口縁に沿って隆帯が貼り付けられる。94は口縁下に浅い平行沈線が引かれる。95は口縁内面に縄文が加えられる。

96~98は地文を縄文とする粗製土器である。99・100は器面の調整に条痕文が使われるものである。99には弧条の沈線が引かれる。101~106は底部を一括している。101の縦位沈線は調整の痕跡か、文様の一部であるか判然としない。底部には板目状圧痕が見られる。103~106は底部に網代痕が残るものである。編み方は103が経2本潜り・2本超え・2本送り、105が経2本潜り・2本超え・1本送り、106が経1本潜り・1本超え・1本送りである。104は網代痕がナテ消されているため、判別できない。

(3) 奈良・平安時代の土器 (図版9・27~107・108)

107は器壁が薄く、体部が直線的に開く須恵器の杯である。器面には黒色の吹き出しが多数見られる。

108は大甕の体下半部である。上半の調整は簾状の平行叩き目である。

B. 右器 (図版10・28~109~139)

本遺跡で出土した石器類は利器としての石器が15点、その他の石製品が2点、石器製作に関わる剥片が36点、石核が1点、搬入された原石が1点の計55点である。これらはI層およびII層から出土しており、伴出する土器から、縄文時代後期中葉から晩期後葉に属するものと考えられる。石器および石製品については、すべて実測図および写真で、その他については一部を写真で示している。

なお、説明文中の「右」・「左」については、石器の正面を定めた状態における観察者からの左右をさしている。したがって例を示せば、ヒトを図示した場合、左手は右側面にあるものと説明される。

1) 磨石類 (109~119)

従来、凹石・敲石・磨石と呼ばれてきた石器であるが、同一個体上に複合した機能を併せ持つ場合が多いことから、本遺跡ではこれらを一括して磨石類として扱った。出土した総数は11点であり、石材はすべて安山岩が用いられている。表面に残された痕跡によって以下のように分類する。

I類 (109~115)

礫面に人為的な凹みが認められるもので、7点出上っている。明確な陥凹を呈するものや凹凸に器面が荒れている程度のものなどがある。いずれの凹みも敲打によって形成されたものと考えられる。

109・110・112・113・115の5点は、正裏両面に凹みをもつ一群である。109は正面の凹みが中央から下方へ溝状にのびている。また、側面の広い範囲にも凹凸の激しい敲打痕がみられる。110は鉱物斑晶の脱落によって礫面が荒れているため、敲打痕を明瞭に区別できない。112は下半を欠損している。いくつかの深い凹みが上下に連なり、使用された面が溝状に長くなっている。113は明瞭でないものの正裏両面に2か所ずつの凹みをもつ。115は裏面の敲打が一点に集中せず、広く分散している。また、礫の筋理に沿って敲打痕が筋状に分岐している。111・114の2点は片面にのみ凹みをもつ。111は一点に集中しない不整形な敲打痕をもつ。114は凹みが狭小で凹みの周囲に横方向の擦痕が認められる。

II類 (116・117)

礫面に凹みと磨耗面を併せもつもので、2点出土している。116は正裏両面と下面に凹みをもつ。正面の凹みは輪郭が鮮明で丸底状に深く、その内面も比較的滑らかである。磨耗面は止裏面ともに認められる。117は片面に敲打痕と磨耗面をもつ。敲打痕は不整形で浅く、磨耗面は滑らかである。

III類 (118・119)

礫面にある程度の広がりをもつ磨耗面のみが認められるもので2点出土している。どちらも曲面の小さい部分が磨耗している。磨耗面の状態は118が比較的滑らかで、119はざらつき感がある。

2) 敲打具 (120)

明瞭な稜をもつ定角式の磨製石斧を二次利用したものである。刃部の剝離は敲打によって生したものと思われる。右側面に偏って幅9mm程度のツブレが認められる。

3) 打製石斧 (121)

片面を礫面とする素材剥片に、簡素な加工を施したのみの打製石斧で、基部を大きく欠損している。正面の刃部左半と右側面に礫面が残り、裏面も素材の剝離面を大きく残している。

4) 石鎚 (122・123)

122は基部を欠損しているものの、2点とも凸基の有茎鎚である。123は側縁がゆるやかな弧を描くようにな形づくられており、裏面には素材の剝離面が広く残されている。123は両面の基部付近に素材の剝離面を残すが、全面にわたって細かな調整が施され、細身の鉢形に仕上げられている。器厚は刃部がやや肉厚で、基部が薄い。

5) 石冠 (124)

半球状の頭部、括れた頸部、弧状にくげむ基底面をもつ。背面は頭部から基底部にかけて大きく剝落している。器面は著しく荒れているが、風化による鉱物斑品の脱落であるか、敲打調整の粗雑さによるものか不明である。

6) 岩偶 (125)

足首より上の部位を欠いているものの、岩偶の足部分と思われる。全体的に平滑に仕上げられている。基底面には浅くて不明瞭であるが、梯子段状の線刻が施されている。また、足首の周囲をめぐるようにわずかな段差が作り出されている。

7) 石核および剥片 (127・1286~139)

石核1点、剥片36点が出土しており、石核と一部の剥片を写真図版に示している。剥片の石材は黒曜石が18点(135~139等)ともっとも多く、半数を占める。いずれも0.1~7gの小片である。ほかは無斑品質安山岩が11点(128~132等)、チャートが2点、安山岩が3点、玉髓が2点(133・134)である。使用痕が認められるものはない。石核の石材はチャートである。

8) 原石 (126)

縞状の節理が密に走った黒曜石の礫で重量は39.6gである。稜および剝離面が滑らかに磨耗しており、これは露頭に含まれていた時点の状態を残していると思われる。

第V章 柳平遺跡

1. 遺跡の位置

柳平遺跡は、中頸城郡妙高村大字関山字柳平5398番地ほかに所在し、上信越自動車道関山パーキングエリア建設地の一角に位置する。遺跡は妙高山の泥流堆積物が形成した緩斜面上にあり、標高約410m前後を測る。斜面は旧北国街道付近で傾斜を弱めており、遺跡はこの街道に沿った小野沢集落から約400mの距離にある。また、遺跡南方約300mには坪岳東方付近を源とする小野沢川が東北方向に流下している。

2. 調査の概要

A. 一次調査（第22図）

一次調査は、面積74,000m²を対象に平成5年8月30日～9月7日に実施した。対象範囲の任意の位置にトレンチ67か所（総計1,901m²）を設定し、バックホー3台を使用して徐々に掘り下げながら遺構・遺物の有無を確認した。人為的な遺構は検出されなかつたが、No.34試掘溝から平安時代の遺物を多く含む幅1.5m、深さ1.2mの自然流路跡が検出された。遺物は34試掘溝のほか、4か所の試掘溝（No.9、33、35、39）において若干量が検出された。この結果、二次調査の範囲はNo.34試掘溝周辺1,600m²に限定することとなった。なお、基盤層である大出切川火碎流は、No.7試掘溝において2m以上の厚さをもつことが確認されており、これより下位の調査は不可能と判断されている。



第22図 柳平遺跡一次調査トレンチ位置図(1:5,000)

B. 二次調査

柳平遺跡の調査は、5月9日～6月10日の期間、調査員3名、作業員11～13名で行った。調査期間が短く、至近で和泉A遺跡の調査を実施していたこともあり、調査事務所を設置せず、テントを利用するに止めた。調査対象範囲については、一次調査の報告に沿いながらも、必要に応じて調査範囲を加減していくこととした。調査区が狭いこともあり、堆土はベルトコンベヤを用いず、一輪車とバックホーで対応した。元来、腐植土の被覆が薄いうえに、腐植土はおおむね耕作され、耕作は基盤層であるIV層上面に達している。したがって、自然流路部分を除けば、擾乱を受けない遺物包含層は残存していない。人工的な構造については、9基のピットが検出されたのみである。自然流路の覆土中には、焼山起源の火山灰堆積層が2枚確認されており、遺物と火山灰の年代を対比する資料を得ている。

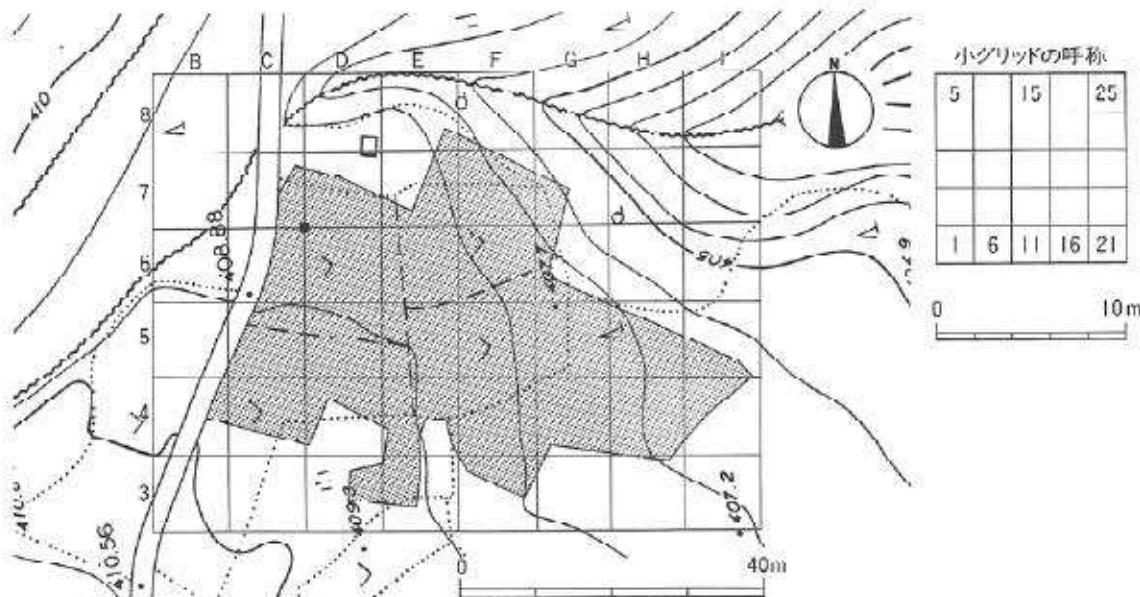
C. グリッドの設定（第23図）

グリッドは、方向を国土地理院の座標系に合わせ、 $x = 102650.000$, $y = -25200.000$ を起点として10m方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドの呼称は南から北へ1～8、西から東へA～Iとし、「1 Aグリッド」のように両者の組合せで示した。大グリッドはさらに2m方眼の小グリッドに区分し、南西隅から1～25の番号を付け、「5 E15」のように表示した。

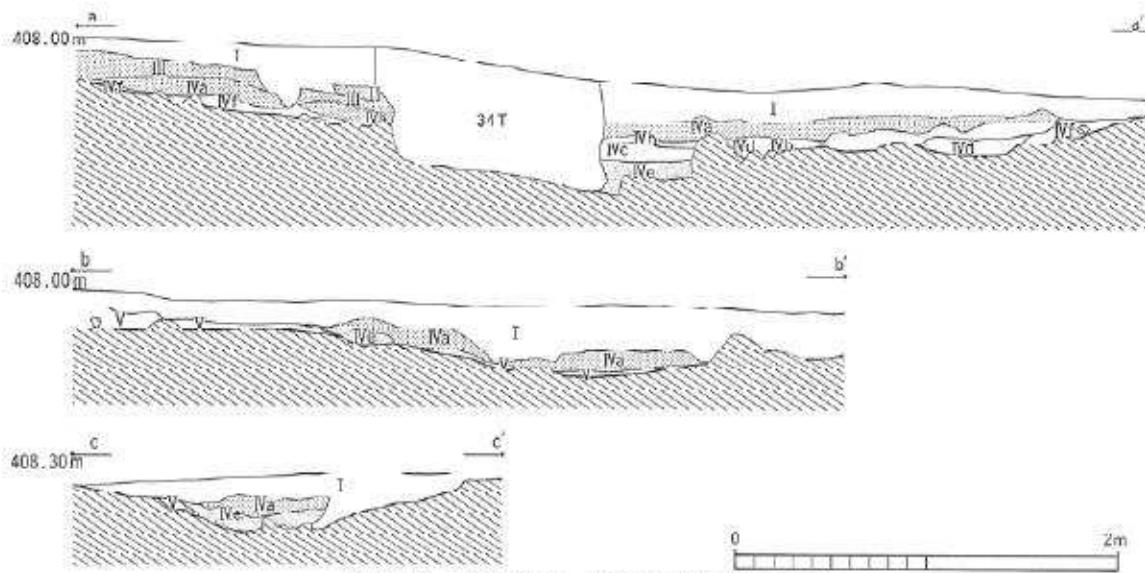
3. 遺跡

A. 層序

調査区域の大半は、基盤層まで擾乱されているため、基本的な層序は耕作土（1層）と基盤層（VI層）に区分されるのみであるが、ここでは自然流路覆土（II～V層）も含めて、土層の堆積状況を説明する。



第23図 柳平遺跡グリッド設定図



第24図 柳平遺跡 自然流路土層断面図

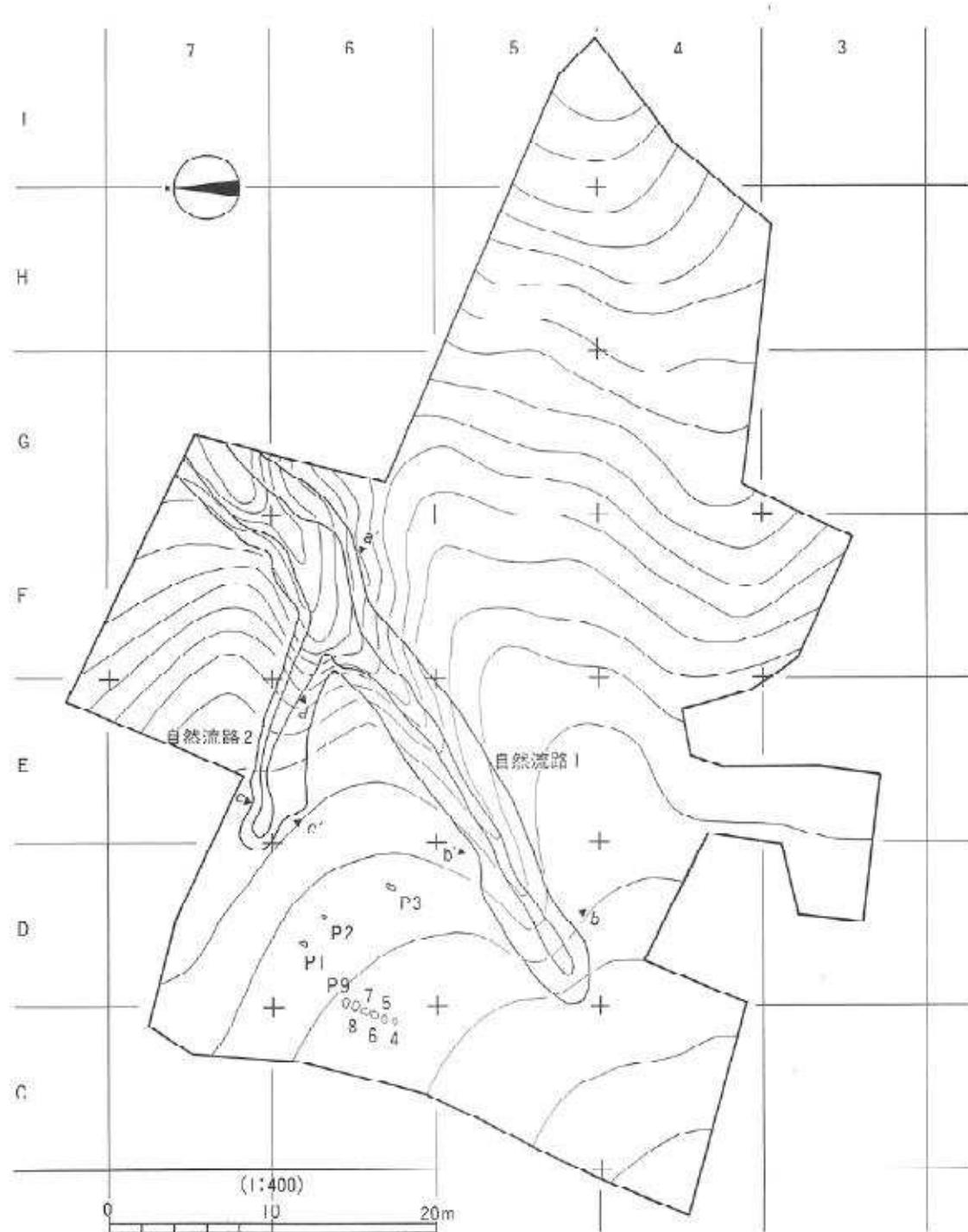
なお、II層・III層が自然流路2の、IV層が自然流路1の覆土である。

- I 層 耕作土。色調は明褐色～黒色で粒子は細かく、粘性はない。土層のしまりは、耕作の状況によって大きく異なる。
- II 層 黒色土。縮まりが弱く、粘性も少ない。粒子は細かい。自然流路2の覆土である。
- III 層 茶色土と暗褐色土が混じる。粘性はないが縮まりが強い。自然流路2の覆土である。
- IV a 層 黒色土で粘性が強く粒は細かい。層の上部に焼山由来の火山灰 (KG-c) [早津1994] を部分的に含む遺物包含層で、遺物はKG-cより下から出土する。層の厚さは15～20cmである。
- IV b 層 暗褐色土。1mm程度の小礫を多く含む。縮まりがあるが粘性は弱い。
- IV c 層 黒色土に暗褐色土が混じっている。縮まりがあり粘性も強い。粒は細かい。
- IV d 層 黒色土。1cm程度の角礫を含む。縮まりがあるが粘性は弱い。
- IV e 層 黒色土。縮まりがあり粘性も強い。粒は細かい。焼山由来の火山灰 (KG-d) [早津1994] を層の上部に含む。
- IV f 層 褐色土。縮まりも粘性も弱い。粒は細かい。
- V 層 VI層とV層との漸移層。褐色土。
- VI 層 大田切川火碎流堆積層。固く結まった砂質土を主とし、人頭大程度までの角礫を多量に含んでいる。少なくとも2m以上の堆積があり、この上面を最終的な遺構確認面とした。

B. 遺構

1) 概観

調査区域は、用地買収まで行われていた耕作のため、全域にわたって基盤層のVI層まで擾乱を受けていた。遺構は性格不明のピットが9基検出され、このうち3基から平安時代の土師器が出土した。また、人工的な遺構ではないが、南西から北東に流れる自然流路1と、その支流である自然流路2が検出されている（第25図）。これらの自然流路は、調査区北側を東流する小河川に合流していたと推測される。



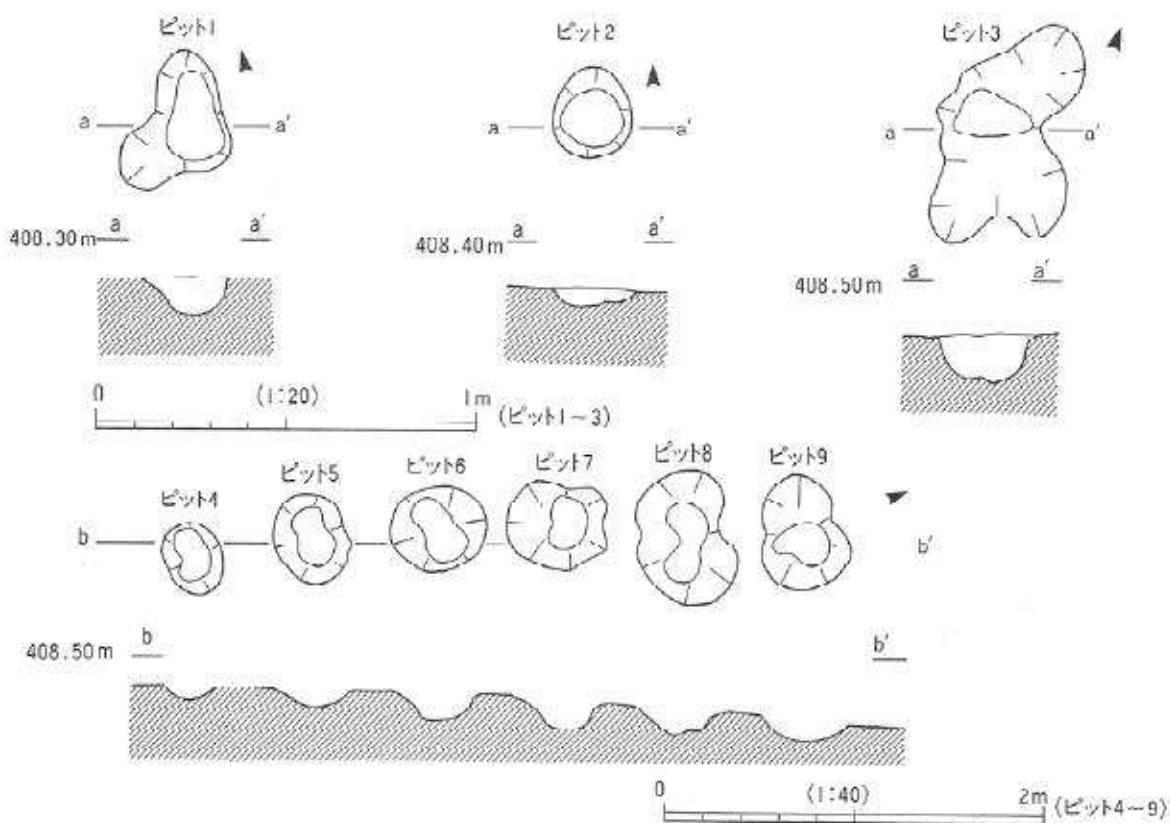
第25図 柳平遺跡調査区全体図

(2) 遺構各説

検出された9基のピットは、いずれも調査区の西部に位置している。このうち3基からは平安時代の土師器が出土し、遺物が出土しなかった残りの6基はほぼ一直線上に並んでいる。検出遺構付近は擾乱が一部VI層まで及んでいる地点であり、遺構・遺物の残存状況は不良であった。

ピット1 (第19図、図版31)

6 D-10グリッドで検出された。平面形は長軸42cm、短軸22cmの歪んだ楕円形で、深さは確認面から20cmである。覆土は単色でやや縮まりがあり、粘性が弱く粒の細かい黒色土である。土師器碗破片3点が出土した。



第26図 柳平遺跡遺構実測図

ピット2 (第19図、図版31)

6 D-14グリッドで検出された。平面形は長軸24cm、短軸20cmの楕円形で、深さは確認面から5cmである。覆土は单層でやや締まりがあり、粘性が弱く粒の細かい茶褐色土である。土師器碗の破片1点が出土した。

ピット3 (第19図、図版31)

6 D-17グリッドで検出された。平面形は長軸60cm、短軸34cmの不整形で、深さは確認面から14cmである。覆土は单層でやや締まりがあり、粘性が弱く粒の細かい黑色土である。土師器の碗と甕の破片が各1点ずつ出土した。

ピット4～9 (第19図、図版31)

6つのピットがほぼ等間隔に一直線に並んでおり、6 D-22、6 D-23、6 D-3グリッドで検出された。平面形は円形から楕円形で、大きさは長軸40～70cm、短軸30～45cmの範囲内である。確認面からの深さは8～16cmで、遺物は出土しなかった。

4. 遺物 (図版11・12・32・33)

出土遺物は平箱(54×34×10cm)2箱程度と少ない。縄文土器1点と近世以降の陶磁器片約20点以外はすべて平安時代の土器類である。平安時代の遺物はほとんどが土師器であり、この他の遺物は須恵器2点、灰釉陶器1点のみである。これらの遺物は、自然流路跡およびその周辺から出土しており、調査区域東半では皆無であった。

A. 平安時代の遺物 (図版11・12・32・33-1-46)

1) 土師器

椀 (1~23) 口縁部のみの小片が多く、底部が残存する4点以外は、無台椀と有台椀とを明瞭に区分できない。調整は、器体内外面はロクロナデ、底部は回転糸切りを基本としている。胎土はにぶい橙色を呈するもの (1・4、7・12、14・19) と、赤褐色を呈するもの (5・6・13・17) とに大別される。1~19はおそらく無台椀であろう。体部から口縁にかけて緩やかに湾曲するものと、直線的に立ち上がるものがある。8と12は、口縁を外方に引き出している。22は灯明皿として使用されたと思われる。内外面に煤状の炭化物が付着している。有台椀は3点認められる。22は高台と底面を区分せず、底面を凹面状に整えている。回転糸切り痕は残されている。21の底面もこれに類似するが、高台は端部を明瞭にしている。底面は平滑にナデられている。20は高台部が高さ約1.6cmと足高である。

黒色土器 (24~31) 土師器椀の一種ではあるが、ここでは分離して扱う。調整は土師器椀と基本的に共通している。口縁部破片4点 (24~27)、無台椀底部破片3点 (29~31)、体部下半が1点 (28) がそれである。25は体部下半をヘラケズリとしている。口縁部外面に見られる墨書きは、正位に書かれているとすれば、上半は「田」部である一文字と見られる。28にはある種の文様か、絵画の一部分と思われる墨書きがある。底部破片はすべてが回転糸切りである。31の内面には2本1単位とする放射状の暗文が描かれる。

長甌 (32~41) 色調については、椀と同様に2分されるが、明確には区分できない。口縁端部を内屈させる「越後系」は、皆無である。37は外面を口縁から体部上位にかけてロクロナデ、それより下位を縦方向のヘラケズリ、内面をカキ目としている。口縁内面はおこげ状の炭化物が1mm程度の厚さで付着している。38は砲弾形をとるものである。外面は細かい糸縁が入る平行文タタキ目であり、内面はナデおよび指頭状の押圧をしている。39の体部中位は、格子目状の粗大な平行文タタキを施した後、縦方向のヘラケズリを行っている。内面上位はロクロナデ、下位は斜方向のナデとしている。38は底部周囲をヘラケズリしている。32~35は口縁を丸く收めているが、35は口縁直下に凹線をひき、口縁を強調させている。

小甌 (40・41) 41は内外面ともロクロナデ、底面を糸切りしている。

2) 須恵器

甌 (42~43) 須恵器は図示した2点のみが出土している。42は甌の体部破片で、外面の一部に平行文タタキ目が、内面には同心円文の当て具痕が見られる。外面には自然釉が厚くかかっている。43は甌の口縁部破片で、色調は鈍い赤褐色を呈する。

3) 灰釉陶器

椀 (44) 灰釉陶器は図示した1点のみが出土した。施釉は内外面に施されるが、内面は、外面に比較して中心部近くにまでなされており、刷毛塗りと思われる。高台は端部を尖らせ、外端が接地しない。

4) 石器

砥石が1点 (46) 表面採集された。石材は凝灰岩で3面に機能面を持つ。1面は他の2面と異なり、ざらつき感があり、段が残されている。

B. 繩文時代の遺物 (図版12・33-47)

縄文時代後期あるいは晩期の粗製深鉢の体部下半である。底面には簾状の压痕が残る。

第VI章 まとめ

1. 横引遺跡

A. 繩文時代の土器について

横引遺跡では縄文時代早期から晩期までの土器が出土した。いずれの時期の遺物も細片で、出土量も多くない。詳細な型式名などを検討するには不充分な資料であるが、以下、時期ごとにまとめていく。

早期の押型文土器は、密接施文であり、押型文土器の中でも後出的な様相を呈するものである。

前期では羽状縄文が施文された深鉢と、神ノ木式・有尾式・諸磯C式に比定される土器がある。33の有尾式土器は、口縁部が直立気味で平縁である点などから、有尾式の中でも新しい段階に位置付けられる可能性がある。諸磯C式土器には棒状、ボタン状の粘土瘤を貼りつける古段階の特徴をもつものと、集合汎線を地文とし結節浮線文を文様要素とする新段階の特徴をもつものがある。羽状縄文の施文された土器は胎土に纖維を含むものと含まないものがある。纖維を含む土器は関東の諸磯C式期には見られなくなることから、前者はそれより前に位置付けられている神ノ木式・有尾式に伴うものであると考えられる。後者は神ノ木式～有尾式段階より後の所産と見ることもできるが、5のような平底の波状口縁の深鉢は、神ノ木式期にも存在する。また、5の口縁付近の羽状縄文により描出された菱形は、有尾式土器の口縁部文様帶に付けられる菱形文が意識されているとも考えられる。よって、無纖維の羽状縄文の土器については神ノ木式・諸磯C式までの幅をもって捉えておきたい。なお、口唇部に陰刻をもつ35については北白川下層式の可能性も考えられる。

中期の遺物は北区から出土した。13は大本8b～9式並行期のものである。14～16は唐草文形の土器であるが、隆盛期の矢羽状文を地文とする14から、施文方法が簡略化され磨消縄文を取り入れた16まで、時間幅をもって存在する。

後期は粗製土器が多いため詳しい時期は不明であるが、37・38の朝顔形深鉢が壇之内式に並行する段階のものであると推定される。

晩期は水I式前後の時期（21～27・41）が土体であるが、20は口縁部が「く」の字形に開き、撫糸文が施文されている点で、佐野II式の深鉢に類似する。

B. 古墳時代の土器について

古墳時代は遺物の出土のみであり、遺構は検出されていない。遺物は甕、小型壺、壺、器台などの土師器の煮炊具・食器具であった。所属時期は小型鉢1点が中期であるほかは古墳時代前期である。漆町編年〔田島1986〕に照らせば、およそ5～10群に対応する時間幅がある。遺物は小破片が多く、しかもI・II層あるいは擾乱層からの出土であったため、セット関係などを捉えることは困難であった。

甕についてみると、越後の在地系の甕〔坂井1983〕を主体として、布留式系甕形土器（以下布留甕）、S字状口縁白付甕形土器（以下S字甕）、箱清水式系の甕形土器がある。注目されるのは、S字甕と布留甕の存在である。いずれも小片であるが、S字甕は少なくとも2個体、布留甕は4個体が確認された。

越後におけるS字甕、布留甕の検出例は少ない。S字甕の検出例は、新井市斐太遺跡群中の上の平24号住〔駒井・吉田1962〕の1例、西山町高塙B遺跡〔坂井・金子1983〕の2例、中郷村籠峰遺跡〔川村1988〕の2例、黒崎町猪立C遺跡〔渡辺1994〕の4例がある。布留甕は龍峯遺跡の1例があるのみである。

横引遺跡のS字甕と布留甕は胎土分析を行っていないので、搬入品であるのか、越後在地産のものであるのかは明らかではない。しかし、これまで古墳時代前期の様相が不明瞭であった頸城平野南西部において、S字甕と布留甕が検出されたことは、東海・近畿・北陸との関係や、交流ルートを考える上で重要である。近年、当地域の同時期の調査も増加し、妙高村大洞原C遺跡（県教委・埋文事業団、平成6・7年度調査、未報告）・小野沢西遺跡〔（財）新潟県埋文事業団1995h〕では良好な資料が得られている。今後これらの資料との関係を見していくことで、古墳時代における横引遺跡の性格も明らかになっていくものと期待される。

C. 平安時代の住居跡について

横引遺跡の平安時代の遺構は2mほど離れた位置で検出された住居跡2棟がある。遺物は住居跡周辺から出土し、土師器の無台坏・小甕・長胴甕、須恵器の無台坏・有台坏、鉄鎌・鉄釘がある。

2棟の住居は同時存在とするにはあまりにも近づきすぎていることから、構築時期に差があると推定される。しかし、調査時点で2棟の住居跡間に切り合う部分がなかったため、切り合い関係から新旧関係を明らかにすることはできない。そこで、遺物と竈の主軸方向から推定したい。

S I 1から出土した遺物の時期は、今池遺跡群における編年のV期（坂井1984）に相当すると考えられる。これに対して、S I 2そのものの出土ではないにしろ、その付近から出土した無台坏（120）が、底部ヘラ切り、体部の立ち上がりが直線的で、同IV期の須恵器の特徴を示している。2棟の住居跡の間に時間差があると仮定し、包含層出土遺物の時期がV期を降るもののがみられないことを合わせて考えるならば、S I 2の時期はIV期を上限として、S I 1に先行する可能性がある。しかし、2基の竈跡の主軸方向がほぼ同方向であり、大きな時間差は認め難いこと、IV期の遺物は量的な保証がないことなどから、ここでは両者の間にIV～V期の中で短い間での先後関係があったことを推定するに止めておく。

2棟の住居の残されていた南側は急斜面になっているが、そこには縄文時代の遺物なども残されていたことから、平安時代においても同様の地形であったと推定される。また、今回の発掘調査範囲内において、この住居跡の周辺以外に平安時代の遺物け表採を含め全く採集されていない。よって、当時の居住範囲として台地先端部の極めて局所的な部分が選ばれていたことが窺える。このような立地環境から、平安時代の横引遺跡は「離れ国分」〔中山1976〕的性格をもっていたと考えられる。

2. 篠峰遺跡

A. SK 3 覆土内の縄文時代中期前葉土器について

SK 3 覆土内の土器は、廃棄の同時性が高いと考えられる一括資料であるが、SK 3にはV層とよく似た特に固く縮まる覆土が堆積していたため、遺構として十分な配慮をなさず、土器を収集するのみに止まってしまったものである。この時点では遺構の平面形も確認できず、遺構の記録一切を欠いている。その

後、和泉A遺跡の調査〔荒川1994・1995〕によって、この周辺の当該期の遺構については、同様な覆土の状況にあることが分かっている。

頸南地域における当該期の土器は、新井市大貝遺跡〔岡本ほか1967〕・新井市原通八ツ塚〔小野・古川ほか1982〕・妙高村道添遺跡〔室岡1994・1995〕・中郷村南田遺跡〔親跡1988〕に比較的良好な資料がまとまっている。また、隣接する中郷村和泉A遺跡には膨大な資料が存在しており、龍峰遺跡の土器は、和泉A遺跡の報告とともに再度考察されるべきものである。

新潟県域において土器の変遷を層位的に検証できる例は、巻町豊原遺跡〔小野・前山ほか1988〕・同町大沢遺跡〔前山1990〕の2例に限られる。また、北陸の中期前葉土器を包括している「新保・新崎式」の区分が混乱しているため、ここでは豊原遺跡・大沢遺跡の時期区分と、五領ヶ台式土器の時期区分〔今村1985〕を軸にSK3の編年的位置に言及しておく。

SK3覆土内の土器は、汎北陸的な新崎式とは区別されるものであり、信越県境地域という地理的条件のもとに形成された、中部高地的様相の強い一群である。北陸系の土器は3・7・19・20などが抽出されるものの、新潟県域の北陸系土器とは細部で異なっている。3の口縁部区画に置かれた渦巻き状の垂下文と棒状貼り付けは類例のないものであり、口縁に直接蓮華文を置く7の例はごく少数である。蓮華文については、有抉蓮華文と刻印蓮華文に大別され〔南1976〕、前者が古いものとして理解されているが、吉川町長峰遺跡〔室岡・関ほか1984〕の例をみると描出手法は多様であり、単純な理解は控えておく。19・20は胎土・焼成に相違があり、19のように人さな無文帯の周囲を刻み目で縁取る例も少ない。

1は異系統の文様要素が混在し、SK3の中では古い要素をもっている個体である。口縁部区画に施文された半截管状工具による縦位の平行沈線文は、豊原遺跡V群などに見られるものであるが、23と大きな時間差がないという判断からすれば、その時期に遡るものとは考えにくい。むしろ、平行沈線文に長い存続期間を与えるべきものと考える。無文帯上の交互刺突は、五領ヶ台式に多く見られるものであり、また、頸部直下の三角形区画も五領ヶ台式におけるY字状垂下文の変化形態であろうか。同心円文については、安田町萩野遺跡に類例がある。しかしながら、個別の文様要素の消長は、地域間の時間差が予想されるものであり、これのみを抜き出して他地域の編年に直接対比することは難しい。

2・4は文様帯および文様割り付けの構成と器形において1と同一であるが、描かれる文様は全く異なる。このことは、龍峰遺跡の土器が多系統の要素を混在させ、安定的な「型」を形成していないことを反映しているものであろう。2の口縁部および胴部の文様モチーフは北陸系土器にはないもので、その点では14・16も同様である。なお、4は1あるいは2をごく簡略化させたものであり、単沈線と列点のみで文様が描かれている。垂下する平行沈線に列点を組み合わせる13の例は、湯沢町岩原I遺跡・津南町上野遺跡・新井市原通八ツ塚にあり、これは五領ヶ台II式に見られる胴部の垂下沈線と共通するものと思われる。22は類例がなく、系統不明のものである。23は金雲母が多く含み赤味を帯びる胎十が際だつもので、存續の十器ではないであろう。現時点では類例を見いだせないが、有節沈線（押引き文、連続刺突文）による文様の描出手法は、五領ヶ台式直後型式（神谷原式）以降に対比できるものであり、SK3覆土土器の編年的位置は、この土器が重要な指標となっている。なお、五領ヶ台II式～五領ヶ台式直後型式～落沢系土器は、卷町大沢遺跡のIII期にまとまって存在する。

新井市原通八ツ塚は龍峰遺跡の東方約5kmの距離にあり、SK3の比較対象となるものだが、「口縁下垂文」を施文する土器が主体であり、類似する個体は少数である。これも地域色が強く、北陸系の土器そのものとして理解できないものが多い。口縁下垂文は、北陸～中部・関東に広く分布するもので、新保式

期第III期〔加藤1986〕に盛行しているが、前述のように地域間の時間差が考慮されるべきものである。報告では口縁下垂文を、半降起線を密に並べるA・間隔をもつB・帯描きの汎線とするCに分類し、時間差を与えていた。口縁下垂文AおよびBがSK3の1に対比されること、13に類似する五領ヶ台系土器があることからすれば、原通八ツ塚とSK3には時間的な接点を認めるもの、原通八ツ塚がより古い位置に置かれるものと考える。報文は原通八ツ塚の土器を3時期に区分しており、ある程度の時間幅を見なければならぬが、SK3の土器をみると、この地域では多様な系統の要素が比較的長い時間の中で錯綜していることに考慮すべきであろう。そのような状況は長野県三木村の上赤塙遺跡〔寺内1991〕にも言えるようであり、信越県境地域における土器の様相はきわめて複雑な状況にあると思われる。その点では、和泉A遺跡の土器が重要な基準的資料となるであろう。また、飯山市深沢遺跡〔西沢1982〕を標準とする「仮称“深沢式土器”」〔高橋1989〕類似の土器が道添遺跡・南田遺跡にまとまって出土しており、頸南地域では深沢式土器の存在が、共伴する土器の時間を規定するように思われる。

B. 繩文時代後期・晩期の柱穴列と土器について

『龍峰遺跡発掘調査概報』(以下、「村教委概報」と略す)〔中郷村1987〕の遺構模式図と、本報告書調査区域(以下、県教委区域とする)の遺構を合成したのが、第27図である。「村教委概報」区域(以下、村教委区域とする)では、環状に配置される柱穴列群と、この西側に位置する1群が認められ、後者の柱穴列



第27図 龍峰遺跡遺構配置図 (中郷村教委1987)を一部改変して使用

群西方は遺構の分布が希薄となっているため、西方は遺跡が終息しているように見える。しかし今回、県教委区域において柱穴列2基が検出され、遺構の配置については、新たな要素が加えられた。また、籠峰遺跡南方には、縄文時代中期・晩期の集落跡である和泉A遺跡〔荒川1994・1995〕が存在しており、二つの遺跡は片貝川右岸の浸食崖にそって連続しているものと思われる。なお、現状は溜め池に付帯する道路と村道によって、二つの遺跡は分断されており、本報告書の調査区域と和泉A遺跡とは最短距離約140mを測る。

土器については、後期後葉から晩期後葉にかけてのものが間断なく出土しており、全時期を通じて、大局的に北信の様相と共通しているようである。しかし、「籠峰遺跡発掘調査概報II」〔中郷村教委1988〕が、「どの区域においても復元可能な一括土器は検出できず、大半が異個体片の散乱である。」としているように、県教委区域でも小片が多く、器体の全容を知り得るのはS X 4構成の土器に限られている。土器の伴出状況についてもまた同じである。長野県域における晩期土器は、佐野I式以前の晩期初頭土器群—佐野Ia式・Ib式—佐野II式—水I式—水II式という編年が示されており〔綿田1988〕、有文精製土器については、晩期初頭土器群—佐野Ib式に40~42・53~64・66~68が、佐野II式に69が、水I式に74が、それぞれ相当する。口縁直下に隆帶を貼り付ける88・89もこれに並行するものである。粗製土器については、有文精製土器との対応が不明であり、間隔を置いて口縁外面をつまみ出すことが特徴的な78・87、楽浪調整を加える99、100が水I式に相当するものの、それ以外については、後期後葉～佐野II式の長い時間枠を与えるほかない。

3. 柳平遺跡

A. 住居の散在性について

人工的な遺構はピット9基が検出されたのみであった。しかし、自然流路跡における遺物の出土状況からすれば、遺物は偶然この流路に廃棄されたのではなく、その至近に1棟・2棟の住居が存在したと考えるべきであろう。遺物は住居からの廃棄物であり、おそらく住居跡は耕作によって埋滅したと思われる。一次調査の結果では、二次調査区域周囲は遺物の分布がほぼ皆無であり、住居を想定すればそれは孤立しており、関東でいわれる「離れ国分」「前掲、中山1976」的な状況で存在する。頸南地域の平安期遺跡には、竪穴住居跡および建物跡の散在、あるいは孤立的な立地の小集落という在り方が指摘できる。この例については、妙高高原町中ノ沢遺跡〔阿部1995〕(竪穴住居跡3基)、同町閑川谷内B遺跡〔(財)新潟県埋文事業団1995a、滝沢1995〕(竪穴住居跡2基、掘立柱建物跡1基)、同町東浦遺跡〔(財)新潟県埋文事業団1993〕(竪穴住居跡1基、掘立柱建物跡2基)、中郷村横引遺跡〔本書〕(竪穴住居跡2基)、同村中ノ原遺跡(県教委昭和63年調査・未報告、竪穴住居跡2基)があげられる。また、小地点的な遺物の分布があり、住居の存在を推測できるものに、中郷村籠峰遺跡〔中郷村1987〕がある。籠峰遺跡・横引遺跡がやや古いことを除けば、これらの遺跡の時期は、9世紀後半から10世紀前半期であり、大きな差はないと思われる。おそらく水田耕作に依存できないこの地域にあって、このような在り方が何に起因しているのか、主に牛耕の面からの検討が必要であろう。

註1) 〔(財)新潟県埋文事業団1993〕は、「竪は単独で出土し、周囲に竪穴住居・柱穴などの痕跡は認められなかった。」としているが、竪穴住居跡の竪部分のみが検出できたとすべきである。

B. 土師器の時期と系統について

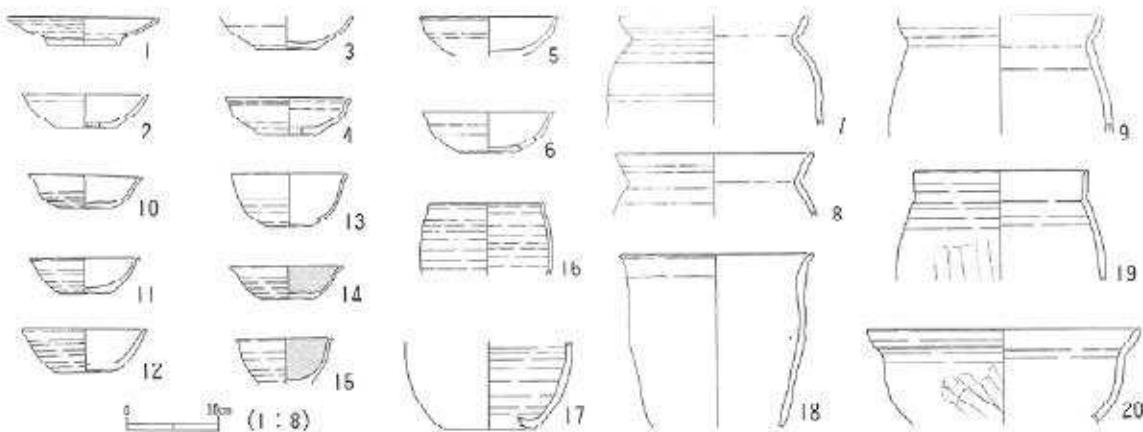
1点のみ出土している灰釉陶器碗は、小片ではあるが、施釉手法から美濃窯光ヶ丘1号窯式前後の時期を考えられる。光ヶ丘1号窯式の実年代は9世紀後半とされており〔前川1987、斎藤1994〕、併出した遺物も9世紀後半から10世紀初頭の年代を考えている。須恵器は食膳具が皆無で、貯蔵具である甕の破片が2点出土しているのみであり、須恵器が減少する長野県方面と動向を同じくしている。土師器碗については、大半が細片のために個体数を把握できないが、土師器碗と黒色土器とが、6:1程度割合を占めており、この点についても、黒色土器の比率が高い長野県方面と共通する。

長甕の口縁端部は、すべて丸く收めており、内屈するものは皆無である。この点では、これらは北信系の系譜にあるものと思われる。北信系の甕について、頸城・魚沼地方で在地系の甕に混在していることがすでに指摘されており〔坂井1993〕、北信系甕と越後系甕は口縁部形態だけでなく、胎土・色調も異なると説明されている。一方、長野県においても口縁端部を内屈させるものが「越後型」と理解されており〔審査会1988〕、口縁形態を北信系（型）と越後系（型）との区分の指標としている点は同様である。

しかし、信濃で見られる越後系甕が、製作技法上は北信系と共通すること、越後で見られる北信系甕についても製作技法上は越後系と共通すること、さらに、両系の形態差が必ずしも胎土・色調の相違と一致しないという見解が示されている〔審査会1995〕。

39については、タタキによる丸底化を行わず、体部下半をヘラケズリとするらしく、色調も赤褐色を帶びる。これは北信系甕そのものと理解される。一方、40は色調が明らかに峻別される赤褐色を呈しているものの、タタキによる丸底成形であり、製作技法上は越後系である。口縁部破片の色調については、掲載した34~37において、37のみが比較的赤味が強いと観察される程度であり、はっきりと分別できない。

長野県境に接する頸南地域にあっては、在地系・非在地系一主体・客体という関係で土器を一概に認識することは不可能であり、この点では、柳平遺跡出土の土師器を、越後における北信系とすることはできないと思われる。頸南地域では、須恵器窯や土師器焼成遺構といった土器生産の遺構が確認されておらず、土師器の生産地を頸城平野または北信地方に求めるにすれば、信越折衷的な土器は、いずれかの生産地が他方の製作技法や色調を擬したものと考えられるが、この地域で土師器の生産があった可能性を否定でき



第28図 「北信系甕」とこれに共伴する土器

1~9 新井市杉原遺跡 SKb
10~20 青海町須汎角地A遺跡 SI 227
〔高橋1989〕・〔青海町教育委員会1988〕から転載

ない。また、仮に頸南地域の長甕の土体が北信系であるとすれば、北信系は北信・頸南系として理解することとなろう。なお、北信系甕は、西頸城郡青海町須沢角地A遺跡 S I 227 [青海町教育委員会1988] にあり、姫川流域においても北信系土器の分布に留意すべきであろう。

頸南地域山間部における平安期の遺跡については具体的な報告がないうえ、柳平遺跡の資料も僅少であるため、土器の様相は現時点で全く不明である。3節Aに上述した遺跡の報告によって、北信系甕の問題も含めて、当該期の土器様相が明らかになるものと思われるが、頸南地域と頸城平野の接点にある新井市杉明遺跡 [高橋1989] の資料がその一端を示している。杉明遺跡でIV期・V期に区分されている土師器甕は、口縁端部をまるく收める、いわゆる北信系甕が多く、大原2号窯式期とされる灰釉陶器の皿も含まれる。報文は、大原2号窯式期の実年代を10世紀後半以降としているため、これを10世紀前半とする現在の研究成果 [前掲、前川・斎藤] と一致していないが、柳平遺跡の土器は光ヶ丘1号窯式期の碗を含むことから、杉明遺跡におけるIII期あるいはそれ以前に置かれる。ただし、資料的に十分でないために土師器そのものの形態的な比較は頸南地域の他の遺跡資料にゆだねる。

註1) 漆け掛けの灰釉陶器碗が出土していることをもって、10世紀後半の住居跡としているが、灰釉陶器碗の窯式が不明であり、検討を要する。

要 約

1. 本書は上信越自動車道関係発掘調査報告の一冊目である。
2. 横引遺跡・籠峰遺跡・柳平遺跡は、新潟県南西部に位置する妙高山の、北東側山麓の緩斜面に所在する。行政区画は前二者が中頸城郡中郷村、後一者は同郡妙高村である。
3. 発掘調査は上信越自動車道の建設に伴い、平成4年度から6年度にかけて実施した。
4. 調査の結果、縄文時代・古墳時代・平安時代の遺物・遺構が検出された。内容は巻末の報告書抄録に記すとおりであるが、各遺跡の調査成果を以下に要約する。

横引遺跡

縄文時代前期の土器については、中部地方の土器型式と共に多くのものが出土している。

古墳時代の土師器は、東海地方系など非在地系のものが混在している。

平安時代の竪穴住居跡2基が検出されているものの、竪とその周辺部分にとどまる。

籠峰遺跡

県史跡指定範囲の至近を調査したが、遺物・遺構の分布は比較的散漫であった。

縄文時代後期～晩期の柱穴列2基を検出し、過去の調査で理解された遺跡の全体構成に新たな要素をつけ加えた。

SK3から縄文時代中期前葉土器が多く出土し、土器の変遷を理解する資料が得られた。

柳平遺跡

人為的な遺構はないが、平安時代の孤立的な住居の存在を類推できる遺物が出土している。

平安時代の土器は長野県北部との強い共通性が見られ、頭城平野のそれとは、様相が異なる。

引用・参考文献

- ア赤塚 仁・二上徹也 1993 「中部高地における縄文前期木葉土器群の編年」「第6回縄文セミナー前期終末の諸様相」
縄文セミナーの会
- 赤塚 仁・三上徹也 1994 「下島式・晴ヶ峯式の再検討とその意義—縄文時代前期末葉土器群の型式変化を通して—」『中部高地の考古学』IV 長野県考古学会
- 赤塚次郎 1986 「「S字彫」覚書85」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 愛知県埋蔵文化財センター
- 安達厚三・木下正史 1974 「飛鳥地域出土の古式土器」『考古学雑誌』第60号第2号 日本考古学会
- 阿部雄生 1995 「中ノ沢遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 阿部朝嗣・石川日出志・田中耕作 1980 「鳥屋遺跡」 豊栄市教育委員会
- 荒川隆史 1994 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成5年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 1995 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒木ヨシ 1969 「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』14 物質文化研究会
- イ石川智紀 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第58集 沖ノ羽遺跡I (A地区)」 新潟県教育委員会 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川日出志 1987 「縄文時代晚期の土器」『史跡寺地遺跡』 新潟県吾妻町
- 石原正敏 1993 「新潟県の諸式土器」「第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相」 縄文セミナーの会
- 今村啓爾 1985 「五頭・台式土器の編年—その細分および東北地方との関係を中心に—」『東京大学文学部考古学研究会研究紀要』第4号 東京大学文学部考古学研究室
- オ大場厚順 1978 「妙高山信仰の変遷と修験行事」「山岳宗教史研究叢書」9 富士・御嶽・中部富山 名著出版
- 大場厚順 1994 「妙高山信仰の展開」「妙高村史」 妙高村
- 大原工義 1901 「北信濃山ノ神遺跡出土の土器について」「信濃」第33巻第4号 信濃史学会
- 青海町教育委員会 1988 「須沢角地A遺跡発掘調査報告書」
- 岡本郁栄・米山正次 1983 「新潟県妙高山火山山麓における縄文時代の遺跡を覆う火山灰の¹⁴C年代」『地質科学』37巻6号
- 岡本郁栄 1982 「奥の城(西峯)遺跡第二次発掘調査概報」 中郷村教育委員会
- 岡本 勇 1967 「大貝遺跡の調査」 立教大学考古学研究会
- 小野 昭・古川知明 1982 「原通八ツ塚」 新井市教育委員会
- 小野 昭・小熊博史 1987 「卷町布目遺跡の調査」「巻町史研究」III 卷町
- 小野 昭・前山悟明 1988 「各町豊原遺跡の調査」「巻町史研究」IV 卷町
- カ加藤三千夫 1986 「第8群土器 新保式期」「真脇遺跡」 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 金子 達 1987 「越後・佐渡の神社」「新潟県史」通史編2中世 新潟県
- 金子拓男 1983 「猪立遺跡発掘調査報告書」 黒崎町教育委員会
- 龟井 功・鈴木俊成 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集 砥野遺跡・音林遺跡」 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川村浩司 1993 「北陸北東部の古墳出現前後の様相」「日本考古学協会1993年度新潟大会シンポジウム2『東日本における古墳出現過程の再検討』」日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 1988 「新潟県龍峰遺跡遺跡出土の外來系土器3例」「新潟考古学談話会会報」第1号 新潟考古学談話会
- キ北村 亮・高橋 保 1990 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原I遺跡」 新潟県教育委員会
- 桐原 健 1968 「平安期に見られる山地居住民の遺跡」「信濃」第20巻第4号 信濃史学会
- ク黒坂周平 1989 「東山道」「長野県史」通史編第一巻 長野県史刊行会
- 黒坂慎二 1982 「羽状縄文系土器の文様構成(点描)ー1ー」「研究紀要」第6号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 黒坂慎二 「羽状縄文系土器様式」「縄文土器大観」1草創期・早期・前期 小学館
- コ小池義人 1995 「関川谷内A遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度」(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 駒井和愛・吉田幸一郎 1962 「斐太」 慶友社
- サ(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1993 「東浦遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」

- (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1993 「大重沢B遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』
- (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1995 a 「関川谷内B遺跡」『埋文にいがた』No.13
- (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1995 b 「小野沢西遺跡」『埋文にいがた』No.13
- 斎藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産－旗投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器株式の歴史－』 古代の土器研究会
- 坂井秀弥・全子拓男 1983 『高垣B遺跡発掘調査報告書』 西山町教育委員会
- 坂井秀弥^ら 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今波遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥^ら 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集 新井山坪ノ内館跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥^ら 1989 a 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山二賀II遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 b 「北陸型土師器長壺の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1990 「越後平安期土器編年表－西南部師域地方を中心にして－」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会
- 坂井秀弥 1993 「長野県飯山市の平安期佐渡産須恵器、越後糸土師器」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
- 管沢 浩 1988 「古代の土器」『長野県史考古資料編』全1巻(4) 遺構・遺物 長野県史刊行会
- 管沢正史 1995 「信・越両地域にまたがるロクロ土師器群の在り方について」『新潟考古学談話会会報』第15号 新潟考古学談話会
- シ品田高志 1991 「越後における古墳時代土器の変遷－前期土器編年表の現状と編年試案－」『柏崎市立博物館館報』No.6 柏崎市立博物館
- ス鈴木敏昭 1991 繩文前期シンボジウム「有尾・大木そして黒浜－縩文前期中葉土器群にみる系統と交流の実態－」開催報告 『埼玉考古』第28号 埼玉考古学会
- 鈴木俊成・春日真夫・高橋一功 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区」 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 七瀬 孝一 1966 「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』第五十一卷第三号 日本考古学会
- 瀬櫻道二 1993 「群馬県における前期終末の様相」『第6回縩文セミナー 前期終末の諸様相』 縩文セミナーの会
- タ高橋 保^ら 1985 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第39集 クテ遺跡」 新潟県教育委員会
- 高橋 保 1989 「県内における縩文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 高橋 勉 1994 「高床山遺跡群」『新井市遺跡確認調査報告書』 新井市教育委員会
- 高橋 勉 1989 「杉明遺跡」 新井市教育委員会
- 高橋義彦編 1928 『越佐史料』卷四
- 滝沢規朗 1992 「底部径の変遷とその製作技法について－柏崎平野を中心に－」『新潟考古学談話会会報』第10号 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 1993 「越後における古墳出現前後の土器様相－繩文の縦横構成比と内部調整を中心にして－」『新潟考古学談話会会報』第11号 新潟考古学談話会
- 田嶋明人^ら 1986 「漆町遺跡」 石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1991 「土師器の編年5 北陸」「古墳時代の研究」第6巻 土師器と須恵器 雄山閣
- 増原春則^ら 1985 「圓ノ峰」 野沢温泉村教育委員会
- 子親跡 高 1988 「南田遺跡」 中郷村教育委員会
- 親跡 高 1990 「圓錐 小丸山遺跡」 中郷村教育委員会
- 親跡 高 1992 「圓錐 植ノ木町遺跡」 妙高村教育委員会
- 子吉内隆夫 1991 「長野県上水内郡三水村・上赤塙遺跡出土の縩文中期土器について」『長野県考古学会誌』61・62号 長野県考古学会
- 寺崎裕助 1995 「新潟県における中期初頭の土器－関東・中部高地系土器を中心として－」『第8回縩文セミナー 中期初頭の諸様相』 縩文セミナーの会
- 寺島俊郎・岡村秀雄^ら 1991 「長野県埋蔵文化センター埋蔵文化財発掘調査報告書12 上信越道埋蔵文化財発掘調査報告書2」 日本道路公团東京第二建設局・長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- ト土井義夫・淡江芳浩 1987 「平安時代の居住形態」『物質文化』49 物質文化研究会
- 田海義正・高橋 保^ら 1990 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 清水上遺跡」 新潟県教育委員会
- 常盤井智之・望月静雄^ら 1994 「飯山市埋蔵文化財調査報告書第36集 上野遺跡IV」 長野県飯山市教育委員会
- 戸根与八郎・鈴木俊成 1995 「小糸遺跡出土の備蓄錢について」『研究紀要』 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 土橋由理子 1994 「横引遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成5年度』 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子 1995 「柳平遺跡・小野沢西遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度』 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中川成夫・岡本 勇・小松芳男・秦 繁治 1959 「顯聖寺遺跡」 満川原村教育委員会
- 中川成夫・岡本 勇・加藤晋平 1967 「森生遺跡」『頭南』 新潟県教育委員会・頭南地区総合学術調査会
- 中郷村教育委員会 1987 「龍峰遺跡発掘調査概報」
- 中郷村教育委員会 1988 「龍峰遺跡発掘調査概報II」
- 中郷村教育委員会 1989 「縄文人の心と手—図録龍峰遺跡」
- 中島栄一・渡辺朋和 1989 「浮縫網状文系土器様式」『繩文土器大綱』4 小学館
- 水峯光一 1967 「佐野」 長野県下高井郡山ノ内町教育委員会
- 中村幸一・松永靖大 1981 「新潟県史」資料編6 近世一上越編 新潟県
- 二新潟県教育委員会・頭南地区総合学術調査会 1966 「頭南」
- 西沢隆治 1982 「深沢遺跡」『長野県史』考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信) 長野県史刊行会
- 西野秀和 1983 「竪鳥町徳前C遺跡調査報告(IV)」 右川町埋蔵文化財センター
- ノ綾登 健・洞口正史・小島敦了 1985 「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』第37巻第4号 信濃史学会
- ハ萩原三雄 1986 「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨考古論集1 野沢昌康先生頌寿記念論文集』 山梨県考古学協会
- 橋口定志 1985 「平安期における小規模遺跡出現の意義」『物質文化』44 物質文化研究会
- 花岡 弘 1991 「土師器の編年(6中部高地)」『古墳時代の研究』第6巻 土師器と須恵器 雄山閣
- 早津賢一 1985 「妙高火山群」 第一法規出版
- 早津賢二 1990 「妙高は噴火するか」 新潟日報事業社
- 早津賢二 1994 「新潟焼山火山の活動と年代~歴史時代のマグマ噴火を中心として~」『地学雑誌』Vol.103 No.2 (社) 東京地学協会
- 原 明芳 1988 「長野県の9世紀後半から12世紀の食膳貝の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2 (財) 長野県埋蔵文化財センター
- 原田政信・森鷗 1990 「円光房遺跡」 長野県戸倉町教育委員会
- ヒ平林 彰 1983 「繩文晩期の土器」『長野県史考古資料編』全1巻(4) 遺構・遺物 長野県史刊行会
- 平野団三 1978 「第三章古代」『中郷村史』 中郷村役場
- 木本間信昭・室岡 博 1976 「兼保遺跡」 妙高高畠町教育委員会
- マ前川 葵 1987 「平安時代における東海糸綫積陶器の使用形態について」『中近世土器の基礎研究III』日本中世土器研究会
- 前山精明 1990 「大穴遺跡」 戸倉町教育委員会
- ミ上川徹也 1987 「柴久保式土器再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1 (財) 長野県埋蔵文化財センター
- 皆川完一・花ヶ前盛明 1983 「新潟県史」資料編4 中世二 新潟県
- 南 久利 1976 「北跡の縄文中期前葉の編年に関する一試論」『石川考古学研究会会誌』第19号 石川考古学研究会
- 妙高村史編さん委員会 1994 「妙高村史」 妙高村
- △室岡 博 1966 「先史・古代の頭南」『頭南一中郷城郡南部学情総合調査報告書』 新潟県教育委員会・頭南地区総合学術調査会
- 室岡 博・関 雅之 1984 「長峰遺跡II」 吉川町教育委員会
- 室岡 博 1986 a 「兼保遺跡(D地区)」 妙高高原町教育委員会
- 室岡 博 1986 b 「中古遺跡」 妙高村教育委員会
- 室岡 博 1994 「道添遺跡I」 妙高村教育委員会
- 室岡 博 1994 「原始」『妙高村史』 妙高村史編さん委員会
- 室岡 博 1995 「道添遺跡II」 妙高村教育委員会
- 室岡 博 1986 「新潟県中郷城郡中郷村籠峠遺跡第一次発掘調査報告書」 中郷村教育委員会
- モ望月正樹 1994 「大端遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成5年度』 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ヤ山崎 盛 1982 「歴史の遺調査報告書X-飯山道-」 長野県教育委員会
- 山本 雅 1985 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第37集 金屋遺跡」 新潟県教育委員会
- 山本幸俊 1991 「北国街道I」 新潟県教育委員会

- ヨ古井雅勇 1994 「荒川町埋蔵文化財発掘調査報告第2集 古谷地B遺跡・寺田遺跡・赤井遺跡」 荒川町教育委員会
- 吉岡豪暢 1977 「加賀・珠洲」「世界陶磁全集」3日本中世 小学館
- ワ福田弘実 1988 「縄文後期の土器・縄文晚期の土器」「長野県史考古資料編」全1巻(4) 遺構・遺物 長野県史刊行会
- 渡邊朋和 1992 「新潟県における縄文時代晚期初頭～中葉の土器群」『第5回縄文セミナー 縄文暦期の諸問題： 縄文セミナーの会』
- 渡辺ますみ 1994 「猪立C遺跡発掘調査報告書」 黒埼町教育委員会
- 和田壽久 1995 「大堀遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成6年度」 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- ナ長野市遺跡調査会 1986 「長野市の文化財第18集 塩崎遺跡群－市道松筋－小田井神社地点遺跡－」長野市教育委員会
- ノ藤巻正信・伊藤恒彦・品田尚志 1985 「柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 割羽大平・小丸山」 柏崎市教育委員会
- ヤ山田芳和 1986 「石川県能都町真脇遺跡」 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団

別表 I 横引遺跡縄文土器観察表

粘土の表記：英=石英、長=長石、チャ=チャート

番号	器種	出土地点	層位	部位	文様	色調	胎土	備考
1	深鉢	6B23	II	体	横凹押型文	明黄褐	英	
2	深鉢	10B15	II	口	LR-KLの横位羽状縄文	明褐	織維	
3	深鉢	6B12	II	口	LR RLの横位羽状縄文	明赤褐		
4	深鉢	6B22	II	底	LR-RLの縦位羽状縄文	明赤褐		
5a	深鉢	6B12	II	口	LR-RLの菱形羽状縄文	明赤褐		5bと同一個体
5b	深鉢	6B12	II	体	LR-RLの横位羽状縄文	明赤褐		5aと同一個体
6	深鉢	S13	-	体	LRの横位縄文	褐		
7	深鉢	6B8	II	口	結節浮線文・集合沈線	橙	英・長	
8	深鉢	7B7	II	体	結節浮線文・集合沈線	鈍い褐	英・長	
9	深鉢	8B2	II	口・体	結節浮線文・集合沈線	鈍い橙		
10	深鉢	6R25	II	体	半截竹管・粘土瘤貼付	明黄褐	長	
11	深鉢	8B1	II	口	半截竹管・粘土瘤貼付	明褐	英	
12	深鉢	6B23	II	口	RL縄文地文・半截竹管	明赤褐		
13	深鉢	9B4	II	口	LR縄文地文・隆帶渦巻	鈍い黄橙		
14	深鉢	11B21	II	体	隆帶渦巻・撚糸状沈線	鈍い青綠	砂粒	
15	深鉢	10C10	II	体	隆帶渦巻	鈍い黄橙	砂粒	
16	深鉢	11B6	II	体	沈線渦巻・LR縄文充填	鈍い黄橙		
17	深鉢	5C3	II	口	口唇に陰刻	明赤褐	英	
18	壺	7B11	II	口・体	無文	黒褐	英・長	
19	?	9B19	II	口頸	沈線・刺突	内：橙 外：褐	長・白色岩片	
20a	?	8B1	II	頸	撚糸	内：鈍い橙 外：黒褐	長・チャ	
20b	?	8B8	II	頸	撚糸	内：鈍い橙 外：黒褐	長・チャ	
21	?	南区	I	体	沈線による変形工字文	橙		
22a	?	11B21	II	口	口唇粘土紐貼付・条痕	鈍い褐	英・砂粒	22bと同一個体
22b	深鉢	10B15	II	口	口唇条痕	鈍い褐	英・砂粒	22aと同一個体
23	深鉢	9B17	II	体	縦位朱痕	内：鈍い褐 外：黒褐		
24	深鉢	10D15	II	体	横・斜位条痕	褐	長・砂粒	
25	深鉢	7B14	II	体	斜位条痕	褐		内面炭化物付着
26	深鉢	SK3	-	体	無文	橙	チャ	内面炭化物付着
27	深鉢	SK3	-	体・底	縦位条痕	鈍い褐	白色粒子	
28	深鉢	23C21	擾乱	体	山型押型文	鈍い褐	英・長・織維	
29	深鉢	23C16	擾乱	口	ヘラ状工具押引文・ループもつLR縄文	褐	英・長・チャ・織維	31と同一個体
30a	深鉢	22C20	擾乱	口	C字形爪形文・ループもつKL縄文	褐	砂粒・織維	30bと同一個体
30b	深鉢	22C25	IV	口	C字形爪形文・ループもつRL縄文	褐	砂粒・織維	30aと同一個体
31	深鉢	23C16	擾乱	体	LR・ループもつRLの羽状縄文	褐	英・長・チャ・織維	29と同一個体
32a	深鉢	20D2	IV	体	横位RL縄文	褐	長・織維	32bと同一個体?
32b	深鉢	20D2	IV	体	横位RL縄文	褐	長・織維	33aと同一個体?
33a	深鉢	20D2	IV	口・体	沈線・横位LR縄文	褐	織維	33bと同一個体
33b	深鉢	20D2	IV	底	横位LR縄文	褐	織維	33aと同一個体
34	深鉢	21D11	II	口	RL-LRの横位羽状縄文	暗褐		
35	深鉢	21D11	II	口	口唇に刺突・RL-LRの横位羽状縄文	鈍い褐	英・長・チャ	
36	深鉢	23C17	擾乱	体	RL-LRの横位羽状縊文	鈍い黄褐	長	
37	深鉢	19B24	II	体	沈線区画・LR縄文充填	黒褐色	白色砂粒	朝顔型深鉢?
38	深鉢	22B16	II	口	口唇に沈線	黒褐色	砂粒	朝顔型深鉢?
39	浅鉢	北区	I	口・体	無文	鈍い黄橙	チャ	
40	浅鉢	北区	I	口	口唇に爪形文	内：明赤褐 外：赤褐	砂粒	
41	浅鉢	19C4	II	口	口唇に円孔	黒褐色	砂粒	
42	?	22C20	擾乱	体	沈線・列点・爪形文	鈍い黄褐	織維	

別表2 横引遺跡古墳時代土器観察表

出土の表記：英=石英、長=長石、雲=雲母、チャ=チャート

番号	器種	出土地点	層位	法量	色調	胎土	焼成	遺存度	手法	備考
130	甕	南区	I	口16.0	内：鈍い橙 外：橙	長・雲・ チャ	堅	口1/9	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	
131	甕	南区	I	口19.0	内：橙 外：橙	英・長	堅	口1/16	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：スス
43	甕	19B15	II	口頸一	内：褐 外：褐	雲・英	堅	?	内：ミガキ 外：直線・波状櫛描文	外：スス 箱清水式系
44	甕	19B19	II	口	内：褐 外：褐	雲・英	堅	?	内：ミガキ 外：波状櫛描文	箱清水式系
45	甕	19B15	II	頸12.0	内：褐 外：褐	雲・英	堅	?	内：ミガキ 外：直線・波状櫛描文	外：スス 箱清水式系
49	壺	20C22	II	口16.5	内：橙 外：鈍い橙	英・長・ チャ・中疊	堅	口全存	内：ヘラミガキ 外：ヘラケズリ・ヘラミガキ	
50	壺	22B11	II	口15.2	内：鈍い橙 外：鈍い橙	英・長	軟	口1/24	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	
51	壺	20D17	II	口14.0	内：鈍い橙 外：橙	-	堅	口1/16	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	
52	小型壺	20C8	II	口11.1	内：橙 外：明赤褐	英・長・雲 小疊	軟	口1/8	内：ヘラミガキ・赤彩 外：ヘラミガキ・赤彩	
53	小型壺	19C5	II	頸4.0 底2.0	内：鈍い橙 外：明赤褐	英・長・ 雲・チャ	軟	口1/4	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ・赤彩	器面剥落
54	小型壺	20C9	II	口9.4	内：浅黄橙 外：浅黄橙	雲・チャ・ 小疊	堅	口1/8	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	
55	小型壺	19C5	II	口13.0	内：鈍い橙 外：鈍い橙	英・雲	堅	口1/24	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	
56	小型壺	20C11	II	口14.0	内：赤 外：赤	英・長・雲	堅	口1/4	内：ココナデ・ハケ目・ ヘラミガキ	
57	小型壺	20C17	II	口14.0	内：明赤褐 外：明赤褐	英・雲	堅	口1/8	内：ヨコナデ・ハケ目・ ヘラミガキ	内：黒色斑点
58	布留甕	19C20	II	口13.4	内：鈍い橙 外：鈍い橙	長・雲・ 小疊	堅	口1/15	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：スス
59	布留甕	19C20	II	口12.0	内：鈍い橙 外：鈍い褐	英・小疊	堅	口1/16	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：スス
60	布留甕	19B24	II	口13.0	内：鈍い黄橙 外：鈍い黄橙	英	堅	口1/19	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：スス
61	S字甕	北区	I	-	内：鈍い黄橙 外：鈍い黄橙	英・長	堅	?	内：ヨコナデ 外：ココナデ・ハケ目	外：スス
62	S字甕	20C16	II	-	内：鈍い橙 外：鈍い黄橙	英・長・ チャ・小疊	堅	?	内：ヨコナデ・ハケ目・ヘラケズリ 外：ヨコナデ・ハケ目	外：スス
63	甕	19B25	II	-	内：鈍い黄橙 外：鈍い黄橙	英・チャ	堅	?	内：ナデ・ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	
64	小型甕	19D23	II	口12.3	内：赤褐 外：明赤褐	英・長・雲	堅	1/3	体部内外：ハケ目 口縁内外：ヨコナデ	外：スス・炭物
65	甕	19B25	II	口14.0	内：鈍い赤褐 外：明赤褐	英・長	堅	口1/16	内：ハケ目 外：ココナデ	
66	甕	19C10	II	口13.6	内：鈍い赤褐 外：明赤褐	英・雲	堅	口1/10	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	外：炭化物
67	甕	20B11	II	口15.4	内：赤褐 外：明赤褐	英・長・ 雲・チャ	堅	口1/7	内：ヨコナデ・ヘラミガキ 外：ヨコナデ	外：スス
68	甕	19C5	II	口12.0	内：鈍い橙 外：褐	英・雲	堅	口1/8	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：スス
69	甕	20C6	II	口15.4	内：赤褐 外：明赤褐	長・チャ	堅	口1/9	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	外：スス
70	甕	20C7	II	口12.6	内：赤褐 外：鈍い赤褐	英・小疊	堅	口1/10	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	
71	甕	20C1	II	口15.6	内：黒褐 外：鈍い赤褐	雲・小疊	堅	口1/10	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	外：黒色斑点
72	甕	19B23	II	口19.0	内：鈍い橙 外：鈍い橙	英・チャ	堅	口1/24	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ	外：スス
73	甕	20C1	II	口18.0	内：橙 外：鈍い橙	英・雲・ チャ	堅	口1/6	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ	外：スス

番号	器種	出土地点	層位	法量	色調	時	焼成	保存度	手法	備考
74	甕	20B22	II	口13.6	内：橙 外：鈍い橙	英・雲・ チャ	堅	口1/8	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ	外：スス
75	甕	20C14	II	口16.0	内：鈍い橙 外：橙	英・長・雲	堅	口7/8	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ・ハケ目	外：炭化物
76	甕	19C4	II	口14.0	内：鈍い橙 外：褐灰	チャ	堅	口1/24	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ	外：スス
77	甕	22B16	II	口14.0	内：明赤褐 外：明赤褐	英・雲	堅	口1/5	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ	外：スス
78	甕	19C3	II	口18.8	内：鈍い橙 外：鈍い橙	長・雲・ チャ	軟	口1/16	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：スス
79	甕	20C11	II	口19.0	内：明赤褐 外：明赤褐	英・長・雲 チャ	堅	口1/9	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ・ハケ目	外：スス
80	甕	20C11	II	口14.0	内：明赤褐 外：明赤褐	長・雲	堅	口1/10	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：炭化物
81	甕	北区	II	口19.0	内：鈍い橙 外：鈍い橙	英・長・ 雲・チャ	軟	口1/8	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ	外：炭化物
82	甕	19B25	II	口19.0	内：鈍い橙 外：鈍い橙	長・チャ	堅	口1/8	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ・ハケ目	
83	甕	20B21	II	口13.0	内：鈍い橙 外：鈍い赤褐	英・長・ チャ	堅	口1/3	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ	被熱 外：スス
84	甕	19C9	II	口16.0	内：鈍い橙 外：鈍い褐	英・長・ 雲・チャ	軟	口1/8	内：ヨコナデ？ 外：ヨコナデ？	外：スス
85	甕	22B25	II	口20.0	内：鈍い褐 外：鈍い赤褐	英・長・雲	堅	口1/16	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ・ハケ目	外：炭化物
86	甕	22B12	II	口16.0	内：鈍い橙 外：明赤褐	長・雲・ チャ	堅	口1/16	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ・ハケ目	外：炭化物
87	甕	20C2	II	口16.0	内：鈍い赤褐 外：鈍い赤褐	英・長・ チャ	堅	口1/8	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：スス
88	甕	20D16	II	口14.0	内：橙 外：鈍い褐	英・長・ チャ	堅	口1/16	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：炭化物
89	甕	19C5	II	口15.2	内：橙 外：鈍い橙	英・長・ チャ	堅	口1/10	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	外：スス
90	甕	22B11	II	口14.6	内：赤褐 外：鈍い赤褐	英・長	堅	口1/8	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ・ハケ目	外：炭化物
91	甕	19C5	II	口12.6	内：橙 外：鈍い橙	英・チャ	堅	口1/6	内：ヨコナデ・ハケ目 外：ヨコナデ・ハケ目	外：スス
92	甕	19C9	II	口8.2	内：鈍い橙 外：鈍い橙	英	堅	口1/7	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ・ハケ目	外：スス
93	台付甕	北区	I	—	内：明褐 外：明赤褐	英・長・雲	堅	底1/2	内：ノア 外：ハケ目	
94	小型甕	19C9	II	底2.6	内：暗赤褐 外：赤褐	英・長・ チャ	堅	底完存	内：ハケ目 外：ヘラミガキ	外：黒色斑点
95	甕	20C12	II	底7.0	内：赤灰 外：鈍い褐	英・長・雲	堅	底1/2	外：ヘラミガキ	内：剥落
96	甕	20C6	II	底4.5	内：明赤褐 外：褐灰	英・長・雲	堅	底完存	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	内：剥落
97	甕	19C5	II	底2.0	内：鈍い橙 外：赤灰	チャ	堅	底完存	内：ナテ 外：ハケ目	
98	甕	22C16	II	底5.5	内：灰黄褐 外：橙	英・長・ 雲・チャ	堅	底完存	内：ナテ 外：ハケ目	
99	甕	19C3	II	底4.0	内：鈍い橙 外：橙	長・チャ	堅	底2/3	内：ハケ目 外：ヘラミガキ・ハケ目	
100	甕	20C9	II	底2.2	内：鈍い黄橙 外：褐灰	英・長・ 雲・小礫	堅	底1/2	外：ハケ目	充填法？
101	甕	20C16	II	底4.5	内：明赤褐 外：明赤褐	英・チャ	軟	底1/2	内：ハケ目 外：ハケ目	充填法？
102	甕	北区	I	底4.0	内：鈍い黄橙 外：明赤褐	英・長・雲	堅	底1/2	内：ハケ目 外：ヘラミガキ	充填法？
103	器台	20B25	II	底11.8	内：鈍い橙 外：鈍い橙	英・長	堅	脚2/3	内：ナテ 外：ヘラミガキ・赤彩	脚部四方透かし
104	小型甕	12Tr.	—	口13.0	内：鈍い褐 外：鈍い橙	英・長・雲	堅	口1/12	内：ヘラミガキ 外：ヘラミガキ	

別表3 横引遺跡平安時代須恵器・土師器観察表

胎土の表記：英=石英、長=長石、雲=雲母、チャ=チャート

番号	器種	出土地点	層位	法量	色調	胎上	焼成	遺存度	手法	備考
105	須恵器 無台杯	SII 竈前庭部	-	口13.6	内：褐灰 外：褐灰	長・チャ	堅	3/4	ロクロナデ 底：回転糸切り	
106	須恵器 無台杯	SII 竈前庭部	-	口13.6	内：褐灰 外：褐灰	英・長・ 小礫	堅	4/5	ロクロナデ 底：回転糸切り	
107	須恵器 杯蓋	SII 竈前庭部		15.6	内：灰黄 外：灰黄	英・長 雲・チャ	堅	2/3	天外：ロクロケズリ 体部外面に2条の沈線	
108	土師器 無台杯	SII 竈前庭部	-	底8.0	内：純い褐 外：褐灰	雲	堅	口1/4	非ロクロ 底：無調整	
109	土師器 小甕	SII 竈前庭部	-	底6.0	内：純い褐 外：暗灰黄	英・長・雲	軟	底完存	ロクロナデ 底：回転糸切り	内外：火はしけ
110	土師器 小甕	SII 石組下部	-	口12.2	内：純い橙 外：純い橙	英・長・雲	堅	口1/6	ロクロナデ	内外：火はしけ 外：スズ
111	土師器 小甕	SII 竈前庭部	-	口11.2	内：浅黄橙 外：明赤褐	雲・チャ	堅	口1/18	ロクロナデ	内面口縁と外面にスズ
112	土師器 台付鉢 又は盞	SII 竈前庭部	-	頃5.2	内：明赤褐 外：明赤褐	英・長・雲	軟	?	非ロクロ 内外：赤彩	古墳時代前期の土師器 外：火はしけ
113	土師器 長胴甕	SII 竈		口24.0	内：淡橙 外：純い橙	英・長・ チャ	堅	1/2	内：カキ目 外：ロクロナデ 下半のみヘラケズリ	口縁と体外部：スズ
116	須恵器 有台杯	8B2	II	底9.0	内：灰黄褐 外：褐灰	雲	堅	1/8	内：ロクロナデ 底：ヘラケズリ	
117	須恵器 有台杯	8B3	II	底8.6	内：灰 外：灰	英	堅	7/8	内：ロクロナデ 外：回転ヘラ切り	
118	須恵器 有台杯	7B15	II	底11.0	内：灰 外：灰	白色粒子	堅	1/8	内：ロクロナデ 底：同軸糸切り	
119	須恵器 有台杯	7B15	II	底9.0	内：褐灰 外：褐灰	チャ	堅	1/8	内：ロクロナデ 外：回転ヘラ切り後ヘラケズリ	
120	須恵器 無台杯	7R8	II	口13.6	内：灰白 外：褐灰	チャ	堅	1/8	内：ロクロナデ 底：回転ヘラ切り後ヘラナデ	
121	須恵器 無台杯	7B7	II	底15.0	内：灰黄褐 外：灰黄褐	チャ	堅	底2/3	内：ロクロナデ 底：回転糸切り	
122	須恵器 無台杯	5B6	II	底7.0	内：純い黄橙 外：純い黄橙	チャ	堅	1/4	内：ロクロナデ 底：回転糸切り	
123	土師器 無台杯	7B20	II	底6.0	内：純い橙 外：明赤褐	英・長	軟	底1/2	内：ロクロナデ 外：回転糸切り	
124	土師器 小甕	8B16	II	底6.0	内：暗赤褐 外：橙	雲	軟	底完存	内：ロクロナデ後ナデ 底：回転糸切り後ヘラケズリ	
125	土師器 小甕	5C2	II	底6.6	内：純い赤褐 外：純い赤褐	英・長・雲	堅	底3/8	内：ロクロナデ 外：回転糸切り後ヘラナデ	
126	須恵器 甕	5B12	II	-	内：灰 外：灰	英・長	堅	?	内：同心円当て基痕 外：平行条線叩き目	
127	土師器 甕	7B13	II	口14.0	内：純い褐 外：黒	英・長・雲	堅	口1/12	非ロクロ 内外：ナデ	外：スズ
128	土師器 小甕	7B19	II	口12.3	内：橙 外：橙	英・長・雲	軟	口1/6	ロクロナデ	内外：火はしけ
129	土師器 甕	23C19	II	口20.0	内：明赤褐 外：橙	英・長・ 角閃石	堅	口1/10	ロクロナデ	北信系の甕？

別表4 横引遺跡石器観察表

番号	器種	出土位置	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考
46	打製石斧	8B8	II	82.00	50.00	17.90	83.73	流紋岩	刃部摩耗
47	磨製石斧	8B8	II	108.85	54.25	20.85	190.88	蛇紋岩	刃部刃こぼれ
48	擦器	22R12	II	18.35	29.55	9.00	4.00	黑耀石	
132	砥石	5B11	II	79.35	36.95	31.40	143.20	凝灰岩	
133	砥石	8B10	II	52.25	27.30	18.20	37.48	凝灰岩	

別表5 横引遺跡鉄製品観察表

番号	器種	出土地点	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
114	釘(頭)	SII 竈前庭部	—	16.70	9.80	10.85	1.05	
	釘(脚)	SII 竈前庭部	—	42.60	16.60	4.00	4.40	
115	鍤	SII 竈前庭部	—	190.00	25.00	2.50	33.18	

別表6 篠峰遺跡出土土器観察表

法星欄の*は復元品

番号	器種	出土地点・層位	法量	混入物	色調	地文	備考
1	深鉢	SK3	口36.5*	1mm角閃石	外:暗褐色 内:橙 に赤い褐		
2	深鉢	SK3	頸25.7*	~1mm角閃石	暗褐色	R	内外:炭化物
3	深鉢	SK3	口16.0*		内:暗赤褐色 外:黒		
4	深鉢	SK3			黒	RL	内外:炭化物
5	深鉢	SK3	口12.6		外:黒褐色 内:褐	R	内外:炭化物
6	深鉢	SK3			外:褐 内:極暗褐色	RL	
7	深鉢	SK3			暗褐色	RL	内外:炭化物
8	深鉢	SK3			に赤い褐	RL	
9	深鉢	SK3			明褐色		
10	深鉢	SK3			外:黒 内:に赤い褐		
11	深鉢	SK3			外:に赤い褐 内:黒褐色		
12	深鉢	SK3			外:灰褐色 内:黒褐色		
13	深鉢	SK3			外:黒 内:に赤い褐		
14	深鉢	SK3		~1mm角閃石	黒		
15	深鉢	SK3			外:に赤い褐 内:黒褐色		
16	深鉢	SK3			極赤褐色		
17	深鉢	SK3			外:黒褐色 内:に赤い褐		
18	深鉢	SK3			外:黒褐色 内:明褐色		
19	深鉢	SK3			外:黒褐色 内:明褐色		
20	深鉢	SK3			外:黒褐色 内:明褐色		
21	深鉢	SK3			外:黒褐色 内:褐		
22	深鉢	SK3			外:黒褐色 内:褐		
23	深鉢	SK3	口17.5*	~1mm雲母多量	黒褐色		外:炭化物
24	深鉢	SK3			外:暗褐色 内:褐	RL	外:炭化物
25	深鉢	SK3	底13.7*		外:黒褐色 内:暗褐色		
26	深鉢	SK3	底14.0		外:黒褐色 内:に赤い褐	R	縞条体条痕
27	深鉢	8D10・IV層	口11.3		外:暗赤褐色 内:黒褐色		
28	深鉢	9C2・Tr.		~2mm石英	外:明赤褐色 内:褐		
29	深鉢	7C2・II			明褐色		
30	深鉢	7D3・II			外:灰白色 内:明褐色		
31	深鉢	7B5・I		~1mm白色砂	外:赤褐色 内:に赤い赤褐色		
32	深鉢	9C5・Tr.			外:褐 内:に赤い褐		
33	深鉢	7C24・II		~1mm白色砂	に赤い褐		条線
34	深鉢	8D13・IV			外:暗褐色 内:赤褐色		
35	深鉢	8D15・IV		~3mmチャート	外:に赤い赤褐色 内:暗赤褐色	R	
36	深鉢	8D22・II			黒褐色		条線
37	深鉢	9D10・II			に赤い褐	LR	
38	深鉢	8B4・II		~2mm白色砂	暗赤褐色		
39	深鉢	7Tr.			外:明褐色 内:灰白色		
40	碗	SX4	口9.2		暗赤褐色		
41	長杯状	SX4	口8.5		暗赤褐色		
42	深鉢	SX4	口14.0		外:暗赤褐色 内:に赤い褐	LR	
43	深鉢	SX4	胴26.3*	~1mm白色砂	外:赤褐色 内:暗赤褐色	LR	内:炭化物
44	深鉢	SK5			外:赤褐色 内:暗赤褐色		内:炭化物 76と同一個体
45	深鉢	SK5			明褐色	LR	外:炭化物
46	深鉢	SK6			外:に赤い褐 内:黒褐色		内:炭化物
47	深鉢	5C8・II			外:暗褐色 内:に赤い褐		
48	深鉢	7R12・Tr.			に赤い褐	LR	
49	深鉢	5C5・II			明褐色	RL	
50	深鉢	8B10・II			灰褐色	LR	外:炭化物
51	壺	7C4・搅乱			に赤い褐	LR	
52	深鉢	8C6・II			明褐色	LR	
53	深鉢	6B21・II		~2mm白色砂	暗赤褐色	LR	外:赤彩
54	深鉢	6B21・II			外:に赤い赤褐色 内:に赤い褐	LR	
55	深鉢	5C22・II			外:褐灰 内:灰褐色	LR	外:赤彩

法量欄の*は復元値

番号	器種	出土地点・層位	法量	混入物	色調	地文	備考
56	壺	6C 4・II	口14.5*		明褐灰	LR	外: 蒼彩
57	壺?	5C 2・II			外: 黒褐 内: 褐	LR	外: 赤彩
58	浅鉢	9D13・II			褐	LR	
59	壺	5C 6・II	口12.2*		暗褐	LR	外: 赤彩
60	深鉢?	?・II			暗赤褐	LR	内: 岩化物
61	台付鉢	7C17・II	底8.3		外: 黒褐 内: 暗赤灰		
62	台付鉢	10C17・II	口18.6*		にぶい橙		
63	浅鉢	6B21・II			にぶい赤褐	LR	
64	浅鉢?	7B22・II			外: 明赤褐 内: 黑褐	LR	外: 赤彩
65	浅鉢	9B 8・I			にぶい赤褐	LR	
66	深鉢	10D 9・Tr.		~2mmチャート	にぶい赤褐		
67	浅鉢	9C21・II	口18.5*	~1mmチャート・石英	にぶい赤褐		外: 赤彩
68	壺	7D 8・II			にぶい赤褐		外: 赤彩
69	壺?	5C8・倒木痕		~2mm石英・雲母	褐		
70	壺?	6B21・II			灰白		
71	?	9D 5・II			にぶい褐		
72	深鉢	5D1・倒木痕			灰褐		
73	深鉢	5C21・II			外: 黒褐 内: 极暗褐		
74	浅鉢	10C 6・Tr.			極暗赤褐		
75	?	6B21・II	口13.0*		外: 明赤褐 内: にぶい橙		
76	深鉢	8B 4・II	口32.8*		暗赤褐		内: 岩化物
77	深鉢	7C11・II	口21.8*		にぶい赤褐		
78	深鉢	5D1・倒木痕	口35.0*		外: 極暗赤褐 内: 暗赤褐		
79	深鉢	2C13・II	口31.0*		暗赤褐		外: 岩化物
80	深鉢	6C 7・II	口35.5*		にぶい橙		
81	深鉢	9B 7・II			外: 黒褐 内: 明赤褐		
82	深鉢	4B16・Tr.			外: 明褐灰 内: 灰褐		
83	深鉢	5D1・倒木痕			褐灰		外: 岩化物
84	深鉢	9B7・倒木痕			赤褐		
85	深鉢	6B16・II	口32.8*	2~4mm灰色砂	にぶい赤褐		内外: 岩化物
86	深鉢	6C 5・II	口16.8	2mm灰色砂	外: 暗赤褐 内: にぶい橙		外: 岩化物
87	深鉢	5C16・II			暗褐		内外: 岩化物
88	深鉢	4C10・			外: 赤褐 内: 黑褐		
89	深鉢	4B20・I			外: 暗赤褐 内: 黑褐		
90	深鉢	3C10・II			灰褐		外: 岩化物
91	深鉢	8D 5・II			外: 黒褐 内: 赤褐		
92	深鉢	6B21・II		~1mm灰色砂	にぶい赤褐		
93	深鉢	9D15・II		~3mm石英	にぶい橙		
94	深鉢	5D11・II			外: 黒褐 内: 灰褐		
95	深鉢	7B10・搅乱			灰褐		外: 岩化物
96	深鉢	7D 5・II		~2mm灰色砂	にぶい橙	LR	
97	深鉢	7D 5・II			灰褐	LR	
98	深鉢	9D 5・II		~1mm灰色砂	外: にぶい橙 内: 暗赤褐	LR	
99	深鉢	5D12・I			橙		条痕
100	深鉢	5D11・II	底8.3*		外: 明赤褐 内: にぶい橙		
101	深鉢	7B 8	底5.4		にぶい赤褐		
102	深鉢	7C10・II	底4.6		外: 黒褐 内: にぶい褐		
103	深鉢	5C 9・I	底9.5*	~2mm灰色砂	外: 灰褐 内: 黑褐		網代痕
104	深鉢	5C 1・I	底9.2		淡黄橙		網代痕
105	深鉢	7C 5・II	底9.5		外: 明赤褐 内: 暗赤褐		網代痕
106	深鉢	5D11・II	底14.6		にぶい赤褐		網代痕
107	杯	9D13・I	口11.9*		灰		斑状の黒色吹き出し
108	甕	8A22・II			褐灰		内: 次オーリーブの自然釉

別表7 鶴峰遺跡石器觀察表

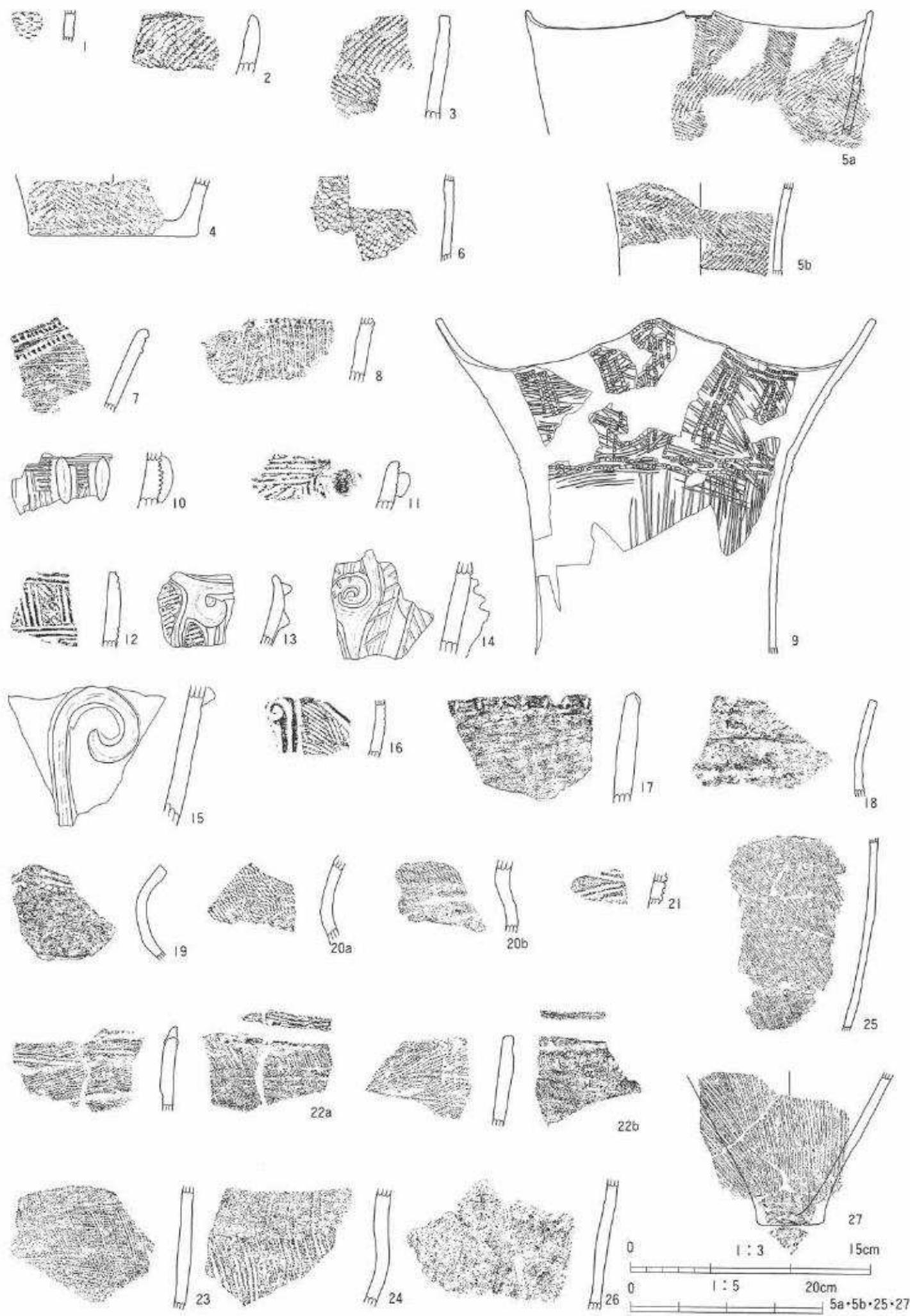
番号	種別	出土地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	状態
109	磨石類	7B25	圓木底	9.8	7.6	4.9	388.0	安山岩	完
110	磨石類	5C1	II	9.0	9.1	4.6	412.5	安山岩	完
111	磨石類	4C23	II	9.9	7.7	5.8	584.4	安山岩	完
112	磨石類	4B20	I	6.5	6.4	3.5	167.2	安山岩	欠
113	磨石類	5C18	II	8.9	7.2	4.6	329.2	安山岩	完
114	磨石類	4B23	II	8.5	9.2	4.0	294.0	安山岩	完
115	磨石類	6C19	II	8.0	7.8	5.6	441.0	安山岩	完
116	磨石類	6C16	II	11.4	9.2	6.3	905.4	安山岩	完
117	磨石類	9C22	I	11.3	7.8	5.1	546.0	安山岩	完
118	磨石類	6B9	攪乱	8.8	7.7	6.1	541.1	安山岩	完
119	磨石類	3C8	II	10.3	9.4	6.6	724.6	安山岩	完
120	敲石具	4C25	II	13.3	5.6	3.4	388.0	安山岩	完
121	打製石斧	6C29	II	7.4	6.8	1.7	121.8	安山岩	欠
122	石鏟	6C24	II	4.1	1.6	0.6	4.0	頁岩	欠
123	石鏟	6C10	II	4.4	1.2	0.5	2.3	ナメト	完
124	石冠	6C4	II	5.1	4.5	3.8	64.9	安山岩	欠
125	石儀?	7R21	II	8.1	5.8	3.9	234.6	安山岩	欠

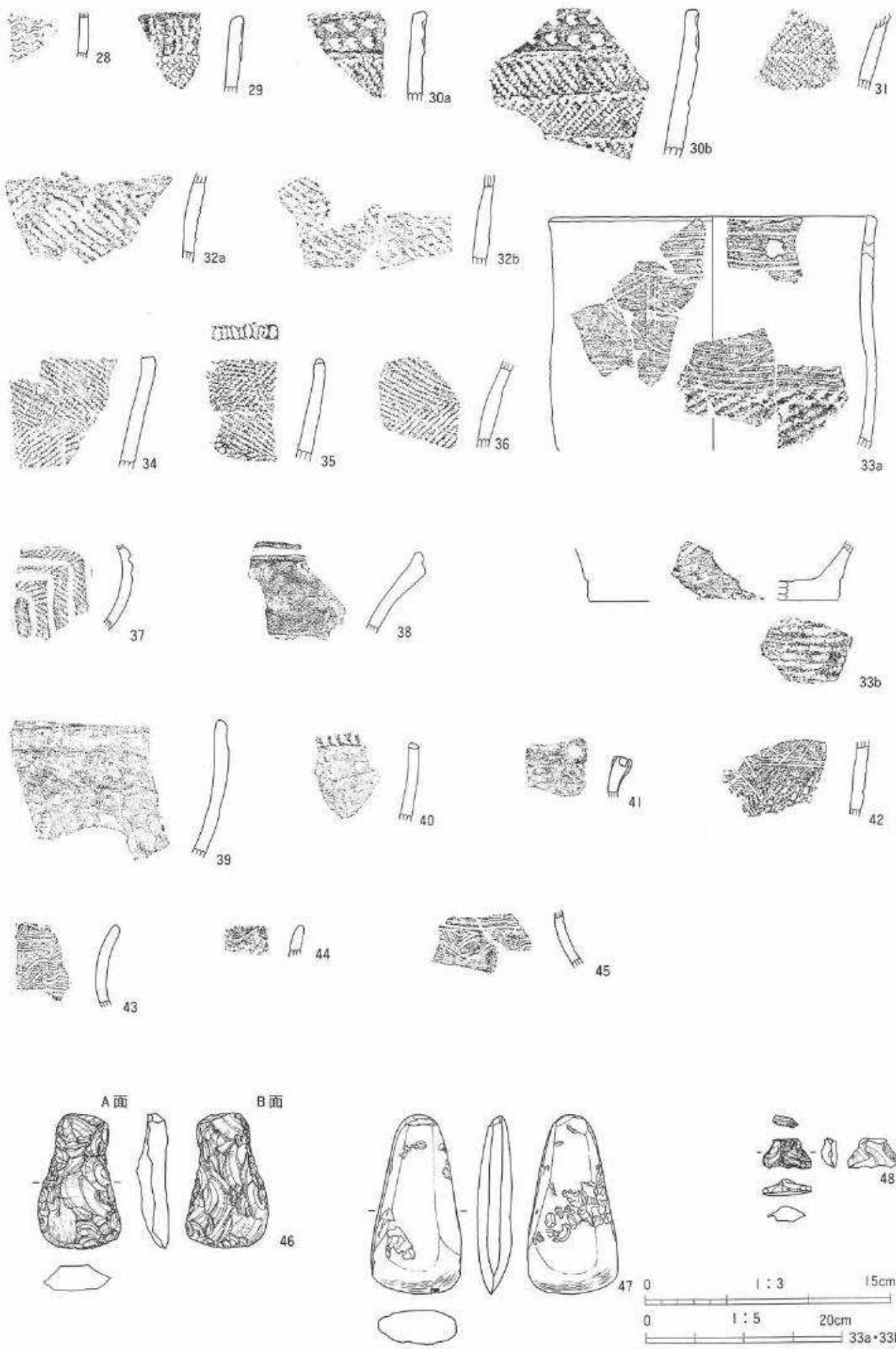
別表8 柳平遺跡出土土器観察表

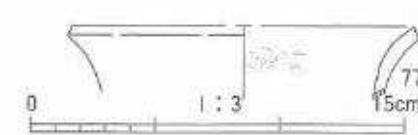
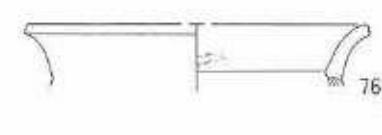
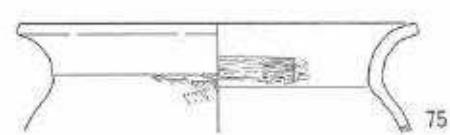
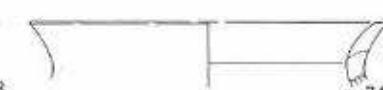
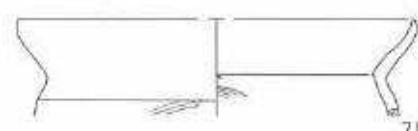
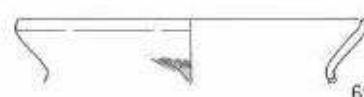
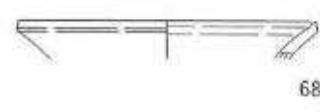
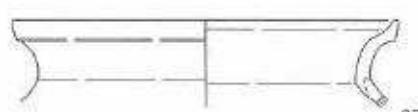
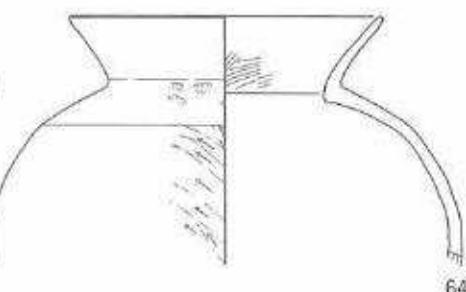
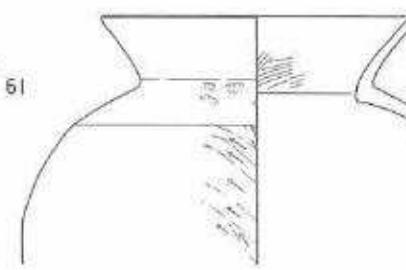
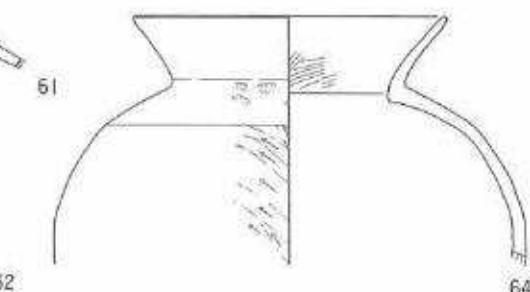
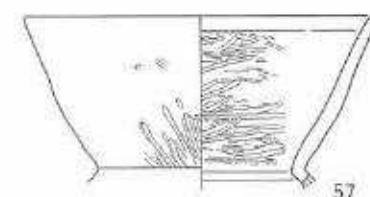
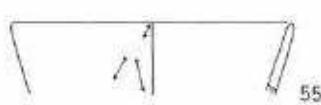
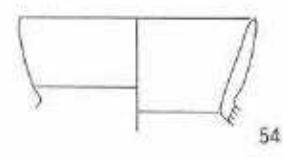
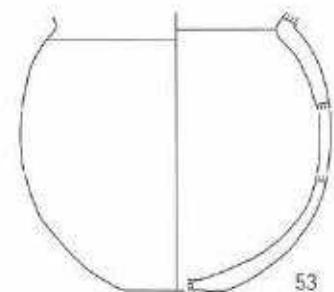
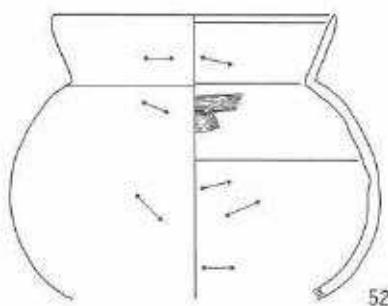
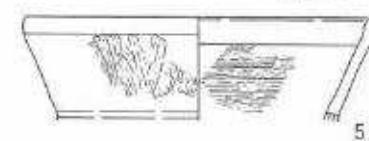
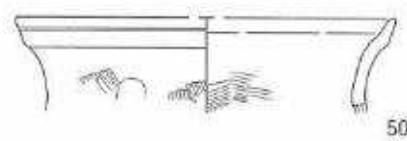
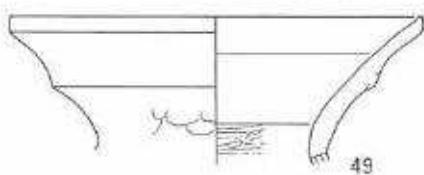
法量欄の＊は復元値

番号	出土地点	種別	器種	法量	胎土	色調	焼成	遺存
1	6E17	土師器	無台椀	口14.0*	並	にぶい橙	軟	1/10
2	6F30	土師器	無台椀	口14.0*	良	橙	普	1/9
3	6F15	土師器	無台椀	口14.0*	良	橙	善	1/11
4	6E21	土師器	無台椀	口13.0*	並	にぶい橙	善	1/13
5	5D7	土師器	無台椀	口14.0*	精 良	外:赤褐 内:明赤	堅	1/5
6	7E16	土師器	無台椀	口14.0*	並	にぶい赤褐	善	1/9
7	6E15	土師器	無台椀	口15.0*	並	にぶい橙	軟	1/16
8	5F5	土師器	無台椀	口14.0*	精 良	橙	善	1/8
9	6F14	土師器	無台椀	口13.0*	精 良	橙	普	1/10
10	6F20	土師器	無台椀	口13.0*	並	橙	軟	1/9
11	34Tr.	土師器	無台椀	口13.0*	精 良	橙	普	1/12
12	6F18	土師器	無台椀	口13.4* 底6.4	精 良	橙	堅	底2/3
13	6F18	土師器	無台椀	口12.6* 底6.4	精 良	明赤褐	堅	1/2
14	6F9	土師器	無台椀	口13.0*	並	にぶい橙	善	1/5
15	16F7	土師器	無台椀	口13.0*	並	にぶい橙	普	1/9
16	34Tr.	土師器	無台椀	口12.6* 底5.2	並	淡棕	軟	底1/1
17	34Tr.	土師器	無台椀	底6.6*	並	外:棕 内:にぶい黄橙	普	口1/9
18	6F16	土師器	無台椀	底5.0*	並	浅黄棕	軟	1/3
19	7F2	土師器	無台椀	底6.8*	並	橙	普	1/3
20	6F15	土師器	有台椀	底9.2*	精 良	にぶい橙	普	1/2
21	5D11	土師器	有台椀	底7.0*	精 良	橙	軟	1/5
22	7E1	土師器	有台椀	底7.0	精 良	明赤褐	堅	底1/11
23	5D24	土師器	無台椀	口12.8* 底6.0*	並	淡黄棕	普	1/7
24	6E20	黑色土器	無台椀	口16.0*	精 良	明赤褐	普	1/4
25	6E25	黑色土器	無台椀	口13.4*	精 良	にぶい橙	堅	2/5
26	5E15	黑色土器	無台椀	口13.0*	並	橙	堅	1/9
27	6E22	黑色土器	無台椀	口14.0*	並	にぶい橙	普	1/18
28	6F16	黑色土器	無台椀	底6.0*	並	にぶい橙	普	1/10
29	6F18	黑色土器	無台椀	—	並	にぶい黄橙	普	—
30	6F2	黑色土器	無台椀	底6.0	並	橙	堅	1/2
31	6F10	黑色土器	無台椀	底5.0*	並	明赤褐	普	底1/1
32	6F14	土師器	甕	口20.0*	並	棕	普	1/20
33	5F5	土師器	甕	口20.0*	精 良	橙	普	1/20
34	5D24	土師器	甕	口19.0*	並	棕	普	1/10
35	34Tr.	土師器	甕	口20.0*	精 良	明赤褐	普	1/10
36	34Tr.	土師器	甕	底12.0*	精 良	棕	普	1/5
37	5D12	土師器	甕	口19.0*	並	棕	普	1/3
38	6E5	土師器	甕	—	並	明赤褐	普	—
39	34Tr.	土師器	甕	—	並	橙	普	—
40	6E16	土師器	小 甕	口12.0*	精 良	橙	普	1/5
41	6F25	土師器	小 甕	口11.2* 底6.4	並	橙	普	口1/4 底1/1
42	12T	須恵器	甕	—	精 良	外:淡黄 内:灰	堅	—
43	6F12	須恵器	甕	口24.0*	並	にぶい赤褐	軟	1/20
44	6D20	灰釉陶器	有台椀	底7.0*	精 良	所黃褐	堅	1/7
45	5E10	繩文土器	深 夕	底9.0	並	にぶい黄橙	普	底1/1

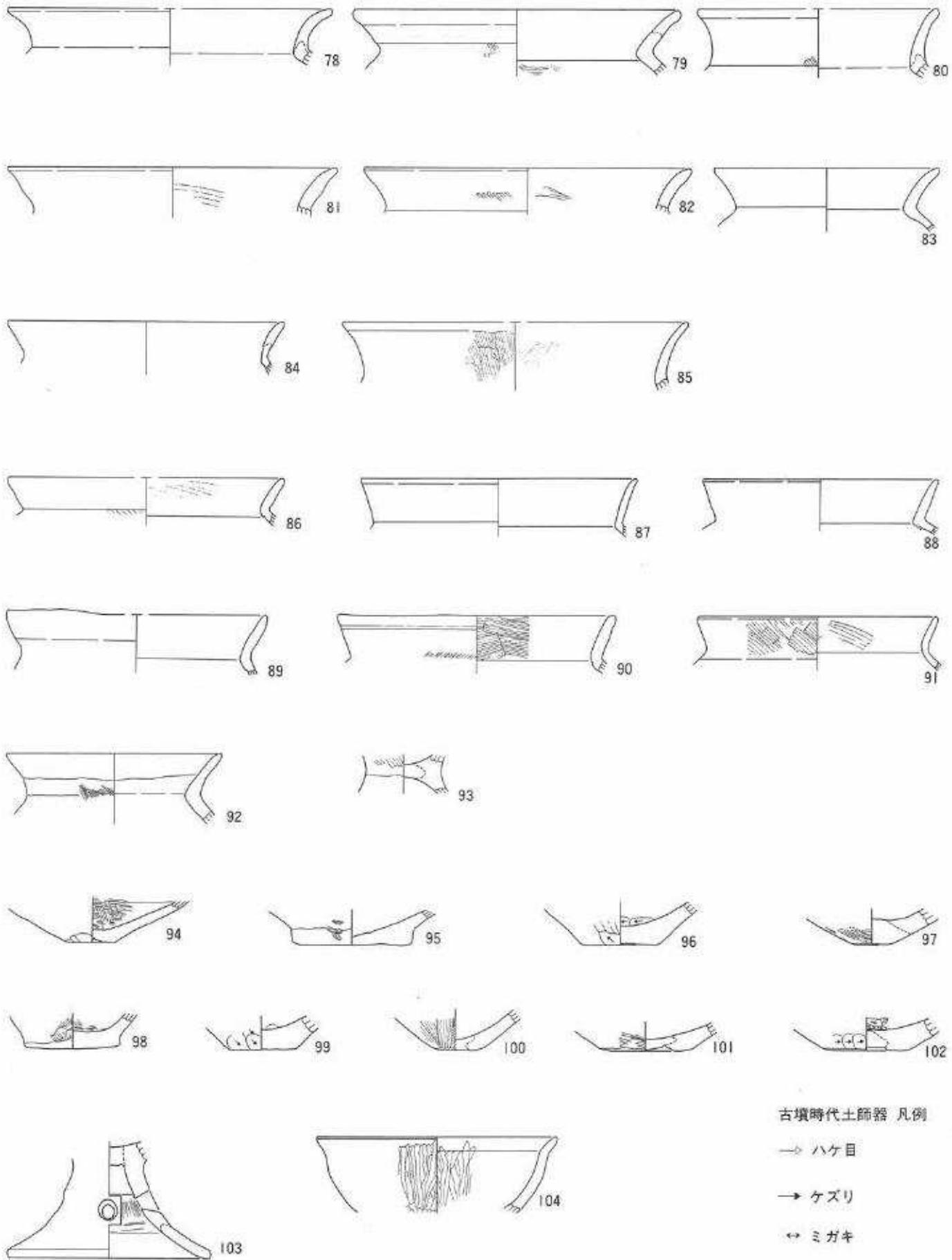
図 版







0 1 : 3 15cm



古墳時代土師器 凡例

→ ハケ目

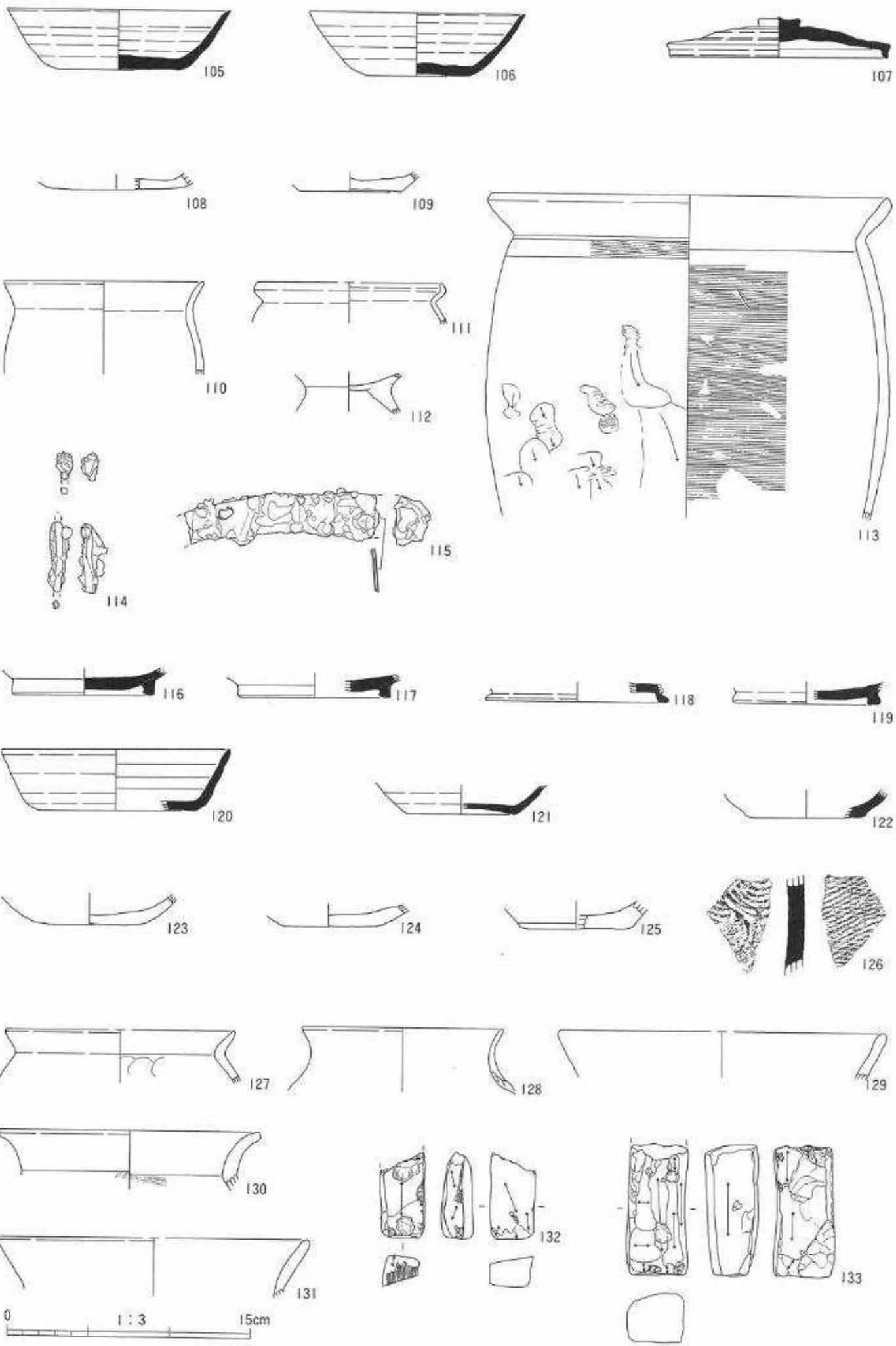
→ ケズリ

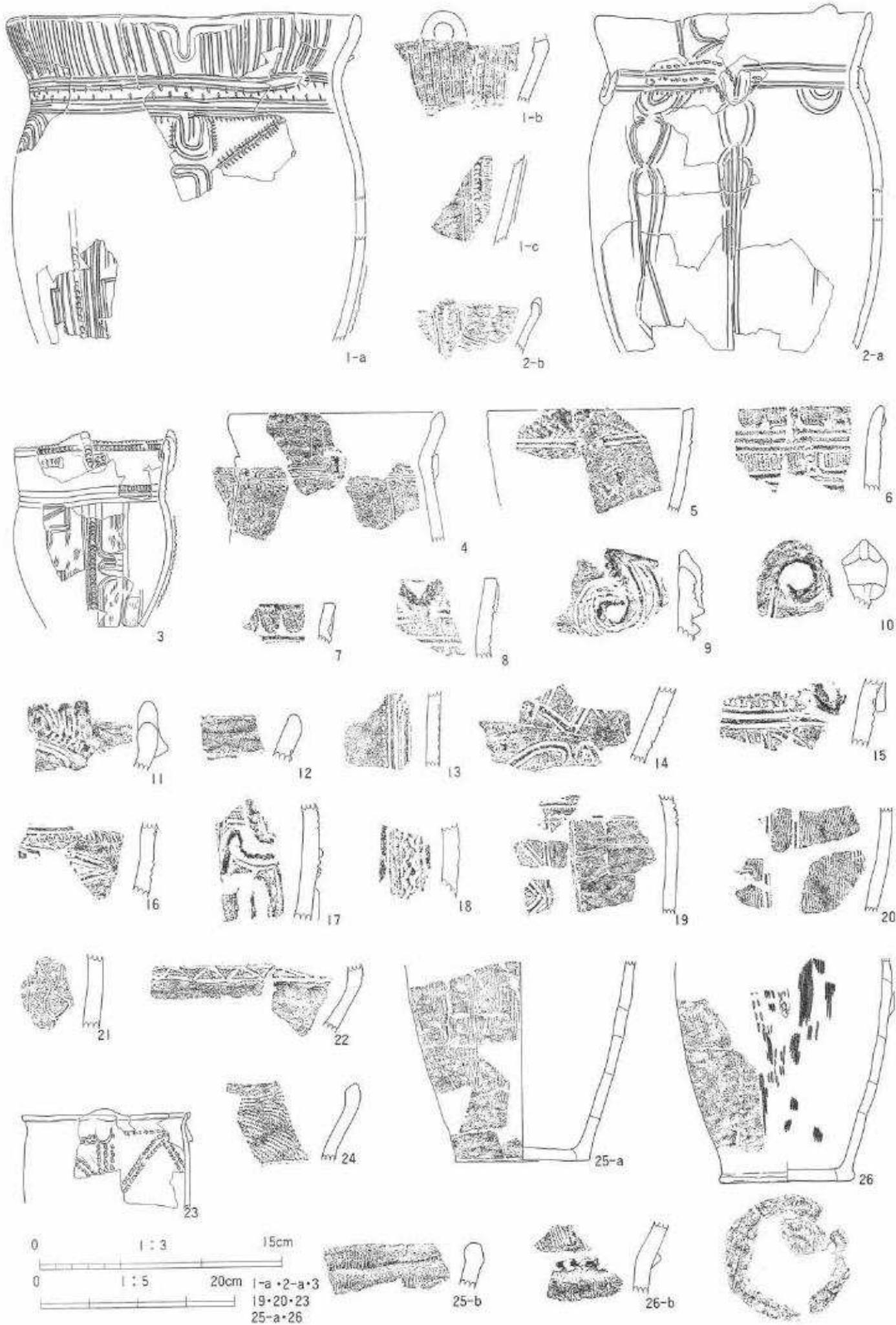
↔ ミガキ

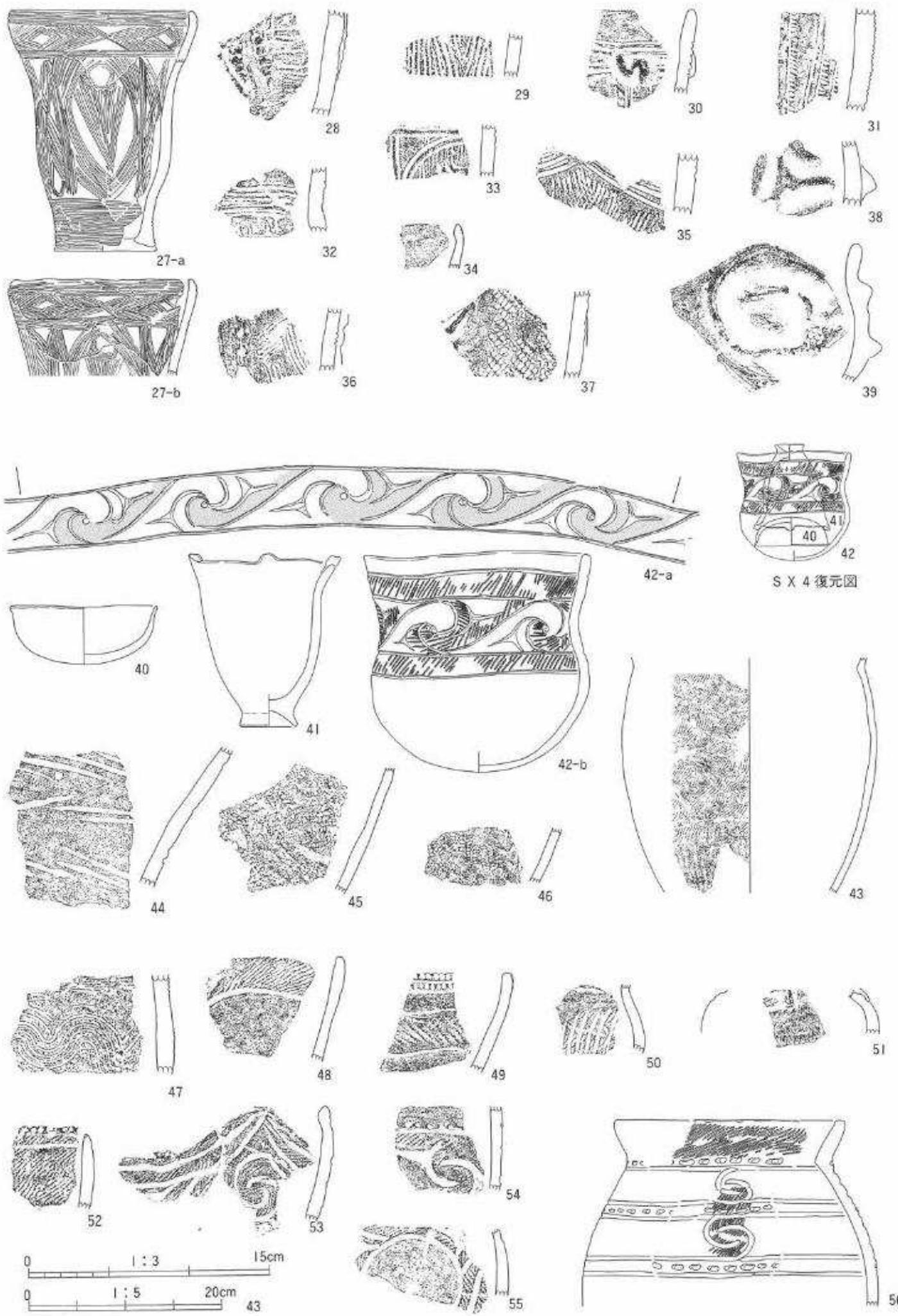
0 1 : 3 15cm

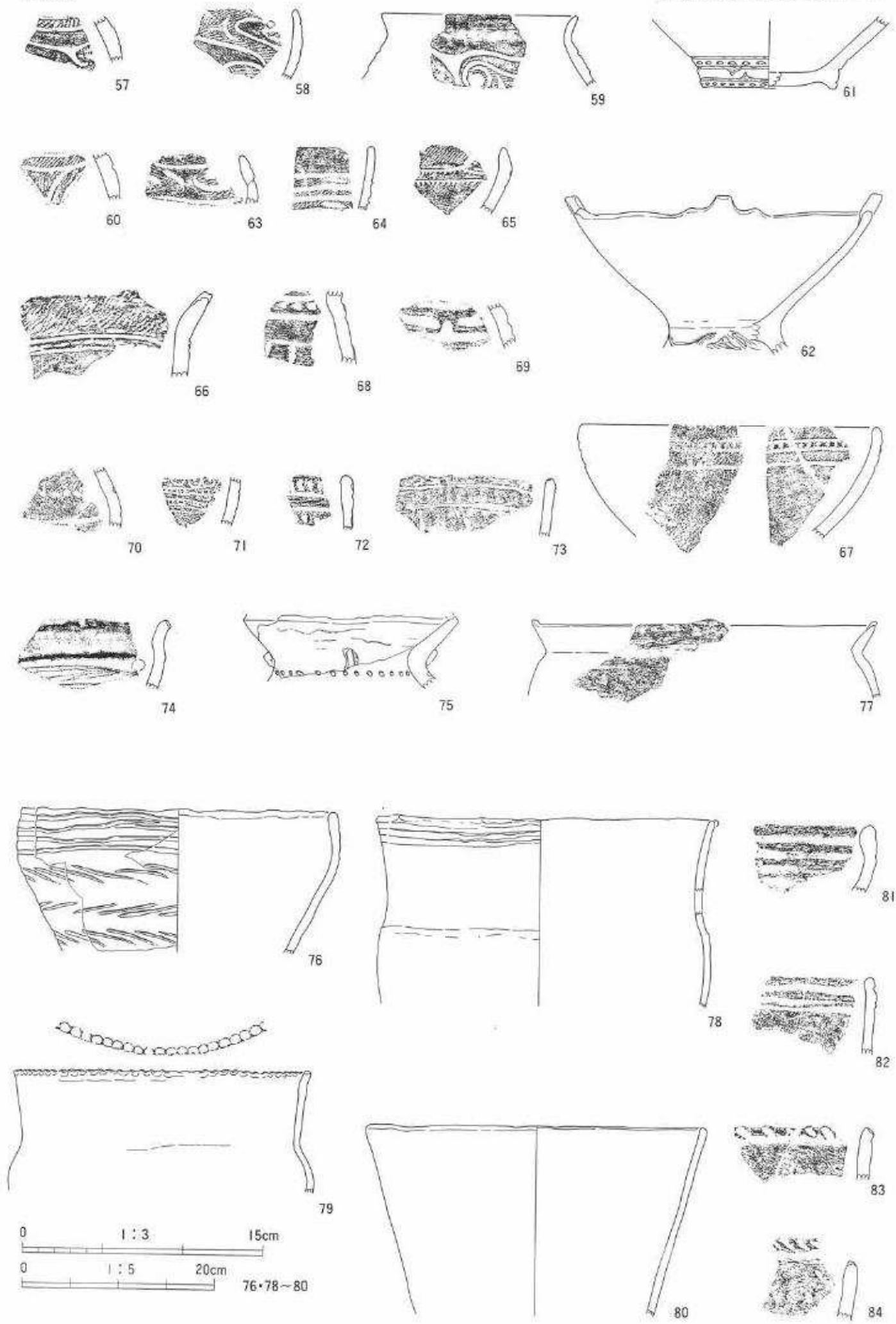
横引遺跡出土遺物実測図(5)

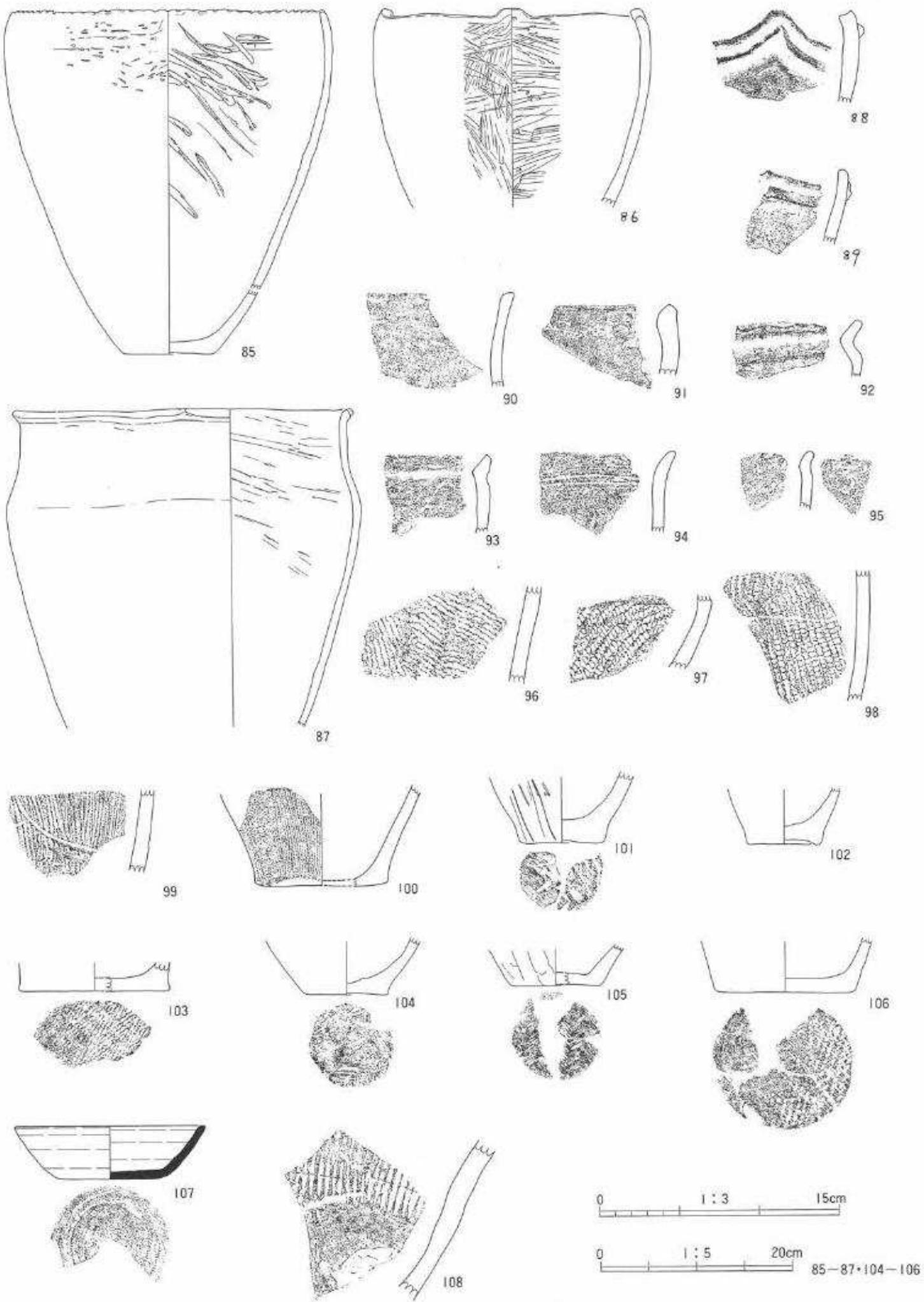
図版 5

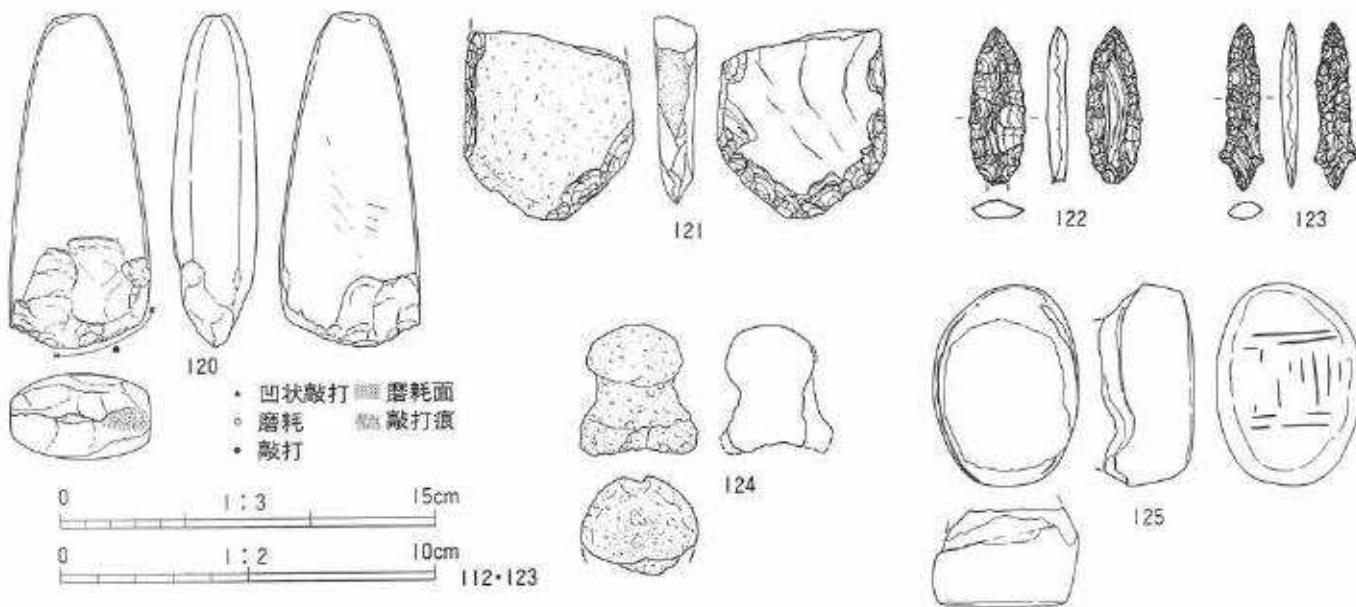
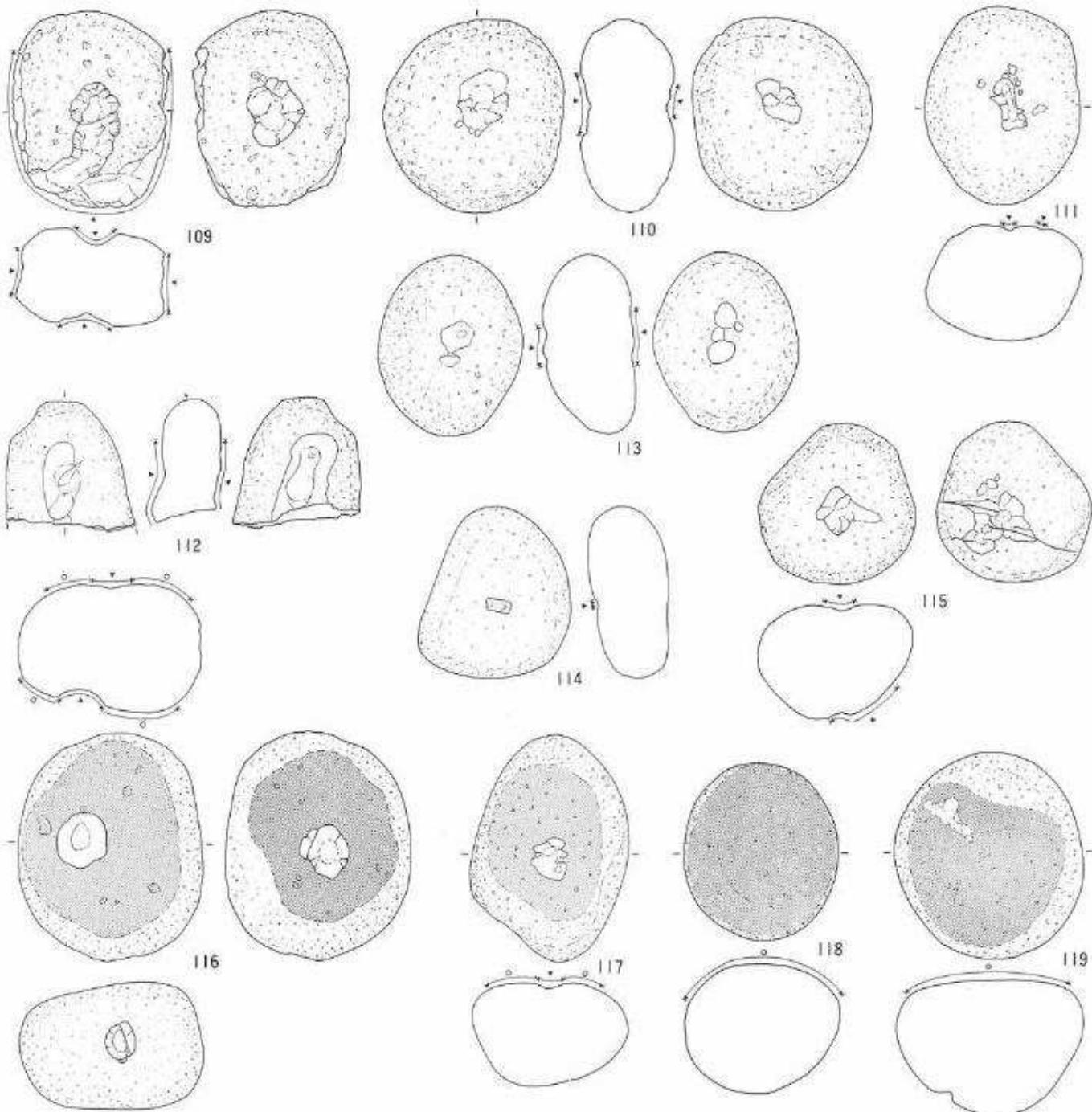


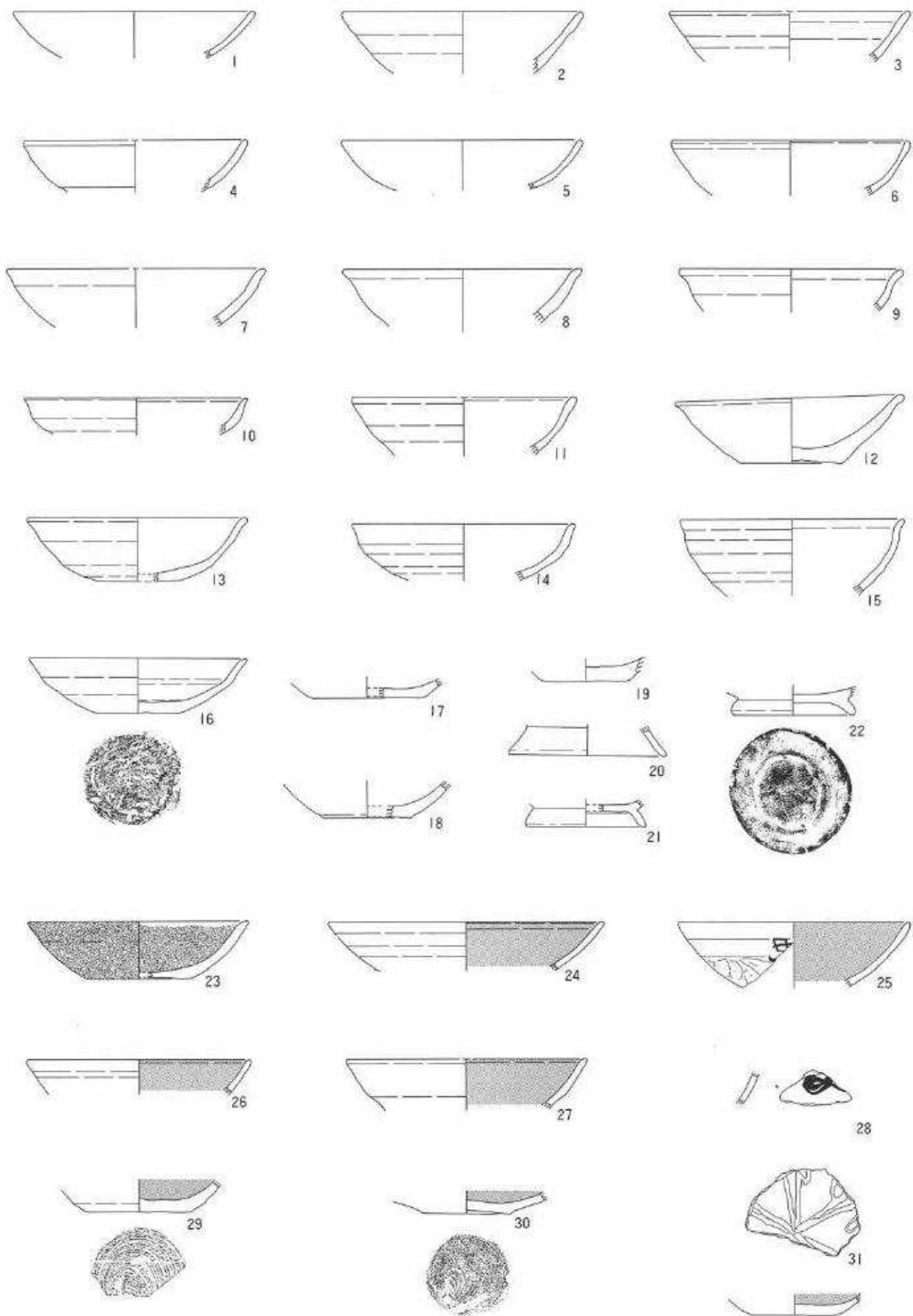








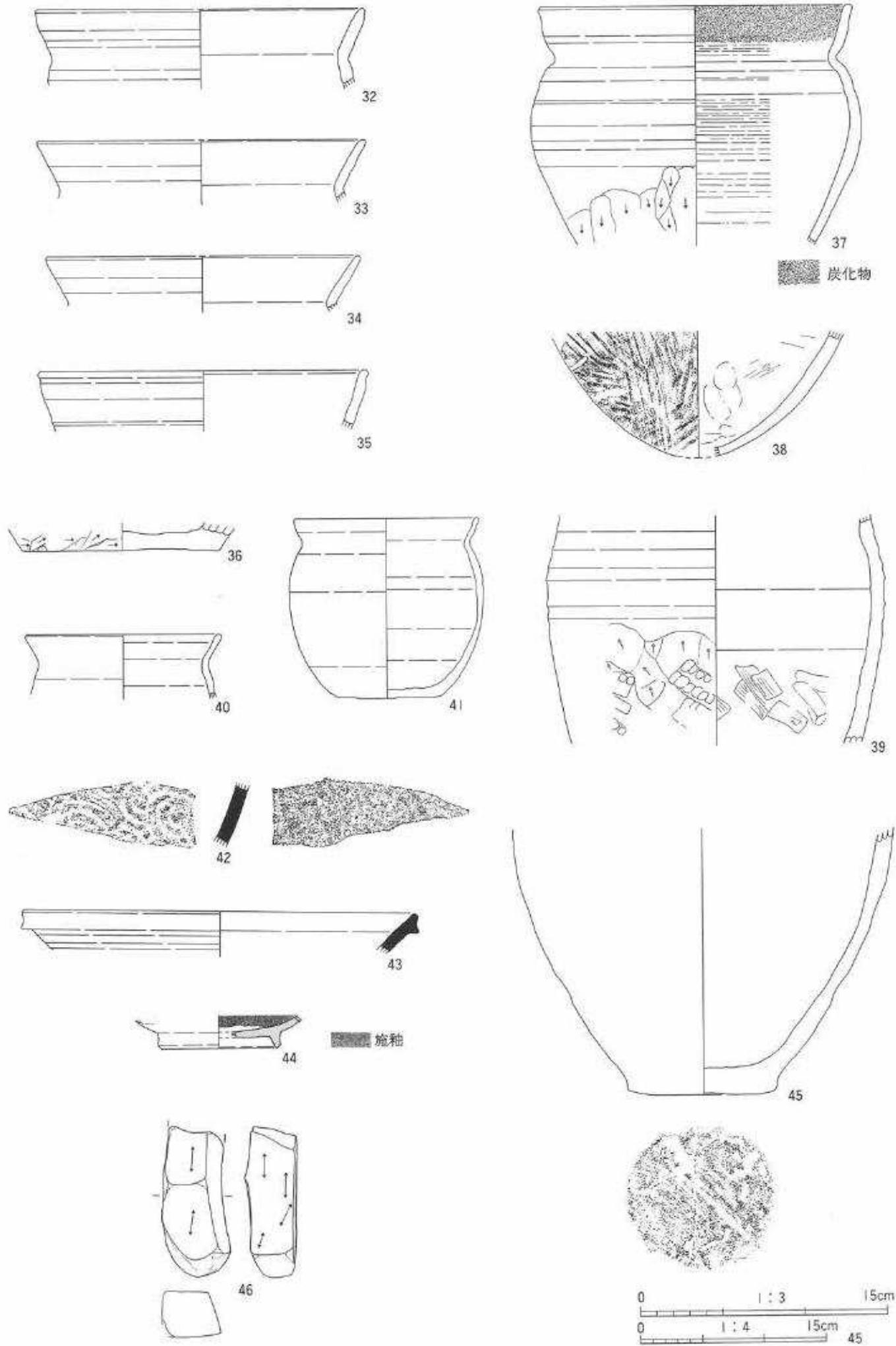




炭化物

黒色処理

0 15cm







SII・SII
(北から)



SII
(北から)



SII
(北から)



SK 3 碓出土状況
(南西から)



SK 3 完掘状況
(南西から)



南区 完掘状況
(南から)



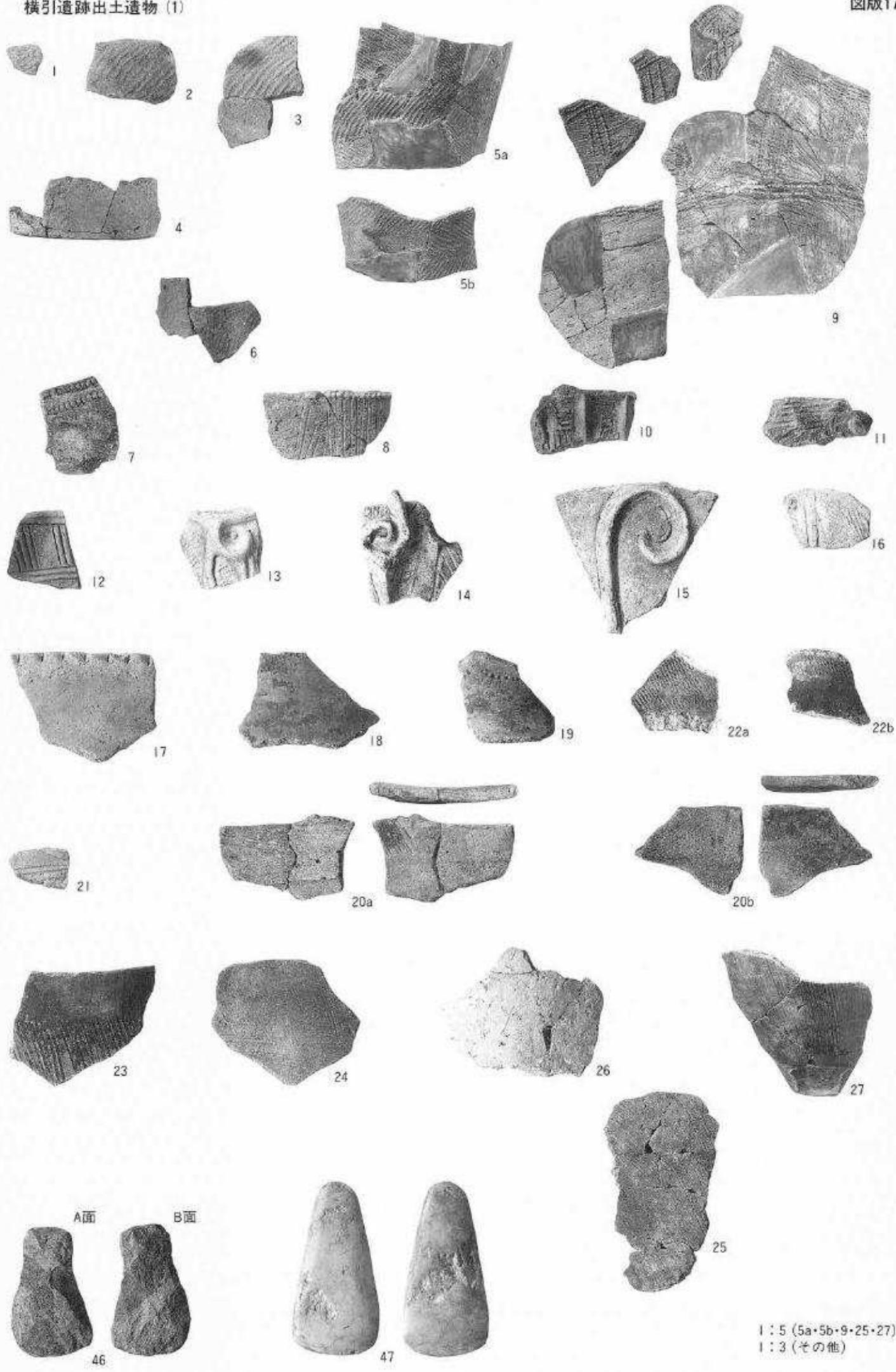
北区基本層序
(東から)



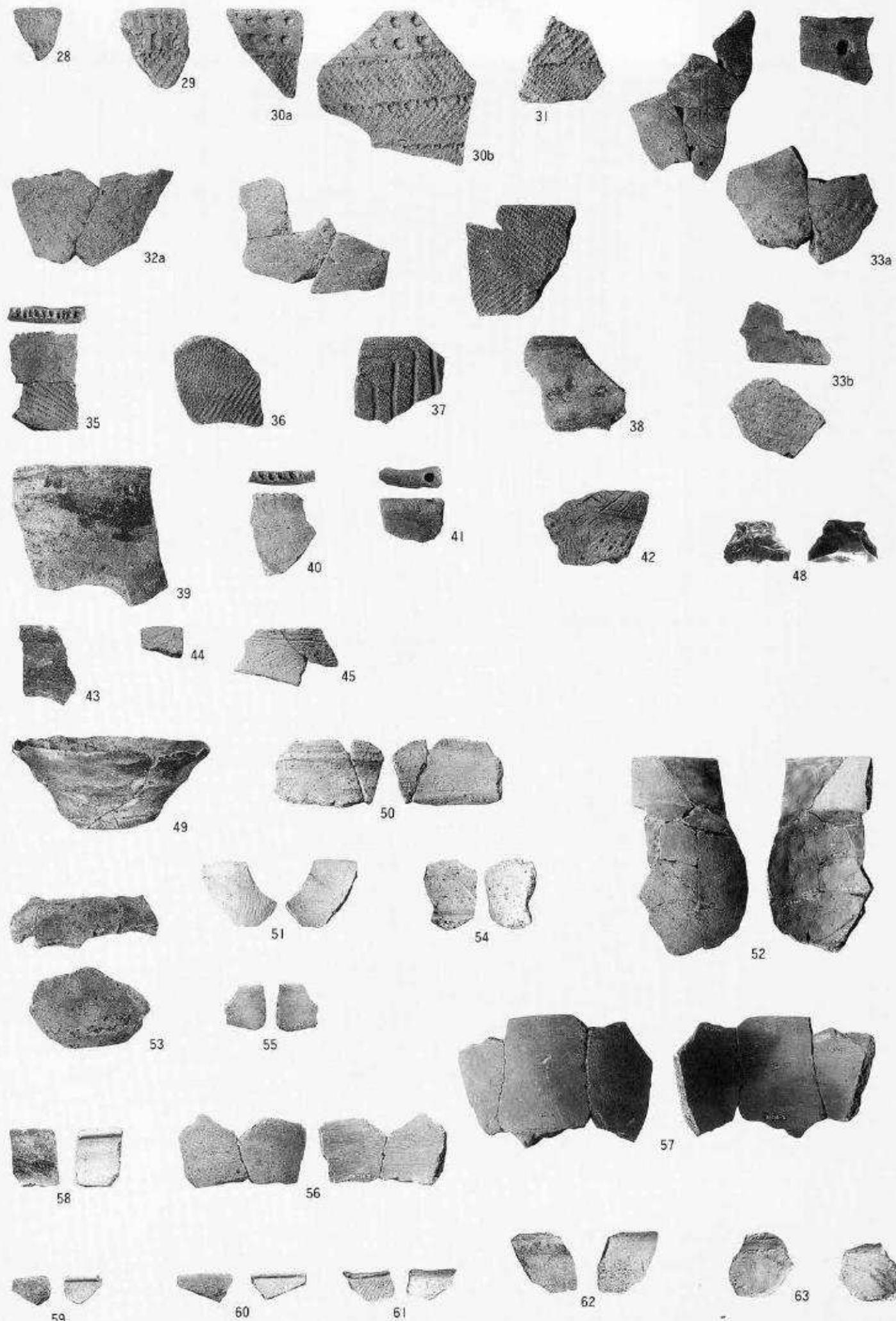
北区調査風景
(北から)



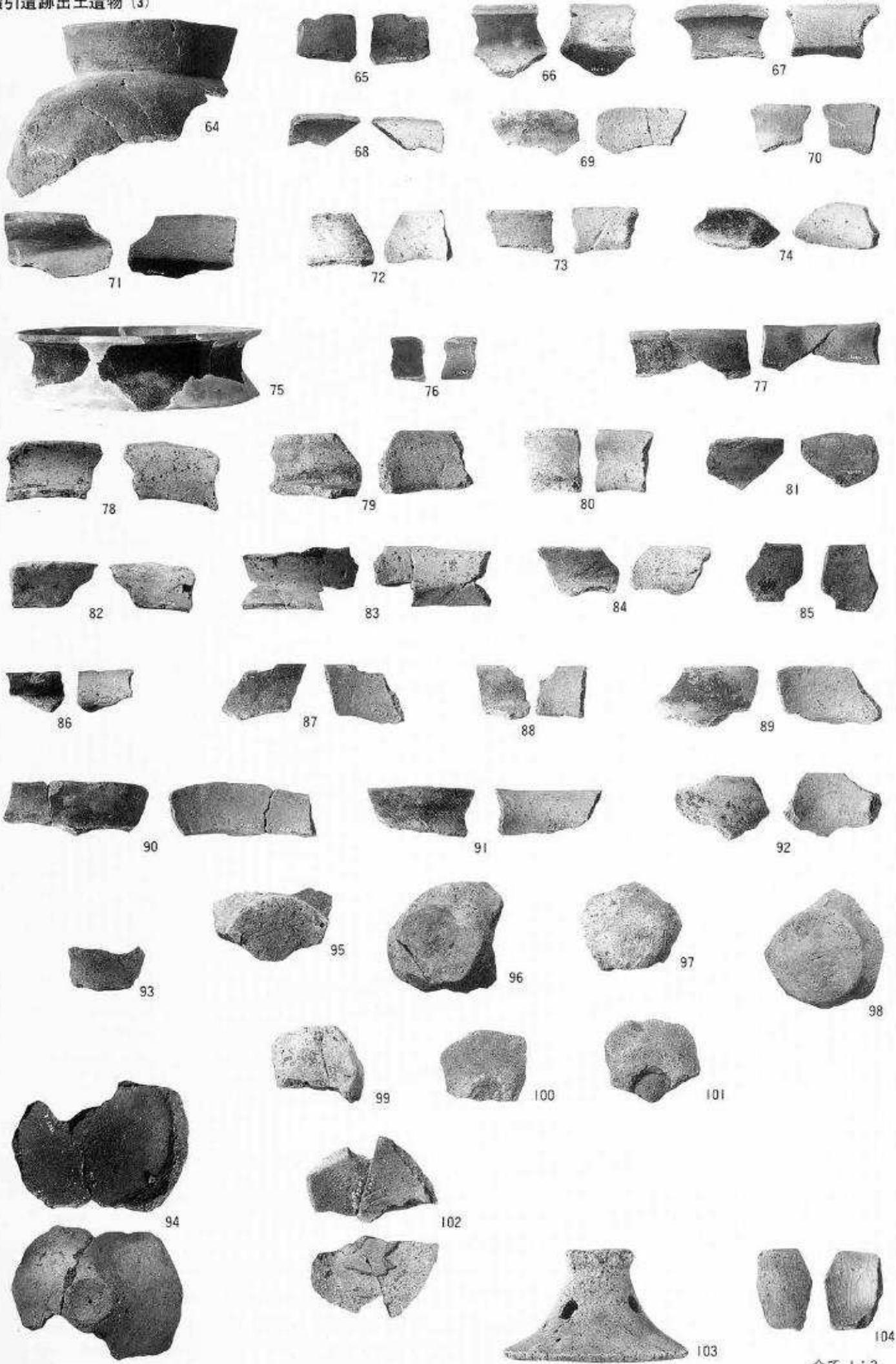
北区完掘状況
(南から)



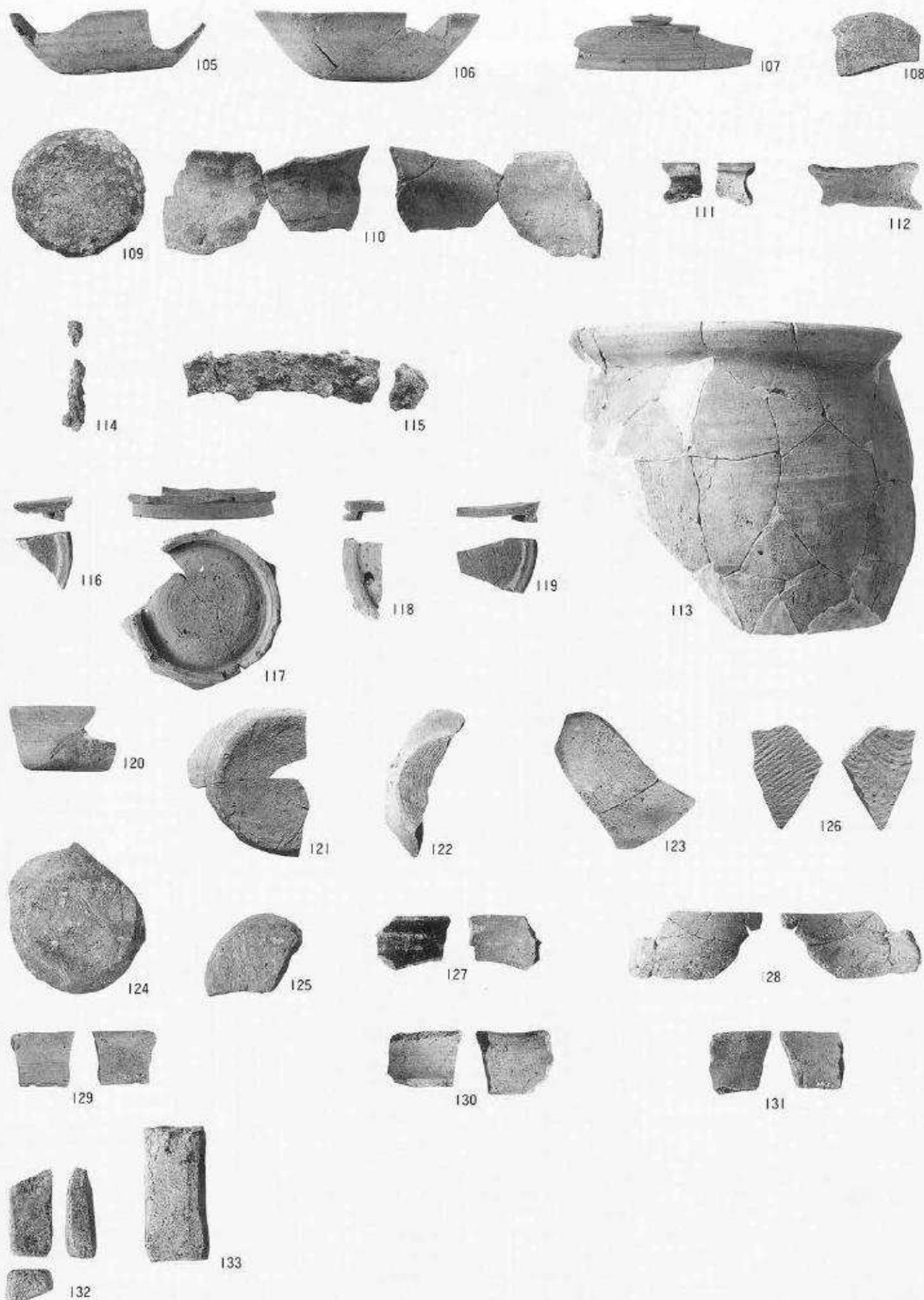
1:5 (5a・5b・9・25・27)
1:3 (その他)



1:2(48) 1:5(33a・33b) 1:3(その他)



全て 1:3





籠峰遺跡周辺の景観
(北東上空から)



調査区域全景
(南から)



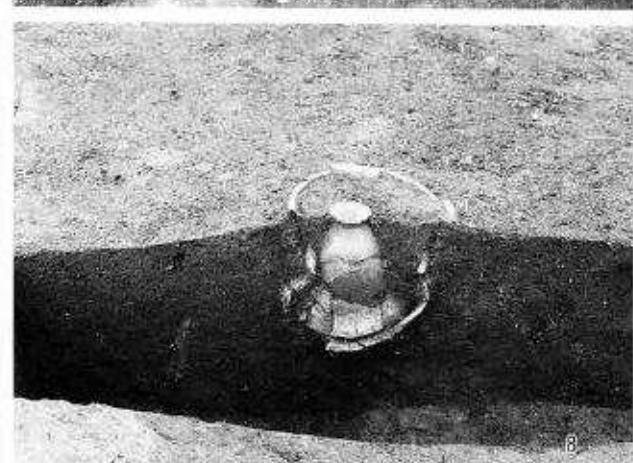
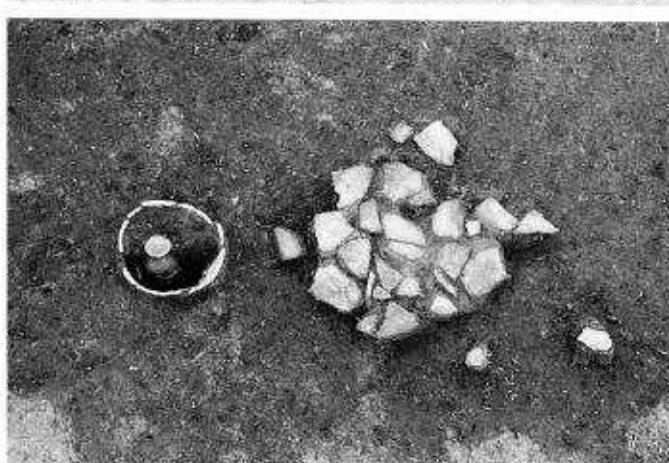
S.B.1・S.B.2付近
(南から)



S.B.1柱穴半截状況
(西から)



S.B.2柱穴半截状況
(南東から)



1 龍峰遺跡遠景
(西から)

3 S B 1 柱穴完掘状況
(西から)

5 S B 2 - P 4 半截状況
(南東から)

7 S X 4 検出状況
(東から)

2 土層堆積状況(3 D - 20)
(西から)

4 S B 2 柱穴完掘状況
(南東から)

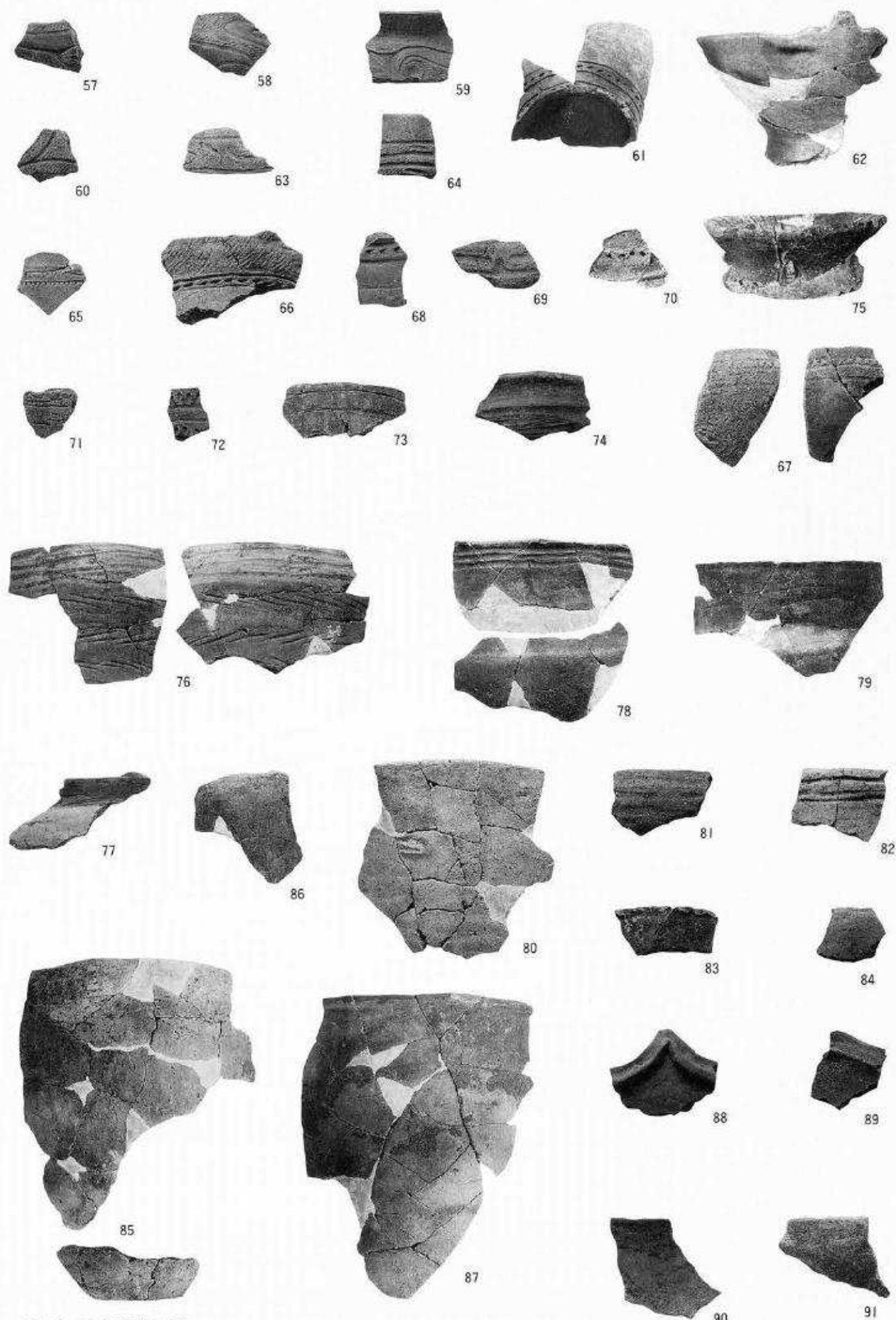
6 S K 5 (右)・S K 6 (左)
完掘状況(南から)

8 S X 4 埋設土器半截状況
(東から)

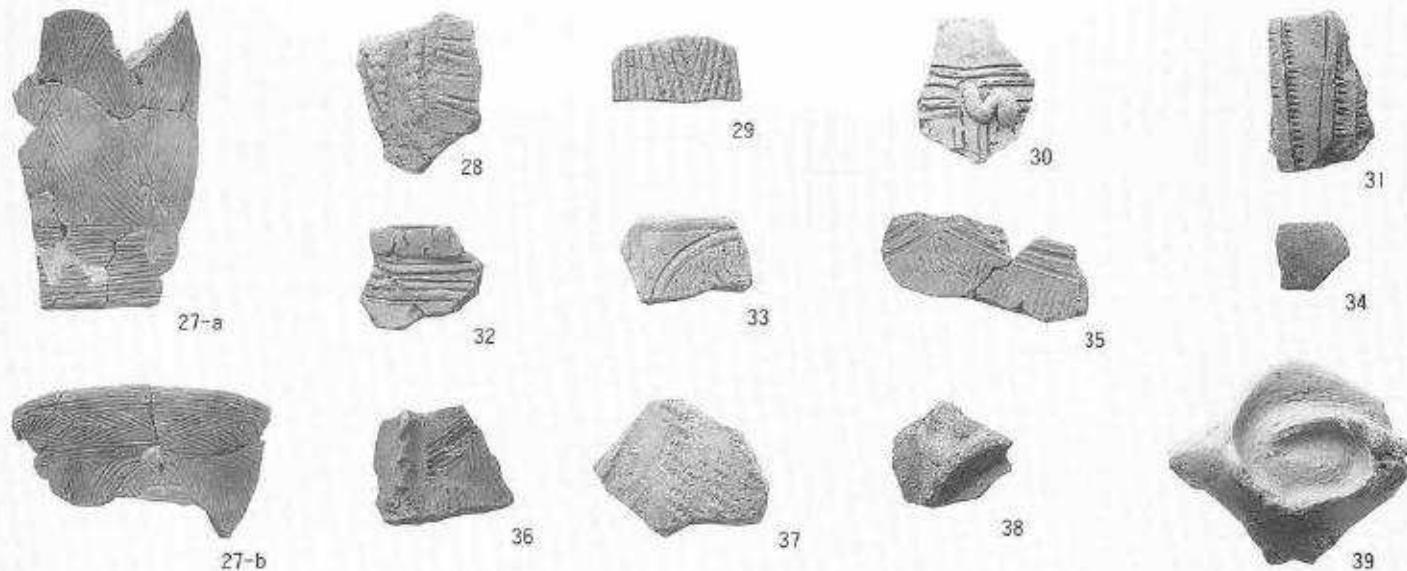


1・2・3・19・20・23・25-a・26(1:5)

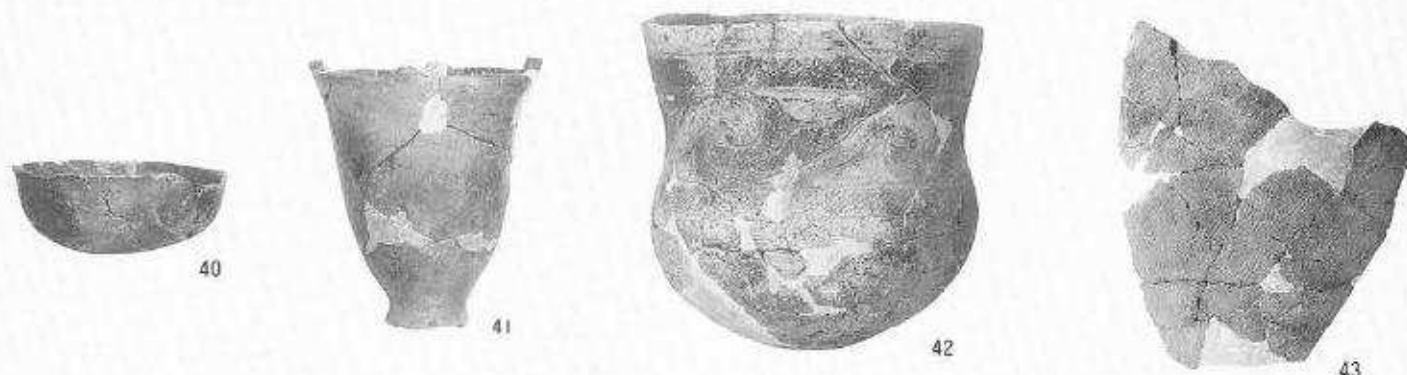
その他(1:3)



76・78～80・85・87(1:5)
その他(1:3)



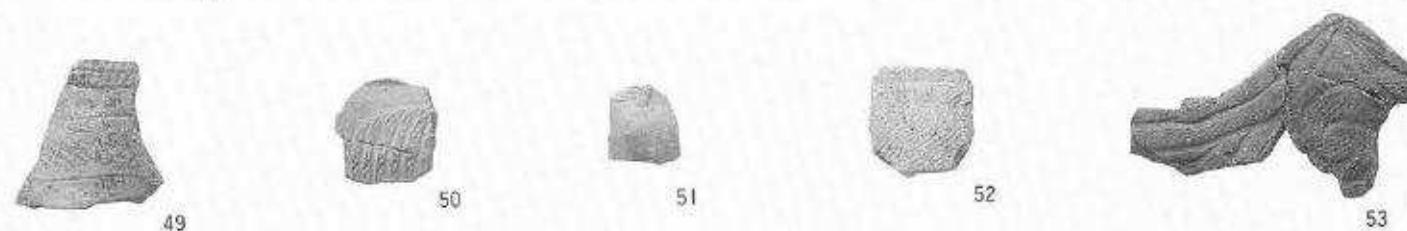
S X 4

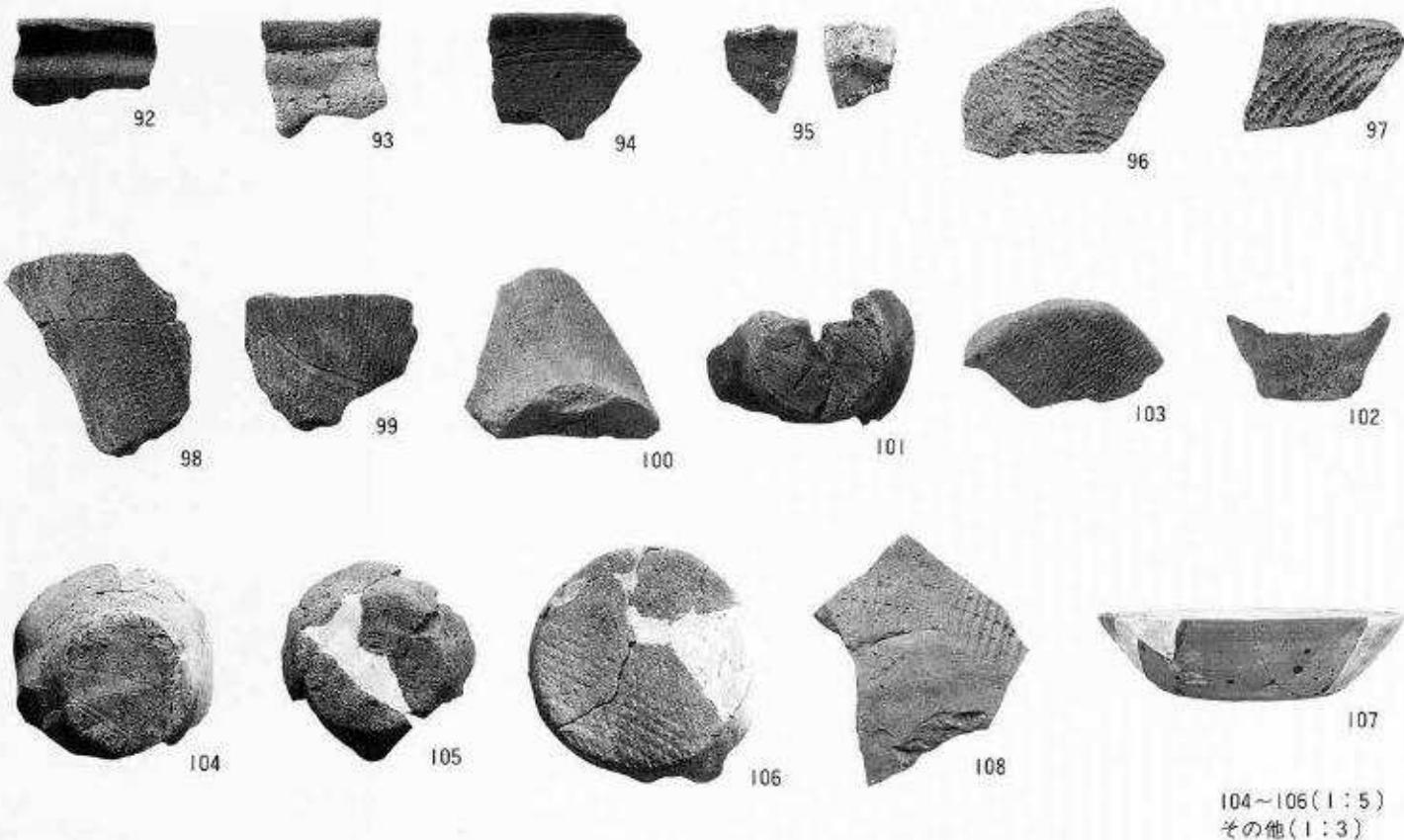


S K 5



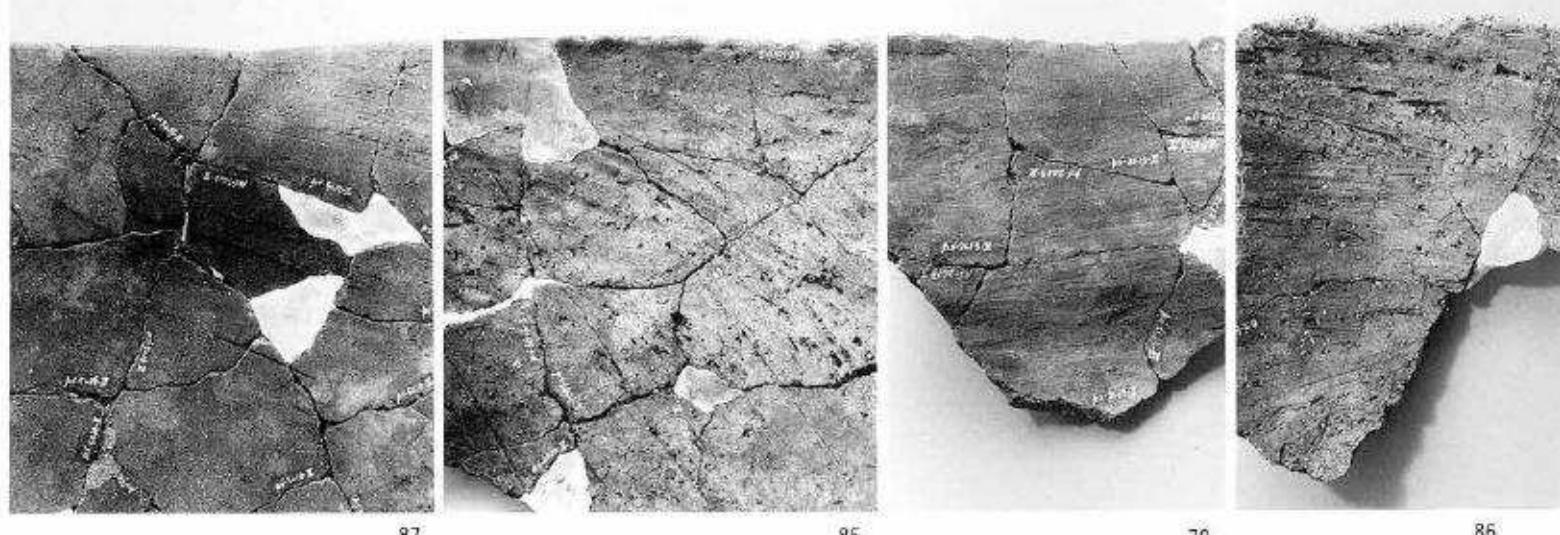
S K 6

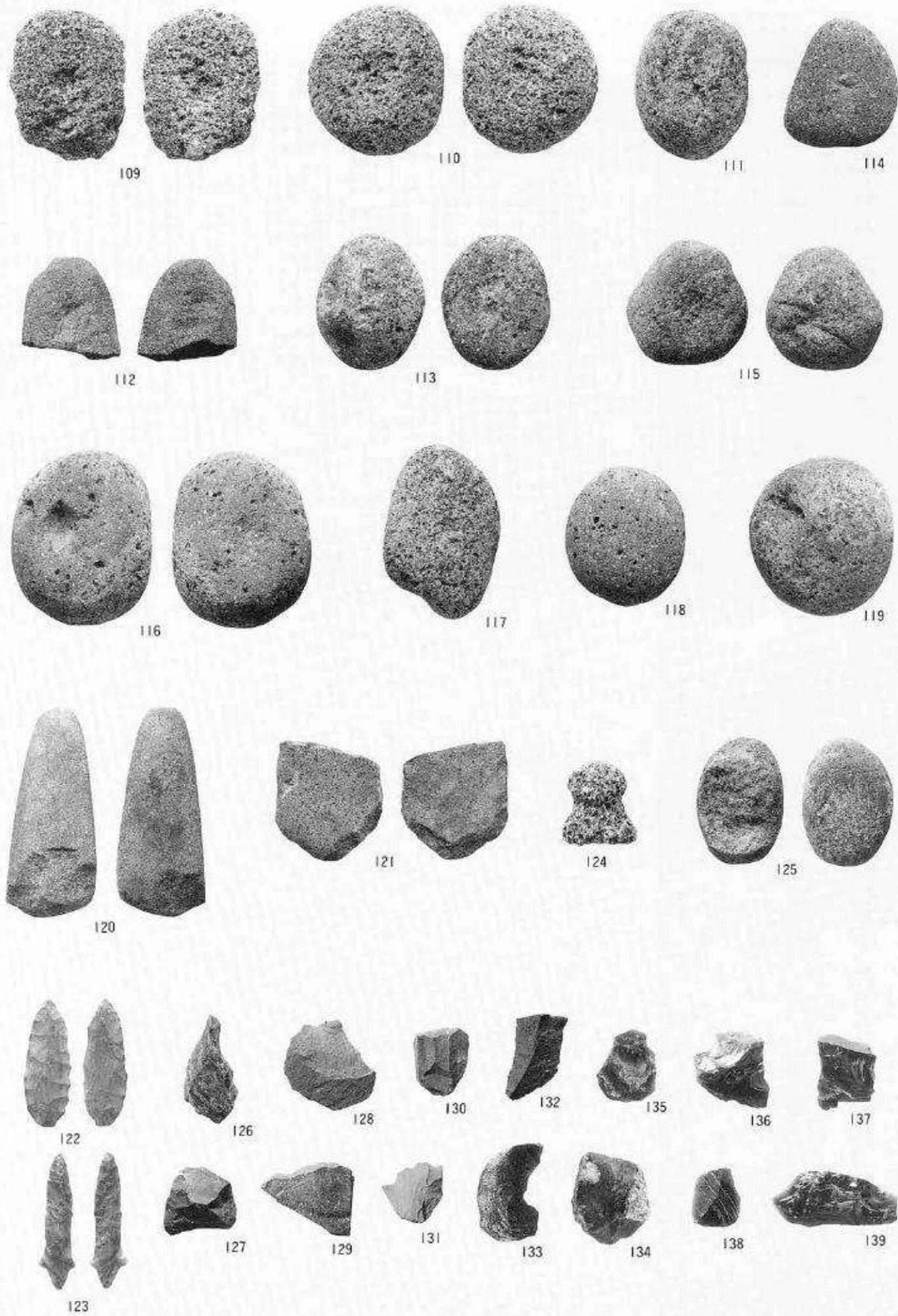
43(1:5)
その他(1:3)



104~106(1:5)
その他(1:3)

深鉢の内面調整





109~125・126~131(1:3)
122・123・132~139(2:3)





1 自然流路
検出状況
(南から)



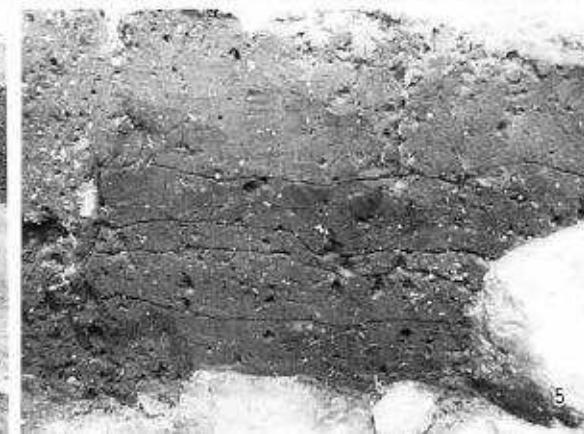
2 自然流路
完掘状況
(東から)



3 自然流路
土層断面 a-a'
(南から)



4 自然流路
土層断面 b-b'
(東から)



5 自然流路跡
土層断面 c-c'
(西から)



1 自然流路Ⅰ(6F)
遺物出土状況
(北から)



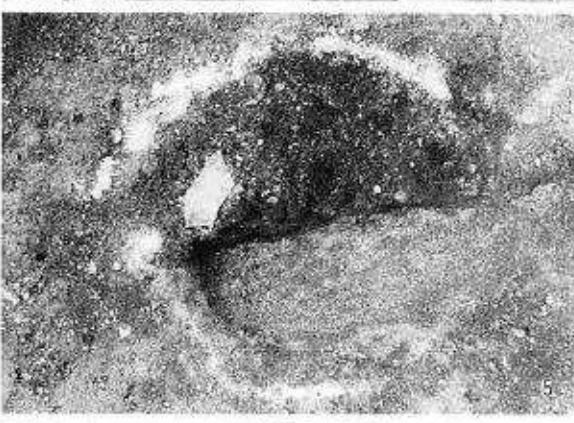
2 自然流路Ⅰ(5D)
遺物出土状況
(北から)



3 ピット1半截状況
(南から)



4 ピット1完掘状況
(東から)



5 ピット2半截状況
(南から)



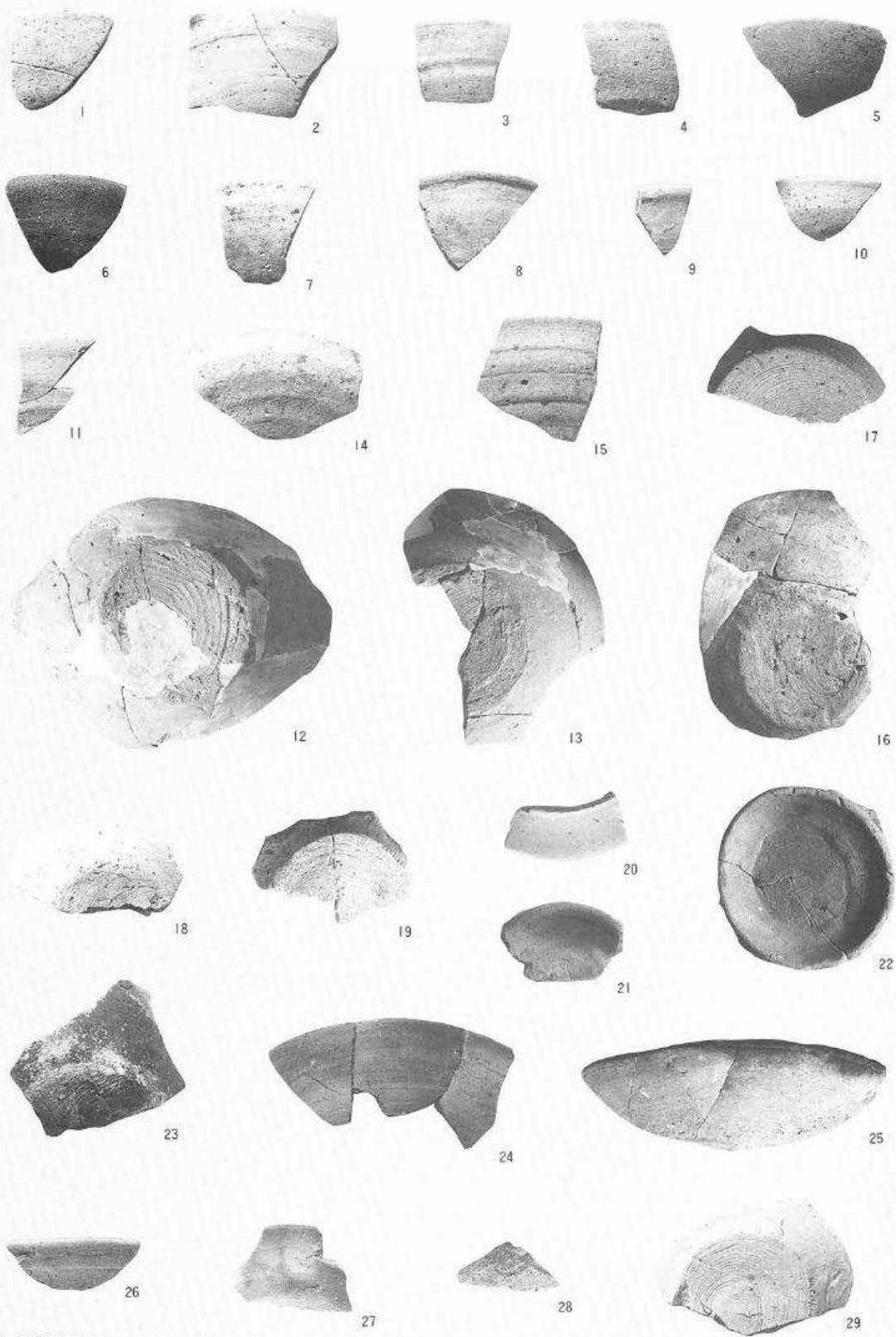
6 ピット2完掘状況
(南から)



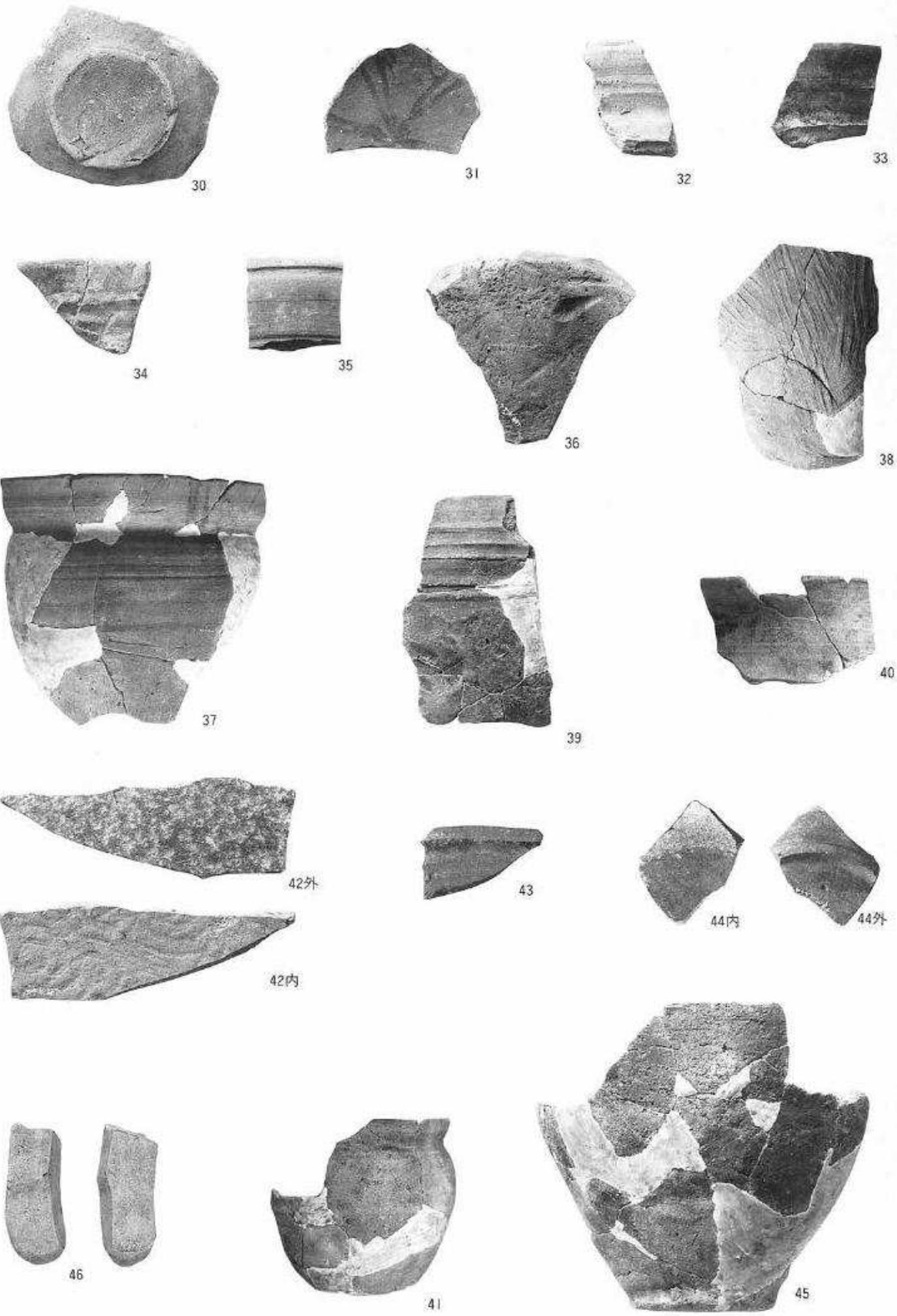
7 ピット5～8配列状況
(東から)



8 ピット3完掘状況
(南から)



1~29(1:2)



37~39・41・45(1:3)
46(1:4) その他(1:2)

報告書抄録

書名	横引遺跡 龍峰遺跡 柳平遺跡
副書名	上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第74集
編著者名	小池義人 立木(土橋)由理子 大滝良夫 星奈津子 山崎天
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒951 新潟県新潟市一番堀通町5923-46
発行年月日	1996年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横引遺跡	新潟県中頸城郡中郷村 大字市星字横引(乙) 687番地2ほか	15-546	86	36度 57分 27秒	138度 13分 20秒	19930510～ 19930706	7,800m ²	上信越自動車道建設
龍峰遺跡	新潟県中頸城郡中郷村 大字福荷山新田 660番地1ほか	15-546	3	36度 56分 40秒	138度 13分 7秒	19920616～ 19920625 19930624～ 19930820	4,200m ²	同上
柳平遺跡	新潟県中頸城郡妙高村 大字関山字柳平 5398番地ほか	15-547	52	36度 55分 32秒	138度 13分 5秒	19930830～ 19930907 19940509～ 19940610	1,600m ²	同上
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
横引遺跡	遺物散布地	縄文・古墳 平安	竪穴住居跡2基(平安) 土坑1基(縄文)			縄文土器・石器 土師器・須恵器・鉄器		
龍峰遺跡	集落跡	縄文・平安	柱穴列2基(縄文) 土坑2基(縄文) 埋設土器1基(縄文)			縄文土器・石器 須恵器		新潟県指定 史跡隣接地
柳平遺跡	遺物散布地	平安・近世	自然流路2条(平安) ピット9基			土師器・須恵器 灰釉陶器・縄文土器		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第74集		
上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ		
横引遺跡	龍峰遺跡	柳平遺跡
平成8年3月25日印刷	発行 新潟県教育委員会	
平成8年3月31日発行	編集 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	
	〒951 新潟市一番堀通町5923-46	
	電話 (025)223-5642	
	FAX (025)228-1762	
	印刷 津北都	
	〒950 新潟市笹口1-8	
	電話 (025)244-8255	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第74集『横引遺跡 箕峰遺跡 柳平遺跡』 正誤表追加

2018年11月追加

頁	位置	誤	正
抄録	横引遺跡 北緯	36度57分27秒	36度57分17秒
抄録	箕峰遺跡 北緯	36度56分40秒	36度56分37秒
抄録	箕峰遺跡 東経	138度13分07秒	138度13分04秒
抄録	柳平遺跡 北緯	36度55分32秒	36度55分30秒
抄録	柳平遺跡 東経	138度13分05秒	138度13分00秒

『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第74集
上信越自動車道関係発掘調査報告書 I 横引遺跡 箕峰遺跡 柳平遺跡』

正誤表

頁	行	誤	正
4	第2図	矢代川	矢代川
14	12	混入物は層と同様だが	混入物はIV層と同様だが
30	2	埋設土器一基	埋設土器1基
30	6	SK3(第19図)	SK3(第17図)
32	14	SK5に近接し	SK6に近接し
35	3	丁寧ナデ	丁寧なナデ
38	27	(127・1286~139)	(127~139)
43	2	平面形は長軸24cm	平面形は長軸24cm
43	3	覆土はで締まりがあり	覆土は単層で締まりがあり
44	16	長甕(32~41)	長甕(32~39)